

342  
425



始



12411-12  
1421

法學士岡實著

# 工場法論

東京 有斐閣書



全

2. 10. 27

342

425

# 序

工場法ノ制ハ文明諸國ノ通有スル所ニシテ蓋近世ノ經濟組織ニ於テ缺クヘカラサルモノニ屬セリ故ニ苟モ我社會ノ改良ヲ念ヒ國運ノ前途ヲ慮ル者ハ之ヲ忽諸ニ附スヘカラサルヲ知ル於是乎政府モ其制定ニ勉メ明治三十年案一タヒ成リ將ニ議會ニ提出セラレントシテ果サス翌年農商工高等會議ニ諮問セララル爾來改刪更訂ヲ經テ明治四十四年三月其發布ヲ見ルニ至レリ若夫レ之レカ實施ノ曉ニ至ラハ我カ勞民ノ體力ヲ維持シ其智識ヲ養ヒ品性ヲ高メ以テ國家工業ノ基ヲ安ンスルニ足ルヘシ現今歐米各國ニ於テ勞働問題ノ研究盛ニ行ハレ之レ

序

一

ニ關スル著書モ嘗ニ汗牛充棟ノミナラサルナリ然ルニ  
我工場法ノ發布日尙ホ淺ク之レヲ論スルノ書モ寥々晨  
星ノ如シ今岡君工場法論ヲ著ハシ將ニ之レヲ世ニ公ニ  
セントス余嘗テ工務局ニ在リテ法案ノ制定ニ與カリシ  
ヲ以テ茲ニ一言ヲ徵セラル未タ其書ノ全斑ヲ窺ハスト  
雖君カ其職ニ在リテ研鑽考覈ノ資ヲ以テ此ノ書ヲ著ス  
其所說ノ正確ニシテ我勞働社會ノ改良發達ヲ裨補スル  
ヤ蓋シ鮮少ニアラサルヘシト信ス

大正二年八月

志村源太郎

## 序

岡實君夙ニ政治經濟ノ學ヲ修メ農商務省ニ入リテ工務  
課長ト爲リ進ミテ工務局長ト爲ルヤ銳意本邦ニ於ケル  
工場及職工ノ實狀ヲ調査シ諸外國ニ於ケル工場制度ヲ  
參酌シテ適切ナル工場法案ヲ起草シ該法案ハ遂ニ帝國  
議會ノ協贊ヲ經テ法律トシテ發布セラルルニ至レリ惟  
フニ工場法ノ制定ハ多年朝野ノ宿題タリシモノナルニ  
能ク其ノ解決ヲ見タル所以ノモノハ素ヨリ時ノ農商務  
大臣タル大浦子ノ識見ト勇斷トニ由ルト云フト雖而モ  
亦滿腔ノ熱誠ト積年ノ蘊蓄トヲ捧ケテ子ヲ補佐シタル  
君ノ力ニ俟タスンハアラサルナリ而シテ君今ヤ工場法

論ヲ著ハシ世ニ公ニセントス則チ其ノ學界ニ貢獻スル  
所ノ甚大ニシテ世間ニ裨益スル所ノ尠少ナラサルヤ固  
ヨリ知ルヘキナリ是余カ先本書ヲ歡迎スル所以ナリ然  
レトモ余カ本書刊行ノ舉アルヲ聞キ衷心欣喜ニ堪ヘサ  
ル所以ノモノ別ニ又有リ蓋工場法ハ已ニ制定セラレタ  
リト雖而モ之カ實施ニ付テハ大ニ準備ヲ要スルモノア  
リ是ヲ以テ君ハ更ニ各種ノ工業ニ涉リテ精細ナル調査  
ヲ遂ケ諸外國ニ於ケル工場法實施ノ狀況ニ付テ亦詳密  
調査スル所アリ若シ夫レ法律施行上必要ナル命令其ノ  
他ニ至リテハ皆既ニ其ノ成案ヲ得タルヲ信ス然レトモ  
法令ノ主旨精神ヲ明ニシテ世人ヲシテ之ヲ周知セシメ

當業者其ノ他ノ關係者ヲシテ豫メ之ニ備ヘシムルニ非  
サレハ能ク圓滿ナル効果ヲ收メ難キモノアリ岡君蓋此  
ニ見ル所アリ其ノ蘊蓄セル識見ト調査セル事項トヲ本  
書ニ收メ以テ法令ノ主旨ヲ明ニシ其ノ精神ヲ徹底セシ  
メントス然レハ則チ本書ノ刊行亦工場法實施準備ノ一  
事業ニ外ナラスシテ君ノ該事業ニ於ケルヤ眞ニ至レリ  
盡セリト謂フヘシ是即チ余カ衷心本書ノ刊行ヲ欣ヒ著  
者ノ勞ヲ感謝スル所以ノ最大ナル理由ナリトス抑明治  
以降法令ノ發布制定セラレタルモノ千百ニシテ足ラス  
ト雖而モ周密慎重ナル調査ヲ重ネタルコト工場法ノ如  
キハ甚タ多カラスト謂フヲ得ヘキカ其ノ來歴ハ本書ニ

序  
詳ナルヘキヲ以テ今贅セス本法已ニ爾ク慎重ナル調査  
ニ成リ之カ實施亦爾ク周到ナル準備ヲ以テス則チ工場  
法ノ一旦施行セラルルニ及ンテ必スヤ凝滯スル所ナク  
能ク完全ナル成績ヲ收メンコト期シテ待ツヘキナリ然  
リ而シテ工場法已ニ發布セラレテ茲ニ三年而モ其ノ未  
タ施行ニ至ラサル所以ノモノハ同法ノ施行ニ付テハ新  
ニ經費ヲ要スルモノアルニ先年來政府ニ於テ暫ク一切  
ノ新事業ヲ延期シ先一般行政及財政ノ整理ヲ行ヒ然ル  
後更ニ必要ナル事業ヲ施設スルノ方針ヲ採リタルニ因  
ラスンハアラス然ルニ是等ノ整理タル今ヤ已ニ一段落  
ヲ告ケ之カ完成ヲ見ルコト遠キニ非サルカ如シ然ラハ

序

四

則チ事體ノ緊切ニシテ準備ノ整頓セルコト工場法ノ如  
キモノハ之カ實施ヲ見ルノ日亦將ニ近キニ在ラントス  
此時ニ當リテ本書ノ刊行セラルルアリ寔ニ時機ノ宜キ  
ヲ得タルモノト謂フヘシ是亦余カ衷心ノ欣喜一層ヲ加  
フル所以ナリ乃チ序文ノ需アルニ及ンテ自ラ揣ラス敢  
テ所感ヲ披瀝シテ以テ之ニ充ツト云フ

大正二年八月

辱知 窪田靜太郎

# 序

多年ノ懸案タリシ工場法ハ已ニ調査ノ時代ヲ離レテ實行ノ時代ニ進ミタリ此時ニ當ツテ先キニ法案ノ起章ニ從事シ尙ホ實施ノ局ニ當ラルヘキ岡君ノ本書ヲ公刊セララルハ實ニ時機ノ宜シキヲ得タルモノニシテ我國社會政策ノ發展ニ多大ノ貢獻ヲ爲スモノト云ハサルヲ得ス

顧フニ我國工場法カ勞働者ノ保護ニ就キ欠陥ノ少カラサルコトハ争フ可ラサルノ事實タリ工場法ノ公表セララルヤ獨逸ノ先輩某氏ハ遙カニ書ヲ寄セテ曰ク貴國工場法ノ不備實ニ極マレリ此ノ如キ法律ノ制定ヲ以テ自

ラ甘ンセサルヲ得サル貴國社會改良家ノ心事ハ洵ニ同  
情ニ堪ヘスト余ハ之ニ答フルニ適當ノ辭ナキニ苦ミタ  
リ抑モ此批評タル言ニ海外識者ノ口ニ上ルノミナラス  
我國ノ同志ニ在ツテ亦同一ノ言ヲ爲セル者ナキニ非ラ  
ス然リト雖モ事ニ順序アリ物ニ歴史アリ一舉功ヲ奏ス  
ルヨリモ寧ロ進歩ノ堅實ナルヲ望マサルヲ得ス我國當  
初ノ工場法ニ於テ形式徒ラニ美ニシテ實行之ニ伴ハサ  
ルコトハ余輩ノ與セサル所ナリ  
余ノ見ル所ニ依レハ我國工場法ニ於テ一種ノ特徴ヲ存  
シ以テ海外ニ誇ルヘキモノアリ他ナシ其ノ内容ノ一部  
トシテ工場主ヲシテ災厄ニ關スル救濟ノ責任ヲ負ハシ

メタルコト是ナリ歐米諸國ノ社會立法ニ於テハ工場法  
ト労働保險トヲ以テ各特別ノ法律ト爲シ災厄救濟ニ關  
シテハ之ヲ労働保險ニ讓ルヲ以テ例トセリ然ルニ我國  
工場法ニ於テ此規定ヲ存セルハ外國ニ比類ナキ立法ノ  
長所ト云ハサルヲ得ス且又法案カ議會ノ問題タル時ニ  
當リ政府當局ハ災厄ノ豫防ニ關シ最モ意ヲ用キ充分ノ  
監督ヲ施スヘキコトヲ反覆言明セリ之レ我國工場法ノ  
實施セラルルヤ年齢時間徹夜業等ノ制限ニ就テハ不備  
ノ點固ヨリ多カラシモ災厄ノ豫防及救濟ニ就テハ其ノ  
効果ノ見ルヘキモノアルハ亦疑ヲ容レサルナリ  
羅馬ノ古城ハ一日ニシテ成ルニ非ラス我國社會政策ノ



前途ハ尙ホ遼遠ナリ工場法ニ就テモ余ハ朝野ノ同志ト  
與ニ隱忍持久以テ他日ノ大成ヲ期セント欲ス余ハ著者  
カ本書ヲ公刊スルノ意ヲ諒シ茲ニ蕪辭ヲ卷首ニ題シ之  
ヲ江湖ニ推獎スルコト爾リ

大正二年八月

桑田熊藏

自序

工場法ハ明治四十三年ニ制定セラレ爾來尙ホ未タ實施セラレ  
スト雖早晚其ノ運ヒニ至ルヘキハ疑ヲ容レズ  
工場法ノ實施セラレルト否トニ關セス國富増進ノ淵源タル工  
業ヲシテ健全ナル發達ヲ遂ケシムル爲メ工場勞役者ノ過當ノ  
勞働ヲ節制シ及工業ニ伴フ諸般危害ノ原因ヲ除去シ進ンテ病  
災ヲ扶助スルノ途ヲ啓クハ洵ニ時務ノ急ナルモノト謂ハサル  
ヘカラス不肖往年工場法ノ制定ニ參與シ同法ニ關スル多少ノ  
研究資料ヲ蒐集スルヲ得タリ曩ニ「工場法ノ制定ニ就テ」ト題シ  
之ヲ國家學會雜誌ニ掲載シタルカ今茲ニ之ニ多少ノ訂正ト増

自序

工場法論  
大正二年  
有斐閣書房

補トヲ加ヘテ刮削ニ付ス眇タル小著固ヨリ多キヲ望マンヤ若シ學者及實際家ノ多少ノ參考資料タルヲ得ハ望外ノ幸ナリ

大正二年夏日

著者識

# 工場法

(明治四十四年三月二十八日  
公布法律第四十六號)

第一條 本法ハ左ノ各號ノ一ニ該當スル工場ニ之ヲ適用ス

一 常時十五人以上ノ職工ヲ使用スルモノ

二 事業ノ性質危険ナルモノ又ハ衛生上有害ノ虞アルモノ

本法ノ適用ヲ必要トセサル工場ハ勅令ヲ以テ之ヲ除外スルコトヲ得

第二條 工業主ハ十二歳未満ノ者ヲシテ工場ニ於テ就業セシム

ルコトヲ得ス但シ本法施行ノ際十歳以上ノ者ヲ引續キ就業セ

シムル場合ハ此ノ限ニ在ラス

行政官廳ハ輕易ナル業務ニ付就業ニ關スル條件ヲ附シテ十歳

以上ノ者ノ就業ヲ許可スルコトヲ得

第三條 工業主ハ十五歳未満ノ者及女子ヲシテ一日ニ付十二時間

ヲ超エテ就業セシムルコトヲ得ス

主務大臣ハ業務ノ種類ニ依リ本法施行後十五年間ヲ限り前項ノ就業時間ヲ二時間以内延長スルコトヲ得

就業時間ハ工場ヲ異ニスル場合ト雖前二項ノ規定ノ適用ニ付テハ之ヲ通算ス

第四條 工業主ハ十五歳未満ノ者及女子ヲシテ午後十時ヨリ午前

四時ニ至ル間ニ於テ就業セシムルコトヲ得ス

第五條 左ノ各號ノ一ニ該當スル場合ニ於テハ前條ノ規定ヲ適用

セス但シ本法施行十五年後ハ十四歳未満ノ者及二十歳未満ノ女子ヲシテ午後十時ヨリ午前四時ニ至ル間ニ於テ就業セシムルコトヲ得ス

一 一時ニ作業ヲ為スコトヲ必要トスル特種ノ事由アル業務ニ就カ

シムルトキ

二 夜間ノ作業ヲ必要トスル特種ノ事由アル業務ニ就カシムルトキ

三 晝夜連続作業ヲ必要トスル特種ノ事由アル業務ニ職工ヲ二組以

上ニ分チ交替ニ就業セシムルトキ

前項ニ掲ケタル業務ノ種類ハ主務大臣之ヲ指定ス

第六條 職工ヲ二組以上ニ分チ交替ニ就業セシムル場合ニ於テハ本

法施行後十五年間第四條ノ規定ヲ適用セス

第七條 工業主ハ十五歳未満ノ者及女子ニ對シ毎月少クとも二回ノ

休日ヲ設ケ職工ヲ二組ニ分チ交替ニ午後十時ヨリ午前四時ニ至ル間ニ

於テ就業セシムル場合及第五條第一項第二號ニ該當スル場合ニ於テ

ハ少クとも四回ノ休日ヲ設ケ又一日ノ就業時間カ六時間ヲ超ユルトキ

ハ少クとも三十分、十時間ヲ超ユルトキハ少クとも一時間ノ休憩時

間ヲ就業時間中ニ於テ設クヘシ

職工ヲ二組以上ニ分チ交替ニ午後十時ヨリ午前四時ニ至ル間ニ於テ就業セシムルトキハ十日ヲ超エサル期間毎ニ其ノ就業時ヲ轉換スヘシ

第八條 天災事變ノ為又ハ事變ノ虞アル為必要アル場合ニ於テハ主務大臣ハ事業ノ種類及地域ヲ限リ第三條乃至第五條及前條ノ規定ノ適用ヲ停止スルコトヲ得

避クヘカラサル事由ニ因リ臨時必要アル場合ニ於テハ工業主ハ行政官廳ノ許可ヲ得テ期間ヲ限リ第三條ノ規定ニ拘ラス就業時間ヲ延長シ、第四條及第五條ノ規定ニ拘ラス職工ヲ就業セシメ又ハ前條ノ休日ヲ廢スルコトヲ得

臨時必要アル場合ニ於テハ工業主ハ其ノ都度豫メ行政官廳ニ届出テ一月ニ付七日ヲ超エサル期間就業時間ヲ二時間以内延長スルコトヲ

得

季節ニ依リ繁忙ナル事業ニ付テハ工業主ハ一定ノ期間ニ付豫メ行政官廳ノ認可ヲ受ケ其ノ期間中一年ニ付百二十日ノ割合ヲ超エサル限リ就業時間ヲ一時間以内延長スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ其ノ認可ヲ受ケタル期間内ハ前項ノ規定ヲ適用セス

第九條 工業主ハ十五歳未満ノ者及女子ヲシテ運轉中ノ機械若ハ動力傳導装置ノ危険ナル部分ノ掃除、注油、検査若ハ修繕ヲ為サシメ又ハ運轉中ノ機械若ハ動力傳導装置ニ調帶、調索ノ取附ケ若ハ取外シヲ為サシメ其ノ他危険ナル業務ニ就カシムルコトヲ得ス

第十條 工業主ハ十五歳未満ノ者ヲシテ毒藥、劇藥其ノ他有害料品又ハ爆發性、發火性若ハ引火性ノ料品ヲ取扱フ業務及著シク塵

埃、粉末ヲ飛散シ又ハ有害瓦斯ヲ發散スル場所ニ於ケル業務其ノ他  
危険又ハ衛生上有害ナル場所ニ於ケル業務ニ就カシムルコトヲ得ス

第十一條 前二條ニ掲ケタル業務ノ範圍ハ主務大臣之ヲ定ム  
前條ノ規定ハ主務大臣ノ定ムル所ニ依リ十五歳以上ノ女子ニ付之ヲ  
適用スルコトヲ得

第十二條 主務大臣ハ病者又ハ産婦ノ就業ニ付制限又ハ禁止ノ規  
定ヲ設クルコトヲ得

第十三條 行政官廳ハ命令ノ定ムル所ニ依リ工場及附屬建設物  
竝設備カ危害ヲ生シ又ハ衛生、風紀其ノ他公益ヲ害スル虞アリ  
ト認ムルトキハ豫防又ハ除害ノ為必要ナル事項ヲ工業主ニ命ジ  
必要ト認ムルトキハ其ノ全部又ハ一部ノ使用ヲ停止スルコトヲ得  
第十四條 當該官吏ハ工場又ハ其ノ附屬建設物ニ臨檢スルコトヲ

得此ノ場合ニ於テハ其ノ證票ヲ携帯スヘシ

第十五條 職工自己ノ重大ナル過失ニ依ラスシテ業務上負傷シ疾  
病ニ罹リ又ハ死亡シタルトキハ工業主ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ本人  
又ハ其ノ遺族ヲ扶助スヘシ

第十六條 職工徒弟、職工徒弟タラムトスル者若ハ工業主又ハ其ノ法  
定代理人若ハ工場管理人ハ職工徒弟又ハ職工徒弟タラムトスル者ノ  
戶籍ニ關シ戶籍吏ニ對シ無償ニテ證明ヲ求ムルコトヲ得

第十七條 職工ノ雇入、解雇、周旋、取締及徒弟ニ關スル事項ハ勅令  
ヲ以テ之ヲ定ム

第十八條 工業主ハ工場ニ付一切ノ權限ヲ有スル工場管理人ヲ選任ス  
ルコトヲ得

工業主本法施行區域内ニ居住セサルトキハ工場管理人ヲ選任スル

コトヲ要ス

工場管理人、選任ハ行政官廳ノ認可ヲ受クヘシ但シ法人ノ理事、  
會社ノ業務ヲ執行スル社員、會社ヲ代表スル社員、取締役、業務  
擔當社員其ノ他法令ノ規定ニ依リ法人ヲ代表スル者及支配人ノ  
中ヨリ選任スル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第十九條 前條ノ工場管理人ハ本法及本法ニ基キテ發スル命令ノ適用  
ニ付テハ工業主ニ代ルモノトス但シ第十五條ニ付テハ此ノ限ニ在ラス  
工業主營業ニ關シ成年者ト同一ノ能力ヲ有セサル未成年者若ハ禁治  
産者ナル場合又ハ法人ナル場合ニ於テ工場管理人ヲキトキハ其ノ法定代  
理人又ハ理事、業務ヲ執行スル社員、會社ヲ代表スル社員、取締役、業  
務擔當社員其ノ他法令ノ規定ニ依リ法人ヲ代表スル者ニ付亦前項  
ニ同シ

第二十條 第二條乃至第五條、第七條、第九條又ハ第十條ノ規定  
ニ違反シタル者及第十三條ノ規定ニ依ル處分ニ從ハサル者ハ五百  
圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十一條 正當ノ理由ナクシテ當該官吏ノ臨檢ヲ拒ミ若ハ之ヲ  
妨ケ若ハ其ノ訊問ニ對シ答辯ヲ為サル者ハ三百圓以下ノ罰  
金ニ處ス

第二十二條 工業主又ハ第十九條ニ依リ工業主ニ代ル者ハ其ノ代理  
人、戸主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ本法又ハ  
本法ニ基キテ發スル命令ニ違背スル所為ヲ為シタルトキハ  
自己ノ指揮ニ出テサルノ故ヲ以テ其ノ處罰ヲ免ル、コトヲ  
得ス但シ工場ノ管理ニ付相當ノ注意ヲ為シタルトキハ此ノ限  
ニ在ラス

工業主又ハ第十九條ニ依リ工業主ニ代ル者ハ職工ノ年齢ヲ知ラサルノ故ヲ以テ本法ノ處罰ヲ免ルコトヲ得ス但シ工業主又ハ第十九條ニ依リ工業主ニ代ル者及取扱者ニ過失ナカリシ場合ハ此ノ限ニ在ラス

第二十三條 本法ニ依ル行政官廳ノ處分ニ不服アル者ハ訴願ヲ提起シ違法ニ權利ヲ傷害セラレタリトスルトキハ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第二十四條 主務大臣ハ第一條ニ該當セサル工場ニシテ原動力ヲ用フルモノニ付テハ第九條、第十一條、第十三條、第十四條、第十六條及第十八條乃至第二十三條ノ規定ヲ適用スルコトヲ得

第二十五條 本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ハ工場管理人ニ關ス

ル規定及罰則ヲ除クノ外官立又ハ公立ノ工場ニ之ヲ適用ス  
官立工場ニ關シテハ所轄官廳ハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ依リ行政官廳ニ屬スル職務ヲ行フ

附則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

# 工場法論 目次

第一編 日本工場法	一
第一章 工場法制定ノ沿革	一
第一節 第一期	二
第二節 第二期	一二
第三節 第三期	五七
第四節 餘論	八八
第二章 工場法制定以前ニ於ケル工場取締	一〇二
第一節 緒言	一〇二
第二節 工場ノ建設	一〇四
第一項 一般規程ノ事例	一〇九
第二項 特別規程ノ事例	一一五



二

第三項 工場ノ臨檢……………一三一

第三節 汽罐汽機ノ取締……………一二四

第四節 職工ノ雇入及傭使……………一二六

第一項 職工ノ雇入……………一二八

第二項 職工ノ傭使……………一三二

第五節 道府縣汽罐汽機製造所及職工募集ニ關スル取締規則……………一三八

第六節 汽罐汽機原動機各種工場及職工取締ニ關スル職員及經費……………一五一

第七節 鑛夫ノ傭使……………一五八

第八節 餘論……………一六一

第三章 工場法制定ノ根據……………一六四

第一節 總論……………一六四

第二節 健康障害……………一八〇

第一項 總論……………一八〇

第二項 罹病及其ノ原因……………一八九

第三項 罹災及其ノ原因……………二〇一

第三節 風紀……………二〇六

第四節 傷病死者ノ扶助……………二〇七

第五節 雇入解雇及周旋ニ關スル弊害……………二一〇

第六節 結論……………二一二

第四章 工場法ノ内容……………二一五

第一節 工場及職工……………二一五

第一項 工場ノ概念……………二一五

第二項 職工ノ概念……………二二三

第二節 適用範圍……………二二六

第三節 就業制限……………二四〇

第一項 保護職工ノ範圍……………二四〇

第二項 時間ニ關スル制限……………二五七

第三項 業務ニ關スル制限……………三二七

第四項 例外規定……………三三三

第四節 設備ノ取締……………三四三

第五節 雇傭及周旋……………三四九

第六節 扶助……………三五七

第七節 徒弟……………三八八

第八節 臨檢及制裁……………三九二

第九節 工場管理人……………三九五

第十節 戶籍上ノ證明、訴願及罰則……………三九七

第二編 日本工場法ト外國法トノ比較……………三九九

第一章 緒論……………三九九

第二章 英國法トノ比較……………四〇四

第一節 沿革……………四〇四

第二節 内容ノ比較……………四〇九

(附) 其ノ他ノ規定及實施ノ概況……………四一八

第三章 獨國法トノ比較……………四二一

第一節 沿革……………四二一

第二節 内容ノ比較……………四二五

(附) 其ノ他ノ規定及實施ノ概況……………四三〇

第四章 佛國法トノ比較……………四三三

第一節 沿革……………四三三

第二節 内容ノ比較……………四三六

(附) 其ノ他規定及實施ノ概況……………四四〇

第五章 其ノ他諸國ニ於ケル工場法及勞働者保護  
ニ關スル國際條約……………四四二

第六章 工場法ノ規定ト外國工場法トノ規定對照……………四四九

第一條及第二十四條法律適用ノ範圍ニ關スルモノ……………四四九

第二條年齡ノ制限ニ關スルモノ……………四五二

第三條第一項就業時間ニ關スルモノ……………四五三

第三條第二項就業時間ノ制限ニ對スル例外……………四五六

第四條夜間ト稱スル時間及夜業禁止ノ職工……………四五九

第五條及第六條夜業ノ制限ニ關スル例外……………四六五

第七條休憩休日及晝夜交替業ニ於ケル兩番ノ轉換ニ關スルモノ……………四六五

第八條天災事變ノ場合又ハ臨時事業ノ繁忙ナル場合ニ於ケル特例……………四六七

第九條幼少年工及女子ノ使用ニ關スル特種ノ制限……………四六九

第十條危險又ハ衛生上有害ノ業務ニ幼少年工及女子ノ使用ヲ禁止スル規定……………四七〇

第十一條危險豫防其ノ他ニ關スルモノ……………四七二

第七章 結論……………四七八

第十二條産婦ノ使用ノ禁止制限ニ關スルモノ……………四七四

第十三條職工ノ負傷扶助ニ關スルモノ……………四七五

附錄

第一 工場寄宿舎又ハ社宅内職工病傷者及死者調……………四八五

第二 在監人病者累年比較……………四八八

第三 出稼女工ノ歸郷原因並健康ニ關スル調査……………四八九

第四 連續徹夜業ト體量トノ關係調査……………四九一

第五 歸郷女工ノ風紀……………四九一

附表 工場數調査表

第一表 工場數調査總表

第二表 (甲)職工十五人以上ノ工場

第三表 (乙)危險又ハ衛生上有害ノ虞アル工場

第四表 (丙)職工十五人未滿原動機種類及馬力別ノ工場

工場法論目次完

工場法論

法學士 岡

實著

第一編 日本工場法

第一章 工場法制定ノ沿革

明治四十四年三月二十八日ヲ以テ制定公布セラレタル工場法ハ、其ノ條文僅カニ二十五箇條ニシテ、規定ノ内容モ亦極メテ簡短ナル小法律ナリト雖モ、之レカ制定ニ至ル迄ニハ實ニ約三十箇年ノ星霜ヲ積ミ、此ノ間主務大臣ノ交代ヲ重ヌルコト二十三回、工務局長又ハ商工局長トシテ主任者ヲ換フルコト十五人、稿ヲ更ムルコト亦實ニ百數十回ニ及ヒタルモノナリ。以下節ヲ逐ウテ其ノ沿革ノ大要ヲ掲クヘシ。

第一節 第一期(自明治三十四年至明治三十一年)

農商務省ノ内務省ヨリ分離シタルハ實ニ明治十四年四月ニシテ翌年工務局内ニ調査課ヲ設ケ、勞役法及工場條例ニ關スル材料ヲ集輯センカ爲メ、各府縣ニ移牒シテ、職工及工場ニ係ル現在ノ状態及慣習等ヲ調査報告セシム。翌十六年ニ至リ諸般ノ參考材料ニ依リ、勞役法、師弟契約法及工場規則ノ立案ニ着手スルト共ニ、之ニ關スル意見ヲ東京商工會ニ諮問シタルニ、工業上傭主被傭者間及師弟間ノ取締ヲ必要ト認ムルヲ以テ、速カニ適當ノ法律ヲ立テ、發布セラレンコトヲ希望ストノ答申ニ接シタリ。

翌十七年ニ至リ、當時農商務省ノ諮問機關トシテ特設セラレタル勸業諮問會ノ第一次會合ニ際シ、更ニ工業上傭主被傭者間並ニ師弟間ノ取締法制定ノ可否ニ付意見ヲ諮問シタルニ、同諮問會ハ各地ノ慣習同シカラスト雖モ近來種々ノ弊害ヲ生シタルヲ認ムルヲ以テ、各地舊來ノ慣習ニ基キ完全ナル取締法ヲ發布セラレタシト答申セリ。

明治十八年ハ勞役法、師弟契約法、職工並徒弟條例ニ關スル大體調査ヲ繼續シ、翌十九年二月第三次勸業諮問會ヲ開キ、工業上傭主被傭者間並師弟間ノ權利義務ノ規定及傭役ノ制限等ニ關スル事項ヲ諮詢スルト共ニ、各地方ノ状態慣例ヲ詳カニスルコトヲ努メタリ。

明治二十年六月ニ至リ、職工條例及職工徒弟條例案一ト先ツ脱稿ス、前案ハ總則、未丁年ノ職工、徒弟、工場製造所及罰則ノ五章、四十六條ヨリ成リ、後案ハ總則、職工、徒弟及罰則ノ四章、三十一條ヨリ成ル、左ニ其ノ要領ヲ掲ケン。

職工條例案規定事項ノ要領

第一章 總 則

- 一 職工ト工業製造人ノ關係ハ合意契約ニ依リ定マルコト
- 一 此等二者ノ人權及物權ニ關スル契約ノ條件ヲ制限セサル場合ハ民法ノ規定若ハ地方ノ慣例ニ依ルコト
- 一 工業製造人及職工ノ定義
- 一 水火力ヲ用フル生産所、礦物ノ分析、淘汰、礦坑、普請場及造船所等ハ工場製造

所トシテ本條例ヲ適用スルコト

一 雇傭契約ノ解除ニ關スルコト

一 工業製造人ノ職工ニ對スル契約ノ不履行、及職工ノ工業製造人ニ對スル契約違反ニ因ル損害賠償ノコト

一 工業製造人ハ職工ノ解職ニ際シ、其ノ請求ニ應シ無報酬ニテ勤務證書ヲ交附スルコト、又修業ヲ目的トスル者ニハ卒業證書ヲ交附スルコト

一 工業製造人ト職工トノ間ノ紛争ハ商業會議所ニ於テ仲裁スルコト

一 工業製造人ハ職工ニ物品ヲ賣渡シ、物品又ハ金錢ヲ貸付ケ利益ヲ收ムルコトヲ得サルコト

一 職工ノ賃銀ハ帝國ノ通貨ヲ以テ拂渡スコト

第二章 未丁年ノ職工

一 未丁年ノ職工ハ日曜日及大祭日ニ勞役セシメサルコト

一 公權ヲ剝奪セラレタル者ハ未丁年ノ職工ヲ使用スルコトヲ得サルコト

一 履歷書ヲ所持セサル未丁年者ヲ職工トシテ使用スルコトヲ得サルコト

一 工業製造人ハ未丁年職工カ違約行爲ヲ以テ退業スルトキハ其ノ履歷書ヲ留置スル權ヲ有スルコト

一 就學義務ヲ了ヘサル者、又ハ就學猶豫ヲ得サル兒童ヲ職工ニ使用スルトキハ工業製造人ハ一定ノ時間ヲ設ケテ通學セシムル義務アルコト

第三章 徒弟

一 徒弟ハ工業製造人ノ家族ニ附屬シ、其ノ業法ノ傳習ヲ受ケン爲メニ使用セラルル職工ナルコト

一 徒弟ト工業製造人ノ契約ニハ通例一箇月以上三箇月以内ノ試験期間ヲ設クルコト

一 工業製造人カ徒弟ノ承諾ヲ得シテ解約シ得ル場合ノ規定(七項)

一 徒弟カ工業製造人ノ承諾ヲ得ルヲ要セスシテ其ノ契約ヲ解キ得ル場合ノ規定(五項)

一 徒弟ノ契約ハ徒弟又ハ父母、後見人ヨリ其ノ營業ヲ變更スルノ事由ヲ以テ解除ヲ求メタル日ヨリ、三十日間ノ經過ニ由テ消滅スルコト、又此ノ事由ヲ

以テ解約シタルトキハ其ノ解約後一箇年間ハ前契約者タル工業製造人ノ承諾ヲ得スシテ同一ノ營業ニ使用セラル、コトヲ得サルコト

一 徒弟又ハ徒弟ノ父母、後見人ヲ勸誘シテ退業セシメタル者、及他ノ徒弟タルコトヲ知テ之ヲ使用シタル者ハ徒弟ト連帶ニテ損害賠償ノ義務アルコト

第四章 工場製造所

一 工場製造所ニ於テハ年齢十歳未満ノ兒童ヲ職工トシテ使用スルコトヲ得サルコト、但シ徒弟ハ此ノ限リニ在サルコト

一 年齢十四歳未満ノ者ハ一日六時間、十七歳未満ノ者ハ一日十時間以上使役スルコトヲ得サルコト

一 幼年職工ニハ毎日喫食時間ノ外二回以上一定ノ休憩時間ヲ與フヘキコト

一 婦女及十四歳未満ノ職工ヲ夜間使用スルコトヲ得サルコト

一 工場製造所職工ノ賃金ハ日給トスルコト、日給金ハ前渡又ハ後拂ヲ爲シ得ヘシト雖モ、前渡ハ三十日分、後拂ハ十日分ノ賃金額ヲ超エシメサルコト

一 工場製造所ノ便宜ノ爲メ、職工ノ住居及其ノ日用品買取場ヲ指定スルコト

ヲ得ス、職工ノ便宜ノ爲ニスル場合ニハ其ノ管理規則ヲ定メ、地方長官ヲ經テ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘキコト

一 農商務大臣ハ職工ノ使用方法カ健康又ハ品行其ノ他經濟ノ發達ヲ害スト認ムルトキハ特別ノ制限ヲ加ヘ又ハ職工ノ使用ヲ禁シ得ルコト

職工徒弟條例案規定事項ノ要領

第一章 總 則

一 傭主、職工及徒弟ノ定義

一 八歳未満ノ者ハ職工徒弟トシテ使役スルコトヲ得サルコト

第二章 職 工

一 傭役契約ハ書面又ハ口上ヲ以テスルコト、口約ノトキハ立合證人アルヲ要スルコト

一 傭役書ニハ傭主、職工及職工カ未丁年者ナルトキハ其ノ監督權ヲ有スル者ノ族籍住所氏名年齢傭役ノ職業、期限賃錢及其ノ仕拂方法、解約豫告ノ日限、職工カ疾病ニ罹リタルトキノ約定等ヲ記スヘキコト

- 一 解約豫告日限ノ約定ナキトキハ三十日前タルヘキコト
- 一 傭主又ハ職工ノ一方ヨリ他方ニ對シ解約ヲ求メ得ル事由ノ規定
- 一 解約ニ當リ職工ノ結約並解約ノ年月日使役ノ職業ヲ記載シタル證明書ヲ與フルコト
- 一 職工カ傭主ノ職業上ノ秘訣ヲ漏洩シタル場合其ノ他不法ノ退職及他人ノ雇傭中ノ職工ノ誘拐ニ對スル賠償ノ規定

第三章 徒弟

- 一 徒弟修業約定ハ一期十年ヲ超ユルコトヲ得サルコト
- 一 二十八歳ニ滿サル者又ハ破廉耻罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ刑期滿限後五年間徒弟ヲ養フコトヲ得サルコト
- 一 修業約定書ニ記載スヘキ事項ノ規定
- 一 十六歳未滿ノ徒弟ニハ授業者ヲシテ讀書習字及算術ヲ授ケシムルコト
- 一 解約ノ豫告ハ三ヶ月前トスルコト、授業者又ハ徒弟ノ一方ノ申出ニ依リテ解約シ得ル事由ノ規定

一 徒弟解約後二年間ハ前工藝者ノ承諾ヲ得シテ同職業ニ從事シ得サルコト、又他人情ヲ知テ其ノ徒弟ヲ傭入ル、コトヲ得サルコト

前記二法案中前者ハ職工及工場ニ關スル一般規定ニシテ、後者ハ職工及徒弟ヲ主トシテ規定シ、試ミニ二様ニ立案シタルモノナリ。此等兩種ノ法案ハ遂ニ發表スルニ至ラサリシモ、之ニ依リテ當時ノ立案者ノ意志ノ那邊ニ在リシヤヲ窺フニ足ル。而シテ職工徒弟條例案ハ參事官會議ニ於テ修正ノ後、關係各局ニ合議シタルニ、此ノ法案タル民業ノ消長、慣習ノ存廢ニ關スルコト大ナルヲ以テ各局ノ意見一致セス、遂ニ廢案ニ歸シタルモノノ如シ。

明治二十二年ニ至リ、工業上ニ使用スル汽罐取締法制定參考ノ爲メ、各府縣ニ於ケル汽罐ノ總數、種類、其ノ他之ニ關スル事項ヲ調査シ、二十三年工務局ヲ廢シテ商工局ヲ設置シ、翌二十四年工場及製造業ニ於ケル傭主被傭者相互ノ權利義務ヲ保護シ、及其ノ業務ノ發達永續ヲ企圖スルノ目的ニ依リ、同年七月職工條例制定ノ要否並其ノ規定ヲ要スル事項ニ付各商業會議所ニ諮問シタルニ、翌二十五年各其ノ答申書ヲ提出セリ。超エテ二十六年及二十七年ニ於テハ製造場及工場内ニ於ケ



ル労働者ノ實況調査表様式ヲ印刷シテ、之ヲ各府縣ニ配附調査セシメ、又各府縣ニ於ケル各種工場取締規則ヲ蒐集シ、尙從來發生シタル汽罐ノ破裂損傷ノ報告ヲ徵スル等各般ノ調査ヲ爲シタリ。要スルニ二十二年以後數年間ハ専ラ調査ヲ行ヒ、一面屢法案ヲ編纂シタルモ、改案相踵キテ之ヲ公表スルノ時機ニ達セザリシナリ。明治二十九年地方長官ヲ招集シテ、職工ノ保護及取締ニ關スル事項ヲ諮問シタルニ、其ノ後ニ至リ答申書ヲ提出シタル一府十九縣中、法令ノ制定ヲ希望シタルモノ一府十四縣ニシテ、爾餘ノ五縣ハ概ネ其ノ制定ヲ否認セリ。又同年第一回農商工高等會議ヲ開キ、職工ノ保護及取締ニ關スル件ヲ諮問シタル結果、同會ハ特別委員ヲ選ヒ之ヲ調査スルコトトナレリ。

明治三十年六月再ヒ工務局ヲ設ケ、志村源太郎氏局長トナリ工場及汽罐ノ構造、職工ノ保護取締ニ關スル法令ヲ規定スルノ目的ヲ以テ親シク各地方ノ工場ヲ視察シテ法案ヲ起草セリ。而シテ該案ハ當初工場法案ト爲セシモ之ヲ職工法案ト改メ、法律適用ノ範圍ヲ五十人以上ヲ使用スル工場トセシヲ三十人以上トシ、又原動力ヲ使用スル工場ニ限リタルヲ一般ノ工場ニ適用スルコトト爲シタル等、種々

ノ改訂ヲ加エ漸ク之レカ完成ヲ見ルニ至レリ。該案ノ趣旨ハ最初ヨリ精密ノ法令ヲ布クトキハ、工業界ニ激變ヲ來スノ虞アルヲ以テ成ルヘク法文ヲ簡略ニシテ緊切事項ノミヲ規定シ、工場内危険豫防ノ如キ職工保險問題ノ如キハ或ハ之ヲ他日ニ譲リ或ハ之ヲ細則トシテ勅令ヲ以テ規定スル方針ヲ採レリ。從テ該案ハ總則、職工、徒弟、監督及罰則ノ五章ニ別テ、之ヲ三十五條ニ細別セリ。此ノ法案ハ三十二年農商工高等會議ニ諮詢シタル法案ノ前身ニシテ、重ナル相違ノ點ハ諮問案ニ於テハ法ノ適用範圍ハ五十人以上ノ職工徒弟ヲ使役スル工場ト爲セルモ、本案ハ三十人ナルコト、又諮問案ハ其ノ名稱ヲ工場法案トシ更ニ一章ヲ加ヘテ工場ノ建築、改築、増築、危害豫防、寄宿舎、社宅、其ノ他ノ工場附屬建物ノ取締ニ關シ規定セルモ、本案ニ之ヲ缺ケルコト等ニシテ、職工、徒弟ノ取締ニ關スル規定ハ略ホ同一ナリ。

此ノ法案ハ第十一回帝國議會ニ提出セントシタルモ、議會ハ十二月二十五日ヲ以テ解散セラレタル爲メ廢案ニ歸シタリ、其ノ規定事項ヲ見ルニ當時諸工業勃興シタル爲メ、職工徒弟爭奪ノ弊甚シク官民共ニ之カ矯正ノ緊切ナルコトヲ認メタルモノ、如ク、又一般ノ規定事項カ理論ニ馳セ、或ハ外國法令ニ倣フコトナク、我邦

ノ實狀ニ近ツキタルノ觀アリ、而シテ此ノ外擬職工條例工場法案工場法草案及工場條例等數種ノ草案相踵テ立案セラレタリ。

又同年十月内務省ニ於テ労働者疾病保險法案ヲ起草シテ之ヲ農商務省ニ廻附セリ、該案ハ労働者ノ病災救済ニ關シ作業主及労働者ノ義務、疾病保險資金ヨリ労働者ニ給與スヘキ場合、資金ノ管理法及監督等ニ關スル事項ヲ規定シタルモノナリ。

要スルニ第一期ニ於テハ調査ニ調査ヲ重ネ、屢々法案ヲ編纂シタルモ官民ノ之ニ對スル意向、改案ノ事情等當時ノ情勢ニ付詳細ナル記録ノ徵スヘキモノナク、其ノ徑路ヲ索ムルコト甚タ困難ニシテ隔靴搔痒ノ感尠カラス。

## 第二節

### 第一期(自明治四十一年)

明治三十一年四月志村局長職ヲ退キ翌五月有賀長文氏工務局長ニ任セラレ、前年來ノ一般調査ヲ繼續シ同年六月以後更ニ各地ノ工場及職工、徒弟取締ノ狀況ヲ視察シ、職工法案ヲ修正シテ之ヲ工場法案ト爲シ、總則、工場職工、徒弟監督及罰則ノ

六章トシ、之ヲ四十條ニ細別セリ。

明治三十一年九月工場法案ヲ各商業會議所ニ廻附諮問シタルニ、三府其ノ他ニ於ケル三十二ノ會議所ハ法令ノ制定ヲ可トシ、名古屋其ノ他ノ七會議所ハ之ヲ否トセリ。又同年十月第三回農商工高等會議ニ工場法制定ノ件ヲ諮問シタルニ、同會ニ於テハ種々討議ノ末、大ナル修正ヲ加ヘテ二十五ヶ條ノモノト爲セリ、同月末工務局ノ廢止ニ依リ關係事務ハ商工局ニ移レルカ、翌三十二年四月、農商工高等會議ノ修正ニ係カル法案ヲ各地方長官ニ諮問シタルニ、東京府外十五縣ハ答申書ヲ提出シタリ。而シテ二三縣ニ於テハ地方ノ狀況ニ依リ工場法ノ實施ヲ猶豫スルコトヲ希望セシモ、大體ニ於テ其ノ制定ヲ可トシタルヲ以テ、將ニ進ンテ該法案ヲ帝國議會ニ提出セントスル迄ノ運ヒニ立到リタルニ、時恰モ内閣ノ交迭ニ際シ、遂ニ之カ提出ヲ見ルニ至ラス、更ニ工場及職工ニ關スル調査ヲ行ヒ、其ノ結果ニ依リテ適當ノ處理ヲ爲スヘキコトナレリ。今農商工高等會議ニ諮問シタル法案並ニ之ニ添附シタル工場法制定理由書ヲ掲クルコト左ノ如シ。

農商工高等會議ニ諮詢ノ法案

第一章 總則

第一條 此ノ法律ハ五十名以上ノ職工徒弟ヲ使役スル工場ニ適用ス

第二條 前條以外ノ工場ニシテ事業ノ性質危険ナルモノ健康ニ害アルモノ職工徒弟ノ保護取締上必要アルモノ其ノ他ノ特別ノ事由アルモノハ勅令ヲ以テ此ノ法律ノ全部又ハ一部ヲ適用スルコトヲ得

第二章 工場

第三條 工場ヲ建設、改築、増築セントスル者ハ當該官廳ニ願出テ認可ヲ受クヘシ既設ノ建物ヲ工場ニ使用セントスル者亦同シ

前項ノ工場ヲ他ノ工場ニ使用シ又ハ工業ノ方法ヲ著シク變更セントスルトキハ更ニ認可ヲ受クヘシ

認可ノ手續條件及効力ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第四條 工場ノ工事完成シタルトキハ當該官廳ノ検査ヲ受クヘシ

検査ニ合格セサル工場ニ於テハ事業ヲ營ムコトヲ得ス

第五條 工場ニハ危険豫防、健康保全、風儀維持、並公益保護ノ爲メ必要ナル設

備ヲ爲スヘシ

第六條 前條ノ設備ニ缺點ヲ生シタルトキハ當該官廳ハ左ノ處分ヲ爲スコトヲ得

- 一 期間ヲ定メテ相當ノ施設ヲ命スルコト
  - 一 事業ノ全部又ハ一部ノ停止ヲ命スルコト
- 前項第一號ノ場合ニ於テハ工業主其期間内ニ指定ノ施設ヲ爲サ、ルトキハ當該官廳ニ於テ之ヲ執行シ工業主ヲシテ一切ノ費用ヲ負擔セシムルコトヲ得

第七條 工場ニ汽罐ヲ裝置セントスル者ハ當該官廳ニ届出テ検査ヲ受クヘシ前項ノ検査若ハ定期又ハ臨時ノ検査ニ合格セサル汽罐ハ之ヲ使用スルコトヲ得ス

第八條 職工社宅、寄宿舎、病室其ノ他工場ノ附屬建物ニハ本章ノ規定並之ニ關スル罰則ヲ準用ス

第三章 職工

第九條 十歳未満ノ幼者ハ工場ニ於テ使役スルコトヲ得ス但特別ノ事由アル工業ニ付テハ命令ヲ以テ本條ノ例外ヲ設クルコトヲ得

第十條 十四歳未満ノ職工ハ一日十時間ヲ超エテ使役スルコトヲ得ス但特別ノ事由アルトキハ當該官廳ノ許可ヲ受ケ之ヲ延長スルコトヲ得

第十一條 職工ニハ少クトモ一ヶ月二日ノ休暇及一日一時間ノ休憩ヲ與フヘシ三大節ニハ事業ヲ休止スヘシ

特別ノ事由アリテ前二項ニ依リ難キトキハ當該官廳ノ許可ヲ受クヘシ

第十二條 工業主ハ尋常小學校ノ教科ヲ卒ラサル十四歳未満ノ職工ニ自己ノ費用ヲ以テ相當ノ教育ヲ與フルノ設備ヲ爲スヘシ

前項ノ職工ハ工業主ノ定ムル教則ニ服従スヘシ

第十三條 職工業務上負傷シタル場合ニ於テハ工業主之ヲ療養シ若ハ療養費ヲ支給スヘシ

前項ノ負傷ニ依リ休養ヲ要スルトキハ手當ヲ支給シ不具又ハ痲疾トナリタルトキハ扶助料ヲ支給スヘシ

本條第一項ノ負傷ニ依リ死亡シタルトキハ埋葬料及遺族手當ヲ支給スヘシ危害ノ原因カ自己若ハ他人ノ故意又ハ天災ニ出ルモノ及危害ヲ避クル爲特ニ設ケタル禁制ニ違背シタルニ出ルモノハ本條ノ限ニ在ラス

第十四條 職工ハ左ノ場合ニ於テ直ニ契約ヲ解除スルコトヲ得

一 工業主、業務監督者又ハ其ノ家族カ職工又ハ其ノ家族ニ對シ暴行虐待ヲ加ヘ若ハ猥褻ノ所爲アリタルトキ

一 生命ヲ危ウシ又ハ健康ニ著シキ害ヲ及ホスヘキ業務ヲ工業主又ハ業務監督者ヨリ強ラレタルトキ

第十五條 工業主ハ左ノ場合ニ於テ直ニ契約ヲ解除スルコトヲ得

一 職工カ工業主、業務監督者又ハ其ノ家族ニ對シ暴行又ハ侮辱ヲ加ヘタルトキ

一 職工カ工場又ハ其ノ附屬設備ノ秩序ヲ紊スヘキ行爲ヲ爲シタルトキ  
第十六條 工業主ハ職工トノ關係ヲ定ムル爲メ職工規則ヲ設ケ當該官廳ノ認可ヲ受クヘシ之ヲ變更セントスルトキ亦同シ

職工ノ社宅、寄宿舎取締ニ關スル規則亦前項ニ依ル  
當該官廳ニ於テ必要ト認ムルトキハ職工規則、社宅寄宿舎規則ノ變更ヲ命  
スルコトヲ得

第十七條 職工規則ハ左ノ事項ヲ規定スヘシ

- 一 雇傭契約ニ關スル規程
- 一 休日、就業時間及休憩時間ニ關スル規定
- 一 監督組織ニ關スル規程
- 一 賞與、懲戒ニ關スル規程
- 一 賃錢ニ關スル規程
- 一 第十三條ノ給與及扶助ニ關スル規程
- 一 積立金ニ關スル規程
- 一 危害ヲ避クル爲メ特ニ設ケタル禁制
- 一 第十二條ノ教則

職工規則ハ工業主及職工ヲ羈束ス

第十八條 工業主ハ職工ノ異動ヲ明ニスル爲メ職工名簿ヲ備フヘシ

第十九條 職工ノ取締上必要ノ場合ニ於テハ命令ヲ以テ工業及職工ノ種類  
ヲ定メ其ノ職工證ヲ所持セシムルコトヲ得

前項ノ職工ニシテ職工證ヲ所持セサルモノハ該工業ニ於テ工業主之ヲ雇  
入ル、コトヲ得ス

第二十條 農商務大臣ハ同業組合ノ申請ニ基キ必要ト認ムルトキハ該組合  
員ノ使役スル職工ニ職工證ヲ所持セシムルコトヲ得

前項ノ職工ニシテ職工證ヲ所持セサル者ハ該組合員之ヲ雇入ル、コトヲ  
得ス

第二十一條 職工證ハ原籍地又ハ住所地ノ市町村之ヲ交附スヘシ但前條ノ  
場合ニ於テハ同業組合之ヲ交附スヘシ

第二十二條 職工證ハ工業主之ヲ保管シ解雇ノ際之ヲ職工ニ還附スヘシ

第二十三條 職工名簿及職工證ノ方式並記載事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第四章 徒 弟

第二十四條 工業主徒弟ヲ養成セントスルトキハ豫メ徒弟規則ヲ設ケ當該官廳ノ認可ヲ受クヘシ之ヲ變更セントスルトキ亦同シ

第二十五條 徒弟規則ニハ左ノ事項ヲ規定スヘシ

- 一 修業契約ニ關スル規程
- 一 休日、修業時間及休憩時間ニ關スル規程
- 一 授業ニ關スル規程
- 一 給與ニ關スル規程
- 一 疾病、負傷、死亡手當ニ關スル規程
- 一 賞與、懲戒ニ關スル規程
- 一 積立金ニ關スル規程
- 一 第十二條ノ教則

第二十六條 第九條乃至第十二條第十四條第十五條第十六條第二項第三項第十七條第二項第十八條乃至第二十三條並之ニ關スル罰則ハ徒弟ノ場合ニ之ヲ準用ス

第五章 監督

第二十七條 農商務大臣ハ婦女及十四歳未滿ノ職工徒弟ノ就業ニシテ特に危険ナルカ又ハ健康若ハ風儀ニ害アリト認ムルトキハ之ヲ制限又ハ禁止スルコトヲ得

第二十八條 工場監督官吏ハ工場及其ノ附屬建物ヲ臨檢シ職工及徒弟ニ關スル書類ヲ檢査シ並工業主若ハ其ノ代理人及被用者ニ證明ヲ求ムルコトヲ得工場監督官吏又ハ工場監督官吏タリシ者ハ其ノ職務執行上知り得タル營業上ノ秘密ヲ守ルノ義務アルモノトス

第二十九條 此ノ法律ニ依ル行政處分ニ不服アル者ハ訴願法ニ依リ訴願スルコトヲ得

第三十條 職工規則、徒弟規則、社宅寄宿舎規則、雇傭契約又ハ修業契約ニ付工業主ト職工又ハ徒弟間ニ起リタル紛議ハ工場監督官吏ノ裁定ヲ受クルコトヲ得

第六章 罰則

第三十一條 第三條第一項第二項第四條第七條第九條乃至第十一條第十六條第一項第二項第十八條第十九條第二項第二十條第二十二條第二十二條ニ違背シ又ハ第十六條第三項若ハ第二十七條ノ命令ニ違背シタル者ハ二百圓以下ノ過料ニ處ス

第三十二條 職工名簿ニ付虚偽ノ所爲アリタル者及第二十八條ノ場合ニ於テ臨檢検査若ハ説明ヲ拒ミ又ハ虚偽ノ所爲アリタル者ハ五拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十三條 他ノ工業主ト雇傭又ハ修業契約期間内ノ職工又ハ徒弟タルヲ知り其ノ工業主ノ承諾ナクシテ之ヲ使役シタル工業主又ハ其ノ媒介ヲ爲シタル者ハ二百圓以下ノ過料ニ處ス

職工徒弟又ハ其ノ親族法定代理人保證人ヲ誘導シ其ノ工業主ニ對シ虚偽ノ所爲ヲ以テ契約ヲ解除セシメ其ノ職工又ハ徒弟ヲ使役シタル工業主又ハ其ノ媒介ヲ爲シタル者ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス

前二項ノ規定ハ五十名以下ノ職工徒弟ヲ使役スル工場ニモ之ヲ適用ス

第三十四條 虚偽ノ職工證又ハ虚偽ノ所爲ヲ以テ得タル職工證ヲ行使シ又ハ行使セシメタル者ハ二拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十五條 第二十八條第二項ニ違背シタル者ハ刑法第三百六十條ノ例ニ據リ處斷ス

第三十六條 此ノ法律ヲ犯シタル者ニハ刑法數罪俱發ノ例ヲ用キス

第三十七條 本法ニ定メタル過料ニ付テハ明治三十一年法律第十四號非訟事件手續法第二百六條乃至第二百八條ノ規定ヲ準用ス

第三十八條 工業主ノ代理人家族被用者ニシテ此ノ法律中工業主ニ關スル規定ニ違背スル行爲ヲ爲シタルトキハ工業主ハ自己ノ指揮ニ出サルノ故ヲ以テ本章罰則ノ適用ヲ免ル、コトヲ得ス

第三十九條 商會社ニ在テハ業務擔當ノ任アル社員又ハ取締役其ノ他ノ法人ニ在テハ理事ニ工業主ニ關スル本章ノ罰則ヲ適用ス

附 則

第四十條 此ノ法律ハ明治三十二年七月一日ヨリ施行ス

## 工場法制定ノ理由

現今本邦工業ノ勃興ト共ニ工場各地ニ起リ、從來ノ家内工業ハ漸ク變移シテ工場工業タラントス。此等工場工業ハ其ノ効果ノ顯著ナルト同時ニ其ノ設備完全ヲ缺クトキハ、之ニ由テ往々人命ヲ危ウシ比隣公衆ニ重大ノ傷害ヲ與フルコトアリ。之ニ對シテ政府ノ監督ヲ要スルコト甚タ多シ。從來各地方應ニ於テ既ニ此ノ事ニ關スル取締ヲ爲スモノ尠カラスト雖モ、其ノ方法統一ヲ缺キ、其ノ監督ノ設備完全ナル能ハサルモノアリ。然ルニ此事タル工業者並一般公衆ニ最モ重大ナル利害ヲ及ホシ、深ク其ノ權利ニ關係スルヲ以テ、其ノ監督ノ方法ニ付テハ、之ヲ地方應ニ一任セス、豫メ法律ヲ以テ其ノ標準ヲ定ムルヲ必要トス。加旃此等工場ニ於ケル工業主職工間ノ關係ヲ見ルニ、親睦協和恰モ家族師弟タルカ如キ情誼漸ク去リ、階級的の差等間隙稍々其ノ跡ヲ現サントセリ。是レ實ニ工場工業ニ伴フ所ノ必然ノ結果ニシテ、之ヲ各國ノ歴史ニ徵スルニ皆然ラサルハナシ。今ヤ情誼ノ關係既ニ衰退シテ之ニ代ハルヘキ法律上ノ關係確立セサルヲ以テ、雇者被雇者ノ規律頗ル紊亂シ、雇者ハ被

雇者ノ轉々移動スルニ苦ミ、被雇者ハ亦往々ニシテ雇者ノ壓抑ニ屈從スルノ悲境ニ沈淪スル者アリ、誘拐爭奪ノ弊既ニ起リ、教唆強要ノ風漸ク行ハレントス。此時ニ當リ之ヲ一般ノ趨勢ニ鑑ミ、之ヲ本邦ノ實情ニ照シ、大體ノ法規ヲ設ケテ二者ノ關係ヲ律シ、一面以テ工業者ノ爲ニ其ノ事業經營ノ確實整正ヲ圖リ、一面以テ勞力ノ強健風儀ノ保持ヲ企ツルモノ、是レ我工業ヲシテ健全ナル發達ヲ遂ケシムルニ最モ必要ノ事業トス、是レ本法ノ制定ヲ要スル所以ナリ。然レ共本問題ノ關係スル所極メテ廣且大ニシテ、殊ニ工業者及勞働者ノ利害ニ直接大關係ヲ及ホスヲ以テ、例令外國ノ事歴ニ徵シ自然ノ趨勢ノ能ク前知シ得ヘキモノアルモ、猶ホ法令ヲ以テ一朝急激ノ變化ヲ加フルハ國家經濟上大ニ考慮スヘキ所ナルヲ以テ、本法ハ暫ク大體ヲ規定シ、單ニ大綱ヲ示シテ弊害ノ最モ甚シキモノヲ豫防スルニ止メ、而シテ工場監督官吏ヲシテ本法ノ實施ヲ監視セシムル傍ラ、常時工場ノ状態ヲ調査セシメ、其ノ結果ニ基キテ詳ニ利害得失ヲ衡量シ、將來工場工業ノ進歩ニ應シテ能ク其ノ規律ヲ正シ、雇者被雇者ノ調和ヲ計ランコトヲ期ス。因テ其ノ法案ヲ添ヘテ之ヲ諮問ス。



前記工場法案ノ諮問ニ對スル各商業會議所答申ノ要領ヲ摘記センニ、法律制定ニ對スル可否並ニ法案ノ大體ニ對スル意見トシテ名古屋、濱松、桑名、大垣、長崎、熊本、博多、栃木等ノ商業會議所ハ尙早ヲ唱ヘ、長野其ノ他ニ於ケル製糸業者ノ團體モ亦尙早トシ、或ハ工場法ハ一般ノ工場ニ適用スヘキモノニアラス、其ノ必要ナルモノヲ先ニシ適用セラルヘキ工場ノ種類ヲ限定スヘシトシ、或ハ工場法ハ工場ノ設備及其ノ取締ニ止メ、職工徒弟ニ關スル規定ヲ設クル必要ナシトスル者アリ。又法案ノ各條ニ對スル意見中最モ議論多キ點ハ、法ノ適用範圍及就業時間ニ關スル規定ニシテ、適用範圍ノ五十人以上ノ職工トアルヲ三十人トスルコトヲ希望スルモノアリ、或ハ百人ヲ適當ナリト云フモノアリ、或ハ蒸汽力其ノ他ノ原動力ヲ用フルモノニ適用セラレタシトセリ。次ニ職工ノ年齢ニ關シテハ十歳未滿ノ幼者ノ使役ヲ絶對ニ禁止セラレタシトシ、或ハ之ニ反シ十歳未滿ノ者ノ使用範圍ヲ廣メラレタシトセリ、又就業時間ノ制限ニ對シテハ、或ハ十四歳未滿ハ之ヲ女子ニ限り男子ハ十六歳未滿ト更メラレタシトシ、又就業時間ノ十時間ヲ十二時間トシ、或ハ十四時間トスルコトヲ望ミ、或ハ時間制限ノ規定ヲ削除スヘシト論スルモノアリ。

次ニ十四歳未滿ノ職工ニ教育ヲ施スヘキ規定ニ對シテ此規定ノ全部ヲ削除スヘシトシ、或ハ寄宿舎内ノ職工ニ限ルコトニ修正希望ノモノアリ、其ノ他各條ニ對シ多少ノ修正意見アリテ區々歸一スル所ナシ。

又農商工高等會議ハ委員會ニ於テ數回審議ノ末左ノ修正案ヲ提出シ、其ノ希望トシテ工場及労働ニ關スル事實ノ調査ハ最重要ノ事項ニ屬スルヲ以テ、政府ハ之カ爲メニ相當ノ費用ヲ支出シ、該事實ヲ調査セシムル爲メ適當ノ方法ヲ設ケラレタシト附記セリ。又委員會ノ少數意見トシテ本修正案ハ職工保護ニ止マリ、一般労働者ニ其ノ効力ヲ及サ、ル缺點アリ、職工及労働者ノ有様ニ付テハ未タ充分ノ調査ヲ得ス、今日ニ於テ其ノ利弊ヲ究メ難シ、故ニ不充分ナル調査ヲ以テ法律ヲ制定スルコトヲ避クル爲メ、本案ノ職工徒弟ニ關スル規定ハ之ヲ削除シ、單ニ工場ノ危害豫防ノ部分ニ止メラレタシ、職工爭奪ノ弊ノ如キハ労働需要ノ急激ナル増加ニ歸因セルモノナレハ、法律ヲ以テ之ヲ防制スルノ要ナシトセシカ、本會議ニ於テハ討論審議ノ末左記ノ如キ委員會ノ修正案ヲ通過セリ。

## 農商工高等會議ノ修正案

第一章 工場

第一條 工場ヲ建設、改築、増築セントスル者ハ地方長官ニ届出ヘシ既設ノ建物ヲ工場ニ使用セントスル者亦同シ

前項ノ工場ヲ他ノ工業ニ使用シ又ハ工業ノ方法ヲ變更セントスルトキハ更ニ届出ヘシ

第二條 前條ノ届出アリタルトキハ地方長官ハ其ノ工事ヲ検査スヘシ  
検査ニ合格セサル工場ニ於テハ事業ヲ營ムコトヲ得ス

第三條 工場ニハ危険ノ豫防、健康ノ保全、風儀ノ維持並公益保護ノ爲必要ナル設備ヲ爲スヘシ

第四條 前條ノ設備ニ缺點アリタルトキハ地方長官ハ左ノ處分ヲ爲スコトヲ得

- 一 期間ヲ定メテ相當ノ施設ヲ命スルコト
- 一 事業ノ全部又ハ一部ノ停止ヲ命スルコト

前項第一號ノ場合ニ於テ工業主其ノ期間内ニ指定ノ施設ヲ爲サ、ルトキ

ハ地方長官ニ於テ之ヲ執行シ工業主ヲシテ一切ノ費用ヲ負擔セシムルコトヲ得

第五條 前各條ノ規定ハ左ノ工場ニ限り之ヲ適用ス

- 一 蒸氣力、水力、電氣力、瓦斯力又ハ其ノ他ノ原動力ヲ用フルモノ
- 一 前號以外ノ工場ニシテ事業ノ性質危険ナルモノ衛生其ノ他公益ニ害アルモノ但此ノ場合ニ於テハ豫メ勅令ヲ以テ其ノ工場ノ種類ヲ指定スルヲ要ス

第六條 工場ニ附屬スル寄宿舍及病室ニハ工場ニ關スル前各條ノ規定並之ニ關スル罰則ヲ準用ス

第七條 工場ニ汽罐ヲ裝置セントスル者ハ地方長官ニ届出テ検査ヲ受クヘシ

前項ノ検査若ハ定期又ハ臨時ノ検査ニ合格セサル汽罐ハ之ヲ使用スルコトヲ得ス

第八條 工場、寄宿舍及病室ノ設備並汽罐検査ニ關スル規則ハ地方長官之ヲ

定メ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第二章 職工徒弟

第九條 農商務大臣ハ左ノ各號ノ範圍内ニ於テ省令ヲ以テ工場ノ職工徒弟ノ使役ニ關スル規則ヲ定ムルコトヲ得

- 一 十歳未満ノ幼者ノ使役ヲ禁制若ハ制限スルコト
- 一 女子又ハ十四歳未満ノ職工徒弟ニ一日十二時間以上ノ就業時間及就業ノ種類ヲ制限スルコト

- 一 職工徒弟ニ一ヶ月二日ノ休暇及一日十時間以上ノ労働ヲ爲ス場合ハ一時間ノ休憩ヲ與ヘシムルコト

第十條 工業主ハ工場寄宿舎ニ居住スル職工徒弟ニシテ十四歳未満ノ者ニ對シ相當ノ教育ヲ與ヘ且其ノ疾病ノ際引取人ナキトキハ之ヲ救養スルノ義務アルモノトス

第十一條 職工作上負傷若ハ死亡シタル場合ニハ工業主ハ少クモ左ニ掲クル各號ノ救恤ヲ爲スノ義務アルモノトス但シ危害ノ原因自己若ハ他人

ノ故意又ハ天災ニ出ルモノ及危害ヲ避クル爲特ニ設ケタル禁則ニ違背シタル者ハ此ノ限ニ在ラス

一 職工カ負傷シタルトキハ負傷ノ當時ニ得タル賃錢ノ半額ヲ休養中支給スルコト

一 前號ノ場合ニ於テハ療養ノ實費ヲ給シ若ハ自ラ療養ヲ與フルコト

一 負傷ニ因リ勞作ヲ爲スコト能ハサルニ至リタルトキハ職工カ負傷ノ當時ニ得タル賃錢ニケ年分

一 負傷ニ因リ勞作ヲ減シタル場合ニハ其ノ減少ノ程度ニ應シテ減シタル金額

一 負傷ニ因リ死亡シタル場合ニ於テハ負傷ノ當時ニ得タル賃錢ノ三十日分

一 前號ノ死亡者ノ扶養ニ依リテ生活シタル遺族アルトキハ前號賃錢ノ一ケ年分

前項第三號及第四號ノ金額ハ三百五十圓第六號ノ金額ハ百五十圓ヲ以テ

最高額トス

前二項ノ規定ハ徒弟ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十二條 工業主ハ職工、徒弟規則ヲ設ケ地方長官ニ届出ヘシ之ヲ變更スルトキ亦同シ

寄宿舎取締ニ關スル規則亦前項ニ依ル

第十三條 職工、徒弟規則ニハ左ノ事項ヲ規定スヘシ

- 一 雇傭契約又ハ修業契約ニ關スル規程
- 一 休日、就業時間及休憩時間ニ關スル規程
- 一 賞罰ニ關スル規程
- 一 賃錢若ハ手當ニ關スル規程
- 一 救恤ニ關スル規程
- 一 積立金ヲ爲ス場合ニハ其ノ規程
- 一 危害ヲ避クル爲メ特ニ設ケタル禁制アルトキハ其ノ禁制
- 一 職工、徒弟規則ハ工業主及職工、徒弟ヲ羈束ス

第三章 監督

第十四條 農商務大臣ハ工場視察官ヲシテ工場ニ臨檢セシムルコトヲ得

第十五條 此ノ法律ニ依ル行政處分ニ不服アルモノハ行政訴訟ヲ提起シ又ハ訴願法ニ依リ訴願スルコトヲ得

第四章 罰則

第十六條 第一條、第七條第一項及第十二條ノ届出ヲ怠リタル者ハ二十圓以下ノ過料ニ處ス

第十七條 第二條第二項及第七條第二項ニ違背シタル者ハ二百圓以下ノ過料ニ處ス

第十八條 工業主ト契約中ノ職工、徒弟又ハ其ノ親族、法定代理人、保證人ヲ誘導シ他ノ工業主ヲシテ其ノ職工又ハ徒弟ヲ使役セシメタル媒介者ハ二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十九條 此ノ法律ヲ犯シタル者ニハ刑法數罪俱發ノ例ヲ用キス

第二十條 本法ニ定メタル過料ニ付キテハ明治三十一年法律第十四條非訟

事件手續法第二百六條乃至第二百八條ノ規定ヲ準用ス

第二十一條 工業主ノ代理人、家族、被傭者ニシテ此ノ法律中工業主ニ關スル規定ニ違背スル行爲ヲ爲シタルトキハ工業主ハ自己ノ指揮ニ出サルノ故ヲ以テ本章罰則ノ適用ヲ免カルルコトヲ得ス

附 則

第二十二條 此ノ法律ハ明治三十三年一月一日ヨリ施行ス

明治三十二年八月、關西府縣勸業會ノ決議ニ依リ京都大阪兵庫等ノ二府十五縣知事總代ヨリ近來工業ノ發達ト共ニ職工爭奪ノ弊風ヲ生シ、工業主ヲシテ意外ノ損害ヲ被ラシメ、工業ノ發達ヲ阻碍スルモノ尠カラズ、到底府縣令ヲ以テ其ノ効ヲ奏シ得サルニ依リ工業條例ヲ設ケラレタシト建議セリ。

前記ノ如ク農商工高等會議ニ諮問ノ法案ハ議會ニ提出スルニ至ラス、更ニ工場及職工ニ關スル事實ヲ調査シテ本件ヲ處理スルコトニ決シ、明治三十三年度ヨリ臨時工場調査費約一萬圓ヲ豫算ニ編入シ、其ノ成立スルニ及ンテ同年四月勅令第四百四十九號ヲ以テ臨時工場調査職員ヲ設ケ、商工局工務課ニ工場調査掛ヲ置キ、商

工局長木内重四郎氏ノ下ニ、内務省參事官兼農商務書記官窪田靜太郎氏其ノ主任トナリ、法制、經濟、建築、衛生、機械、化學等ノ各學科ヲ專攻シタル職員ヲ増加シテ、本件ニ關スル既往ノ事蹟、外國ニ於ケル事實及制度ヲ調査シ、掛員各自専門事項ニ應ジテ工場ヲ視察シ、又工業會社員技師、職工等ト會談シテ精細ノ調査ヲ遂ケテ、工場及職工ノ現狀ト其ノ弊害ヲ確カメ、法案ヲ起草シ、三十五年十一月、該法令案ノ要領ヲ關係各省地方長官及商業會議所ニ廻付シ、其ノ意見ヲ徵シタリ。答申ノ内或ハ同法ノ制定ヲ尙早ナリトスルモノナキニ非ラサリシモ、多數ハ根本的異見ヲ有セサルコトヲ確メタルヲ以テ、諮問案ニ修正ヲ加ヘタル後、法律案トシテ之ヲ議會ニ提出センコトヲ期シタリ。然ルニ、日露ノ時局ハ一般經濟界ノ緊縮トナリ、越エテ三十七、八年ノ事變アリ、戰後ニ於ケル經濟界ノ變動ハ本案提出ノ時機ヲ失ハシメタルヲ以テ、工場調査職員ハ明治三十六年ヲ以テ廢止ニ歸シタルニ拘ハラズ、依然調査ヲ繼續シタリ。此ノ間議會ニ於テハ明治三十三年及明治三十五年ヲ以テ工場法ヲ速カニ制定スヘキ旨ヲ建議シ、踵テ三十六年及四十三年ニ於テ政府ノ工場法ヲ提出セサル理由ヲ質問シタリ。

明治三十六年七月、清浦子爵農商務大臣トナリ、同年九月、森田茂吉氏商工局長トナリ、參事官岡實、窪田書記官ニ代リテ工務課長トナリ、本件處理ノ任ニ當レリ。前記ノ如ク臨時工場調査職員ハ同年九月ニ至リ廢止セラレタル結果、從來工場調査費タリシ約一萬圓ノ經費ハ豫算中ヨリ刪除セラレ、之カ爲ニ職員ノ減少、其ノ他本件ノ進行ニ不便ヲ來シタルモ、通常經費ノ範圍内ニ於テ其ノ事務ヲ繼續シ、關係職員ヲシテ工場及職工ノ調査ヲ爲サシメ、臨時工場調査職員ノ事蹟ノ一タル工場調査要領ヲ修正シテ、其ノ第二版ヲ作り、又三十五年發表ノ法案要領ニ對スル公私ノ意見ヲ參酌シテ、編纂シタル工場法案ニ付反覆審議ヲ竭シテ、日露事變ノ終局後ニ於ケル一般經濟界ノ恢復ノ時機ヲ待テリ。其ノ間ニ於テ三十九年、松岡康毅氏清浦子爵ノ後ヲ襲ヒ、尋テ四十一年七月、大浦子爵代リテ農商務大臣トナリ、四十二年七月、商工局ヲ商務及工務ノ二局ニ分チ、鹿子木小五郎氏ヲ工務局長ニ任シテ、愈第二十六議會ニ法案ヲ提出スルコトナレリ。

猶明治三十五年以後ニ於テモ工場及職工ノ狀態ハ依然トシテ革マラサルノミナラス、其ノ弊害ノ矯正ヲ要スルモノ益多キヲ加ヘ來タリシヲ以テ、當業者中ニ

於テモ心アルモノハ我工業ノ前途ヲ慮リテ私カニ其ノ制定ヲ望ムニ至レリ。

明治四十二年十月、工場法案ノ説明ト題スル冊子ヲ編纂シテ、工場法制定ノ由來、工場法規定事項ノ大體ノ説明、及工場法案各條ノ説明等ヲ記シ、之ヲ關係各省、各地方長官、商業會議所、大日本蠶糸會、大日本紡績聯合會、日本工業協會、其ノ他ノ團體ニ廻附シテ、其ノ意見ヲ徵シ、其ノ他新聞及雜誌ニ依リテ一般ニ公表シタルノミナラス、東京府廳及東京商業會議所等及大阪、京都、愛知、静岡等ノ工業地ニ出張シテ、親シク當業者ト會談シ、法律制定ノ趣旨ト規定事項ノ意義ヲ明カニスルコトヲ努メタリ。此等諮問ニ對スル答申ノ詳細ハ茲ニ之ヲ略スルモ、大體ニ於テ工場法ノ制定ヲ否トスルモノハ甚タ稀ニシテ、或ハ適用ノ範圍ニ付、或ハ職工ノ年齢、就業時間ノ制限等ニ付種々ノ意見ヲ開陳シ、又法案カ其ノ詳細ナル規定ヲ命令ニ讓レル點ニ對シ、非難尠カラサリシト雖、法案ノ制定ニ關シ、絶對的反對ノ意見ハ殆ト皆無ナリシト、各條ニ對スル修正意見ノ較ヤ眞摯トナレルモノアルカ如キハ、時勢ノ進歩ニ依リテ法令制定ノ必要ヲ自覺シタルモノ多キヲ加ヘタルニ職由ス。

法案ノ諮問ニ對スル答申中最モ重要ナル結果ヲ生シタルモノハ、中央衛生會ノ

意見ナリトス。同會ニ於ケル重ナル修正ハ法律施行後五年ヲ期シテ、十六歳未満ノ者及女子ノ夜間就業ヲ禁スル規定ヲ設クルコト之ナリ。幼少者及女子ノ夜間労働ノ禁止ハ立案者ノ理想ナリシモ、何等労働ニ關スル法令ナキ今日ニ於テハ、急激ナル變動ヲ避クル爲メ、暫ク忍フコト妥當ナルヘシト信シタルナリ。然ルニ工場衛生ノ改善ヲ主タル目的トスル法律ニ於テ、今日工場ノ弊害中最モ大ナル夜業ヲ禁止セサルハ不當ナリトノ修正意見ニ對シテハ、之ヲ反駁スヘキ理由薄弱ナルノミナラス、内務省ハ中央衛生會ノ決議ヲ重シテ此ノ意見ヲ採擇スルコトヲ希望シタルヲ以テ、審議ノ末夜業禁止規定ノ施行ヲ十年後トスルコトニ決シ、尙關係各省、地方長官、商業會議所等ノ答申ニ依リテ其ノ他ノ修正ヲ加ヘ、農商務大臣、内務大臣ノ合議ヲ經テ閣議決定シ第二十六議會ニ提出シタリ。

議會ハ本件ヲ十九名ノ委員ニ附托シ調査セシメタリ。然ルニ提出案ノ發表セラルルヤ夜業禁止ニ對スル非難ノ聲高ク、就中綿糸紡績業者ハ激烈ナル反對ニ出テ、法律全體ノ否決トモナルヘキ形勢ト爲リタルヲ以テ、政府ハ仍ホ調査修正ノ必要ヲ認メ、遂ニ之ヲ撤回スルニ至レリ。是實ニ明治四十三年二月ノ事ナリトス。

左ニ明治三十五年公表シタル工場法案ノ要領並之ニ對スル世論ノ大勢ヲ示スヘキ意見ノ概要及第二十六議會ニ提出シタル法案ヲ掲グ。

明治三十五年公表シタル工場法案要領

第一 法令適用ノ範圍

- (甲) 工場法ヲ適用スル工場ハ常時三十人以上ノ職工徒弟ヲ僱使スルモノトス但シ官立及公立ノ工場ヲモ包含スルコト
- (乙) 臨時開設スル工場及平時前項ノ員數未滿ノ職工徒弟ヲ僱使スル工場ニ於テ臨時其以上ノ職工徒弟ヲ僱使スル場合ニ關シテハ特別ノ規定ヲ設クルコト
- (丙) 甲號ニ掲クル以外ノ工場ニモ必要アルトキハ勅令ヲ以テ工場法ノ全部又ハ一部ヲ準用スルコト

第二 工場ノ取締

- (甲) 新ニ工場ヲ設置セントスルトキ及其ノ改築増築等ヲ爲サントスルトキハ行政廳ニ届出テ認可ヲ受ケシメ且行政廳ノ検査ニ合格シタル後

使用セシムルコト

(乙) 工場ニハ危険ヲ豫防シ健康ヲ保全シ風紀ヲ維持シ及公益ヲ害セサル爲必要ナル方法設備ヲ爲スヘキコト

(丙) 寄宿舍其ノ他工場ノ附屬建設物及設備ノ取締ニ關スル事項ハ命令ヲ以テ定ムルコト

第三 汽罐ノ取締

(甲) 工場ニ汽罐ヲ装置セムトスルトキハ行政廳ニ届出テ認可ヲ受ケシムルコト

(乙) 汽罐ハ行政廳ノ検査ニ合格シ検査證書ヲ得タルモノニ非ラサレハ使用セシメサルコト

第四 職工、徒弟ノ年齢ノ制限

十一歳未滿ノ者ハ工場ニ於テ傭使セシメサルコト但シ勅令ヲ以テ向十箇年間左ノ如キ猶豫ヲ與フルコト

滿八歳以上ノ者ハ工場法施行後二箇年ヲ限リ滿九歳以上ノ者ハ次ノ三

箇年ヲ限リ、滿十歳以上ノ者ハ次ノ五箇年ヲ限リ傭使セラル、ヲ得ルコト但シ一タヒ傭使セラレ得ル年齢ニ達シタル者ハ爾後本文ニ牴觸スルニ至ルモ仍傭使ヲ妨ケサルモノトス

第五 徹夜業ノ制限

十六歳未滿ノ男女又ハ滿十六歳以上ノ女子ハ午後十時ヨリ午前四時ニ至ル間工場ニ於テ傭使セシメサルコト但シ左ノ例外ヲ設クルコト

(一) 天災事變ニ際シテハ勅令ヲ以テ一時此ノ制限ヲ撤去スルヲ得ルコト  
(二) 勅令ヲ以テ特種ノ事業及臨時事業ノ繁忙ナル場合ニ關スル除外例ヲ規定スルコト

(三) 工場ニ於テ職工徒弟ヲ二組以上ニ分チ交替ニ傭使スル場合ニ關シテハ勅令ヲ以テ左ノ如キ除外例ヲ規定スルコト

滿十三歳以上十六歳未滿ノ男女及滿十六歳以上ノ女子ハ午後十時ヨリ午前四時ニ至ル間ト雖トモ工場ニ於テ傭使スルヲ得ルコト但シ工場法施行後五箇年間ハ滿十一歳以上十三歳未滿ノ男女ヲモ傭使スル



ヲ得ルコト

(四) 前二號ノ場合ニ就テハ職工徒弟各組交替ノ時期就業時間休憩時間及休日ニ關スル特別ノ規定ニ從フヲ要スルコト

第六 就業時間ノ制限

十六歳未満ノ男女又ハ滿十六歳以上ノ女子ニハ勅令ヲ以テ十二時間以上ノ就業時間ヲ制限スルヲ得ルコトトシ其ノ勅令ハ向十箇年ヲ期シ漸次就業時間ヲ短縮スルノ目的ヲ以テ左ノ如ク定ムルコト但シ天災事變ノ際及臨時事業ノ繁忙ナル場合ニ關シテハ例外ヲ設クルコト

(甲) 十六歳未満ノ男女又ハ滿十六歳以上ノ女子ハ左ニ掲クル就業時間ヲ超エ備使スルヲ得サルコト

第一種工場

十四時間

第二種工場

十五時間

(乙) 工場法施行ノ日ヨリ五箇年ノ後ハ第一種工場ノ就業時間ヲ十三時間ニ短縮シ第二種工場ノ就業時間ヲ十四時間ニ短縮シテ五箇年ヲ經タ

ル後ハ第一種工場ノ就業時間ヲ十二時間ニ短縮シ第二種工場ノ就業時間ヲ十三時間ニ短縮スルコト

(丙) 工場ノ種別ハ別ニ之ヲ定ムルコト

就業時間ノ制限ニ對スル例外ハ左ノ如シ

(一) 臨時事業ノ繁忙ナル場合ニ於テハ一周年間或日數九十日ヲ限り行政應ニ届出テテ制限時間ヲ超ユルコト二時間以内ハ就業時間ヲ延長スルヲ得ルコト

(二) 天災ニ際シテ地方長官ハ農商務大臣ノ指揮ヲ請ヒ地域及期間ヲ限リテ就業時間ノ制限ヲ停止スルヲ得ルコト

(三) 事變ニ際シ陸海軍省所管ノ工場又ハ事件ニ關シ必要ナル事業ヲ營ム官私立ノ工場ニ於テ就業時間ノ制限ニ據リ難キトキハ主務大臣ノ指揮ヲ請ヒ制限以上就業時間ヲ延長スルヲ得ルコト

第七 休憩時間ノコト

十六歳未満ノ男女又ハ滿十六歳以上ノ女子ニ關シテハ勅令ヲ以テ一日一

時三十分間以内ノ食事及休憩時間ニ關スル規則ヲ定ムルヲ得ルコトトシ其ノ勅令ハ左ノ如ク定ムルコト

工場ニ於テハ一日一時三十分間以上ノ食事及休憩時間ヲ定メ十六歳未満ノ男女又ハ滿十六歳以上ノ女子ニ休憩ヲ爲サシムヘキコト但シ一日ノ就業時間カ十二時間以内ナル場合ニ於テハ休憩時間ヲ一時間ト爲シ一日ノ就業時間カ十時間以内ナル場合ニ於テハ休憩時間ヲ四十五分間ト爲スヲ得ルコト

事業ノ種類ニ依リ休憩時間中機械ノ運轉ヲ停止スヘキコト但シ事業ノ種類ハ農商務大臣之ヲ指定スルコト

第八 休日ノコト

十六歳未満ノ男女又ハ滿十六歳以上ノ女子ニ關シテハ勅令ヲ以テ一箇月二日以内ノ休日ニ關スル規則ヲ定ムルヲ得ルコトトシ其ノ勅令ニハ就業時間ノ制限ニ對スル例外ニ準シテ天災事變ノ際及臨時事業ノ繁忙ナル場合ニ關スル例外ヲ設クルコト

第九 特ニ危険ナルカ又ハ衛生ニ害アル業務ニ關スル制限

十六歳未満ノ男女又ハ滿十六歳以上ノ女子ニハ勅令ヲ以テ特ニ危険ナルカ又ハ健康ニ害アル業務ヲ禁止制限スルヲ得ルコトトス但シ其ノ勅令ヲ以テ制限スルモノハ左ノ如シ

- (甲) 運轉中ノ機械ノ危険ナル部分、原動力機若ハ動力傳導裝置ノ掃除、注油検査若ハ修繕又ハ運轉中ノ調帶、調索ノ取外シ若ハ取付ケニ十六歳未満ノ男女又ハ滿十六歳以上ノ女子ヲ僱使スルヲ得サルコト
- (乙) 塵埃、粉末、有害瓦斯ヲ發スル業務、毒藥、劇藥其ノ他有害料品又ハ爆發性、發火性ノ料品ヲ取扱フ業務、塵埃、粉末、有害瓦斯ヲ發生スル場所ニ於ケル業務ニハ十六歳未満ノ男女又ハ滿十六歳以上ノ女子ノ僱使ヲ禁止シ又ハ制限スルコト但シ業務及職工ノ種類ハ農商務大臣之ヲ指定スルコト

第十 業務上ノ死傷ノ扶助

職工徒弟業務上負傷シ又ハ死亡シタル場合ニハ工業主ハ命令ノ定ムル所

- ニ依リ扶助ヲ爲スヘキコト但シ扶助ノ程度ハ左ノ如クスルコト
- (一) 治療看護ノ費用ヲ負擔スルコト
  - (二) 療養ノ爲五日以上ノ休養ヲ要スルトキハ少クモ賃金ノ半額ヲ休業中給與スルコト
  - (三) 負傷ニ依リ終身勞働ニ從事スルコト能ハス又ハ終身勞働ノ能力ヲ減スヘキ不具癱疾ト爲リタルトキハ賃金ノ二箇年分以内ヲ給與スルコト但シ二百五十圓ヲ以テ最高額トスルコト
  - (四) 負傷ニヨリ死亡シタルトキハ葬式ノ費用ヲ負擔スルコト但シ二十圓ヲ以テ最高額トスルコト
  - (五) 死亡者ノ遺族アルトキハ賃金ノ一箇年半分ヲ給與スルコト但シ二百圓ヲ以テ最高額トスルコト
- 第十一 寄宿舎ニ於ケル死傷者ノ扶助
- 工場附屬ノ寄宿舎ニ寄宿スル職工、徒弟負傷シ又ハ疾病ニ罹リタルトキハ三箇月ヲ超エサル期間ニ於テ適當ナル引取人アルマテ治療及看護ヲ與フ

ヘキコト其ノ死亡シテ引取人ナキトキハ葬式ヲ行フヘキコト

第十二 職工、徒弟ノ雇入紹介ノ取締

右ニ關スル事項ハ命令ヲ以テ定ムルコト

第十三 工場ノ監督

工場ノ監督ハ地方長官第一次ノ監督ヲ行ヒ農商務大臣第二次ノ監督ヲ行フコト但シ事ノ重大ナルモノハ農商務大臣ノ指揮ヲ請ハシメ又ハ農商務大臣直接ニ監督處分ヲ行フコト

官立工場ノ監督ニ關シテハ特例ヲ設クルコト

第十四 法律施行ノ期限

工場法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ定ムルコト

工場法施行ノ際現ニ存スル工場又ハ汽罐ニ關シテハ別ニ認可ノ手續ヲ要セス法律施行後一箇年內ニ届出ヲ爲サシムルコト

工場法案要領ニ對スル意見概要

提出意見事項	意見提出者名	關係各官廳	府	道	縣	知事	長官	商會	議所	計
照會發達數										八
回答着數	(意見ナキモ)									八
修正意見ヲ提出シタルモノ										五
制定ノ時機尙早シトスルモノニシテ修正意見ヲ附シタルモノ										三
法律ノ制定ヲ不可トスルモノニシテ修正意見ヲ附シタルモノ										一
法令適用ノ範圍ニ關スルモノ										三
工場及汽罐ノ取締ニ關スルモノ										二
職工徒弟ノ年齢ノ制限ニ關スルモノ										二
徹夜業ノ制限ニ關スルモノ										一
就業時間ノ制限及休憩時間休日ニ關スルモノ										二
危険ナルカ又ハ衛生ニ害アル業務ノ制限ニ關スルモノ										二
業務上ノ死傷ノ扶助及寄宿舎ニ於ル死傷者ノ扶助ニ關スルモノ										一
其他ニ關スルモノ										一
制定ノ時機尙早シトスルモノ										一
法令適用ノ範圍ニ關スルモノ										一
工場及汽罐ノ取締ニ關スルモノ										一
職工徒弟ノ年齢ノ制限ニ關スルモノ										一
徹夜業ノ制限ニ關スルモノ										一
就業時間ノ制限及休憩時間休日ニ關スルモノ										一
危険ナルカ又ハ衛生ニ害アル業務ノ制限ニ關スルモノ										一
業務上ノ死傷ノ扶助及寄宿舎ニ於ル死傷者ノ扶助ニ關スルモノ										一
其他ニ關スルモノ										一

提出意見事項	意見提出者名	關係各官廳	府	道	縣	知事	長官	商會	議所	計
就業時間ノ制限及休憩時間休日ニ關スルモノ										一
危険ナルカ又ハ衛生ニ害アル業務ノ制限ニ關スルモノ										一
業務上ノ死傷ノ扶助及寄宿舎ニ於ル死傷者ノ扶助ニ關スルモノ										一
其他ニ關スルモノ										一
制定ノ時機尙早シトスルモノ										一
法令適用ノ範圍ニ關スルモノ										一
工場及汽罐ノ取締ニ關スルモノ										一
職工徒弟ノ年齢ノ制限ニ關スルモノ										一
徹夜業ノ制限ニ關スルモノ										一
就業時間ノ制限及休憩時間休日ニ關スルモノ										一
危険ナルカ又ハ衛生ニ害アル業務ノ制限ニ關スルモノ										一
業務上ノ死傷ノ扶助及寄宿舎ニ於ル死傷者ノ扶助ニ關スルモノ										一
其他ニ關スルモノ										一

第二十六議會ニ提出シタル工場法案

工場法

第一條 本法ハ左ノ各號ノ一ニ該當スル工場ニシテ勅令ヲ以テ指定スルモノニ之ヲ適用ス

第一章 工場法制定ノ沿革

一 原動力機ヲ装置スルモノ

二 事業ノ性質危険ナルカ又ハ衛生上有害ノ虞アルモノ

第二條 工場主ハ十二歳未満ノ者ヲ工場ニ於テ就業セシムルコトヲ得ス但シ本法施行ノ際十歳以上ノ者ヲ引續キ就業セシムル場合及行政官廳ノ許可ヲ得テ十歳以上ノ者ヲ就業セシムル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第三條 工業主ハ十六歳未満ノ者及女子ヲ夜間工場ニ於テ就業セシムルコトヲ得ス

前項ノ規定ハ十四歳以上ノ者ニ付左ノ各號ノ一ニ該當スル場合ニ之ヲ適用セス本法施行後五年ヲ限リ十二歳以上ノ者ニ付亦同シ

一 一時ニ作業スルニ非サレハ原料ニ變敗ヲ生シ易キ事業ニ就カシムルトキ

二 職工ヲ二組以上ニ分チ交替ニ就業セシムルトキ

前項第二號ノ規定ハ本法施行後十年ニシテ其ノ效力ヲ失フ但シ繼續作業ヲ要スル事業ニシテ女子ヲ夜間工場ニ於テ就業セシメサルモノニ付テハ

此ノ限ニ在ラス

第二項第一號及前項ノ事業ノ種類竝第二項第二號ノ場合ニ於ケル就業時間休憩時間交替及休暇ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第四條 前條ニ於テ夜間ト稱スルハ四月一日ヨリ九月三十日迄ハ午後九時ヨリ午前四時迄トシ十月一日ヨリ三月三十一日迄ハ午後十時ヨリ午前五時迄トス

第五條 工業主ハ十六歳未満ノ者及女子ヲシテ一日十二時間ヲ超エ就業セシムルコトヲ得ス

主務大臣ハ事業ノ種類ニ依リ前項ノ就業時間ヲ二時間以内延長スルコトヲ得

第六條 工業主ハ十六歳未満ノ者及女子ニ對シ毎月少クトモ二日ノ休日ヲ設ケ又一日ノ就業時間カ六時間ヲ超ユルトキハ少クトモ四十五分間、十時間ヲ超ユルトキハ少クトモ一時間ノ休憩時間ヲ就業時間中ニ於テ設ク可シ

第七條 天災事變又ハ事變ノ虞アル爲必要アル場合ニ於テハ主務大臣ハ第三條第五條又ハ第六條ノ規定ノ適用ヲ停止スルコトヲ得

臨時事業ノ繁忙ナル場合ニ於テハ工業主ハ期間ヲ定メ行政官廳ノ許可ヲ得テ第五條ノ就業時間ヲ延長シ又ハ第六條ノ休暇ヲ廢スルコトヲ得但シ其ノ期間ニシテ毎月五日ヲ超エサルトキハ豫メ行政官廳ニ届出テ就業時間ヲ二時間以内延長スルコトヲ得

第八條 工業主ハ十六歳未満ノ者及女子ヲシテ運轉中ノ機械若ハ動力傳導裝置ノ危険ナル部分ノ掃除注油検査若ハ修繕ヲ爲シ又ハ運轉中ノ機械若ハ動力傳導裝置ニ調帶調索ヲ取付ケ其ノ他命令ヲ以テ指定スル危険ナル業務ニ就カシムルコトヲ得ス

第九條 工業主ハ十六歳未満ノ者ヲシテ毒藥劇藥有害料品又ハ爆發性若ハ發火性ノ料品ヲ取扱フ業務並著シク塵埃粉末ヲ飛散シ又ハ有害瓦斯ヲ發生スル場所ニ於ケル業務其ノ他危険若ハ衛生上有害ナル場所ニ於ケル業務ニ就カシムルコトヲ得ス

前項ノ業務ハ命令ヲ以テ之ヲ指定ス

主務大臣必要ト認ムルトキハ十六歳以上ノ女子ニ關シテモ第一項ノ規定ヲ適用スルコトヲ得

第十條 主務大臣ハ病者又ハ産婦ノ使用ヲ制限シ又ハ禁止スルコトヲ得

第十一條 行政官廳ハ命令ノ定ムル所ニ依リ工場及附屬建物並設備カ危険ヲ生シ又ハ衛生風紀其ノ他公益ヲ害スル虞アリト認ムルトキハ豫防又ハ除害ノ爲必要ナル事項ヲ工業主ニ命シ必要ト認ムルトキハ其ノ全部又ハ一部ノ使用ヲ停止スルコトヲ得

前項ノ處分ニ不服アル者ハ訴願ヲ提出シ違法ニ權利ヲ傷害セラレタリトスルトキハ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第十二條 當該官吏ハ工場又ハ其ノ附屬建設物ニ臨檢スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ其ノ證票ヲ携帯ス可シ

第十三條 工業主ハ職工自己ノ重大ナル過失ニ因ラスシテ業務上負傷シ疾病ニ罹リ又ハ死亡シタルトキハ勅令ノ定ムル所ニ依リ本人又ハ其ノ遺族

ヲ扶助ス可シ

第十四條 職工ノ雇入、解雇、周旋ノ取締及徒弟ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十五條 職工若ハ職工タラントスル者又ハ其ノ法定代理人及工業主ハ職工又ハ職工タラムトスル者ノ戸籍ニ關シテ戸籍吏ニ對シ無償ニテ證明ヲ求めルコトヲ得

第十六條 第一條ニ該當セサル工場ニ付必要ト認ムルトキハ勅令ヲ以テ本法ノ全部又ハ一部ヲ適用スルコトヲ得

第十七條 第二條、第三條第一項、第五條、第六條、第八條、第九條及第十三條ノ規定又ハ第三條第四項若ハ第十條ノ規定ニ基キテ發スル命令ニ違背シタル者及第十一條第一項ノ規定ニ依ル行政官廳ノ處分ニ從ハサル者ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

第十八條 當該官吏ノ臨檢ヲ拒ミ又ハ妨ケタル者及臨檢ノ際當該官吏ノ訊問ニ對シ答辯ヲ爲サス又ハ虛偽ノ陳述ヲ爲シタル者ハ三百圓以下ノ罰金

ニ處ス

第十九條 工業主ハ職工ノ年齢ヲ知ラサルノ故ヲ以テ本法ノ處罰ヲ免ルルコトヲ得ス

但シ工業主及取扱者ニ過失ナカリシ場合ハ此ノ限ニ在ラス

第二十條 工業主ハ其ノ代理人、戶主、家族、同居者、雇人、其ノ他ノ從業者ニシテ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ違背シタルトキハ自己ノ指揮ニ出テサルノ故ヲ以テ其ノ處罰ヲ免ルコトヲ得ス

第二十一條 工業主未成年者若ハ禁治産者ナルトキ又ハ命令ノ定ムル所ニ依リ別ニ工業管理人ヲ置キタルトキハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ依リ工業主ニ適用スヘキ罰則ハ之ヲ其ノ法定代理人又ハ工業管理人ニ適用ス

營業ニ關シ成年者ト同一ノ能力ヲ有スル未成年者ニ付テハ前項法定代理人ニ關スル規定ヲ適用セス

第二十二條 明治三十三年法律第五十二號ハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル

命令ニ依ル犯罪ニ之ヲ準用ス

(參照)

第一條 法人ノ代表者又ハ其ノ雇人其ノ他ノ從業者法人ノ業務ニ關シ租税ニ關スル法規ヲ犯シタル場合ニ於テハ各法規ニ規定シタル罰則ヲ法人ニ適用ス但シ其ノ罰則ニ於テ罰金科料以外ノ刑ニ處スヘキコトヲ規定シタルトキハ三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二條 法人ヲ處罰スヘキ場合ニ於テハ法人ノ代表者ヲ以テ被告人トス

第三條 法人ヲ處罰スルノ裁判確定シタル日ヨリ罰金ニ關シテハ一月以内科料ニ關シテハ十日以内ニ之ヲ完納セサルトキハ民事訴訟法第六編ノ規定ニ從ヒテ其ノ執行ヲ爲ス此ノ場合ニ於テハ檢事ノ命令ヲ以テ執行力ヲ有スル債務名義ト同一ノ效力アルモノトス  
前項ニ依リ執行ヲ爲スニハ執行前裁判ノ送達ヲ爲スコトヲ要セス

第二十三條 本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ハ罰則ヲ除クノ外官立又ハ

公立ノ工場ニ之ヲ適用ス

官立工場ニ關シテ所轄官廳ハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ依リ行政官廳ニ屬スル職務ヲ行フ

附則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

### 第三節 第三期(自明治四十三年至明治四十四年)

第二十六議會ニ提出セラレタル工場法案ハ遂ニ撤回ノ已ムナキニ至レリ。然レトモ今ヤ有識者中工場法ノ制定ニ對シテ異論ヲ挾ムモノハ殆ントナク、又工業主中ニ在リテモ、之ニ對シテ根本的ニ反對ノ意見ヲ有スル者ハ極メテ少數ニシテ、唯法律規程事項ノ適否如何ニ付諸説ノ紛々タルヲ見ルノミ。左レハ法案ノ撤回ハ更ニ一層精密ノ調査ヲ遂ケ、且各方面ノ意見ヲ精査シテ適當ノ修正ヲ加ヘ、次期議會ニ提出スヘキコトヲ意味シタルモノニ外ナラサルナリ。

明治四十三年六月參事官岡實工務局長ニ任セラレ本件ヲ進行スルコトナリ、



參事官片山義勝、技師野田忠廣、同小西正二、同樋口春一、同庄司市太郎氏等ノ職員ト共ニ更ニ工場及職工ノ衛生事項、歸郷女工ノ健康狀態並婦女幼少者ニ禁止スヘキ業務ノ種類等ニ關スル調査ヲ進メ、前法案中論難ノ一焦點ナリシ命令委任ノ條項ハ出來得ル限之ヲ法律中ニ規定センコトヲ試ミタリ。然リ而シテ婦女幼少者ノ徹夜業禁止ノ規定ハ前議會ニ於テ本案ノ成立ニ至ラザリシ最モ重ナル原因ヲ爲スモノナリト雖、此ノ規定ヲ削除スルハ最モ忍ヒ難キ所ナルヲ以テ、依然之ヲ存置スルコトニ決シ、一方ニ於テハ紡績業カ蒙ル可キ經濟上ノ影響如何ヲ精査シ、夜業ノ一部禁止ヨリ遂ニ全禁ニ導ク可キ方法ヲ攻究スルニ殆ント全力ヲ傾注セリ。斯クテ其ノ他ノ箇條ニ付テモ十分ノ審議ヲ重ネタル後、前年提出ノ法案ヲ修正シテ法案全部ニ亘リテ精密ナル説明書ヲ作製シ、同年十月前例ニ依リ關係各省地方長官、商業會議所、社會政策學會、大日本蠶絲會、大日本紡績聯合會、工業協會其ノ他ノ工業團體ニ照會又ハ諮問シテ其ノ意見ヲ求メ、之ト同時ニ中央衛生會ニ諮詢セリ。而シテ此等答申ノ略ホ集マルヲ待ツテ答申案ヲ具シテ法案ヲ生産調査會ノ議ニ付シタリ。諮問案ノ全文及前期議會提出案ニ對スル修正箇條ノ要點左ノ如シ

明治四十三年十月諮問案

第一條 本法ハ左ノ各號ノ一ニ該當スル工場ニシテ勅令ヲ以テ指定スルモノニ之ヲ適用ス

- 一 原動力ヲ用ウルモノ
- 二 事業ノ性質危険ナルカ又ハ衛生上有害ノ虞アルモノ
- 三 當時十人以上ノ職工ヲ使用スルモノ

第二條 工業主ハ十二歳未満ノ者ヲシテ工場ニ於テ就業セシムルコトヲ得ス但シ本法施行ノ際十歳以上ノ者ヲ引續キ就業セシムル場合ハ此ノ限ニ在ラス

行政官廳ハ輕易ナル業務ニ付キ就業ニ關スル條件ヲ附シテ十歳以上ノ者ノ就業ヲ許可スルコトヲ得

第三條 工業主ハ十六歳未満ノ者及女子ヲシテ一日ニ付キ十二時間ヲ超エテ就業セシムルコトヲ得ス

主務大臣ハ業務ノ種類ニ依リ前項ノ就業時間ヲ二時間以内延長スルコト

ヲ得

就業時間ハ工場ヲ異ニスル場合ト雖前二項ノ規定ノ適用ニ付テハ之ヲ通算ス

第四條 工業主ハ十六歳未満ノ者及女子ヲシテ午後十時ヨリ午前四時ニ至ル間ニ於テ就業セシムルコトヲ得ス

第五條 左ノ各號ノ一ニ該當スル場合ニ於テハ前條ノ規定ヲ適用セス但シ本法施行十年後ハ十四歳未満ノ者及二十歳未満ノ女子ヲシテ午後十時ヨリ午前四時ニ至ル間ニ於テ就業セシムルコトヲ得ス

一 一時ニ作業ヲ爲スコトヲ必要トスル特種ノ事由アル業務ニ就カシムルトキ

二 夜間ノ作業ヲ必要トスル特種ノ事由アル業務ニ就カシムルトキ

三 晝夜連續作業ヲ必要トスル特種ノ事由アル業務ニ職工ヲ二組以上ニ分チ交替ニ就業セシムルトキ

前項ニ掲ケタル業務ノ種類ハ主務大臣之ヲ指定ス

### 第六條

職工ヲ二組以上ニ分チ交替ニ就業セシムル場合ニ於テハ本法施行後五年間第四條ノ規定ヲ適用セス本法施行五年後左ノ各號ノ一ニ該當スル場合ニ於テハ更ニ十年間亦同シ但シ本法施行十年後ハ十四歳未満ノ者ヲシテ午後十時ヨリ午前四時ニ至ル間ニ於テ就業セシムルコトヲ得ス

一 午前零時ヨリ午前四時ニ至ル間ニ於テ就業スル組ノ職工員數ヲ他ノ組ノ職工員數ニ比シ初ノ五年間ニ在リテハ十分ノ八以下、次ノ五年間ニ在リテハ十分ノ六以下ノ割合トスルモノ

二 午後十時ヨリ午前四時ニ至ル間ニ於テ十六歳未満ノ者及女子ノ就業スル作業時間ヲ初ノ五年間ニ在リテハ四時間以内、次ノ五年間ニ在リテハ二時間以内トスルモノ

### 第七條

工業主ハ十六歳未満ノ者及女子ニ對シ毎月少クトモ二回ノ休日ヲ設ケ、職工ヲ二組ニ分チ交替ニ午後十時ヨリ午前四時ニ至ル間ニ於テ就業セシムル場合及第五條第一項第二號ニ該當スル場合ニ於テハ少クトモ四回ノ休日ヲ設ケ又一日ノ就業時間カ六時間ヲ超ユルトキハ少クトモ三十

分、十時間ヲ超ユルトキハ少クトモ一時間ノ休憩時間ヲ就業時間中ニ於テ設ク可シ

職工ヲ二組以上ニ分チ交替ニ午後十時ヨリ午前四時ニ至ル間ニ於テ就業セシムルトキハ一週間ヲ超エサル期間毎ニ其ノ就業時ヲ轉換ス可シ

第八條 天災事變ノ爲又ハ事變ノ虞アル場合ニ於テハ主務大臣ハ前五條ノ規定ノ適用ヲ停止スルコトヲ得

避クヘカラサル事由ニ因リ臨時必要アル場合ニ於テハ工業主ハ行政官廳ノ許可ヲ得テ期間ヲ限リ第三條ノ規定ニ拘ラス就業時間ヲ延長シ、第四條乃至第六條ノ規定ニ拘ラス職工ヲ就業セシメ又ハ前條ノ休日ヲ廢スルコトヲ得

臨時必要アル場合ニ於テハ工業主ハ其ノ都度豫メ行政官廳ニ届出テ一月ニ付キ五日ヲ超エサル期間就業時間ヲ二時間以内延長スルコトヲ得

第九條 工業主ハ十六歳未満ノ者及女子ヲシテ左ノ各號ニ掲ケタル業務ニ就カシムルコトヲ得ス

- 一 蒸気罐、原動機、電氣機械、動力傳導裝置其ノ他ノ機械若ハ裝置ノ危険ナル部分ノ掃除、注油、検査、修繕其他ノ取扱ヲ爲シ又ハ之ニ接近シテ爲ス業務
- 二 機械又ハ動力傳導裝置ノ運轉中ニ調帶、調索ノ取付又ハ取外ヲ爲ス業務
- 三 足場、車軸道、梯子其ノ他墜落ノ虞アル場所ニ於ケル業務

第十條 工業主ハ十六歳未満ノ者ヲシテ左ノ各號ニ掲ケタル業務ニ就カシムルコトヲ得ス

- 一 チアン水素酸、チアン化合物、砒素、砒素化合物、水銀、水銀化合物、磷、磷含有物、硫酸、硝酸、鹽酸、苛性カリ、苛性ナトロン其ノ他毒性又ハ劇性ノ物品ヲ取扱フ業務
- 二 エーテル、ベンゼン、二硫化炭素其ノ他ノ危険性物品ヲ取扱フ業務
- 三 土石、礦物、骨角等ノ粉碎、篩別又ハ襪襪、綿、麻、獸毛、藁等ノ撰別、梳解、截斷其ノ他ニ依リ著シク塵埃粉末ヲ發散スル場所ニ於ケル業務

四 チアン水素酸砒素、水銀、燐、鉛、亞鉛、クローム、クロール、フルオール、アニリン又ハ其ノ化合物其ノ他ノ毒性物ヲ氣狀若ハ粉狀ニ於テ發散スル場所ニ於ケル業務

第十一條 主務大臣ハ前二條ニ掲ケタル業務ノ範圍ヲ定メ及之ニ準スヘキ業務ニ付前二條ノ規定ヲ適用シ又ハ十六歳以上ノ女子ニ付前條ノ規定ヲ適用スルコトヲ得

第十二條 主務大臣ハ病者及産婦ニ付其ノ就業ヲ制限シ又ハ禁止スルコトヲ得

第十三條 行政官廳ハ命令ノ定ムル所ニ依リ工場及附屬建設物竝設備カ危害ヲ生シ又ハ衛生、風紀其ノ他公益ヲ害スル虞アリト認ムルトキハ豫防又ハ除害ノ爲必要ナル事項ヲ工業主ニ命シ必要ト認ムルトキハ其ノ全部又ハ一部ノ使用ヲ停止スルコトヲ得  
前項ノ處分ニ不服アル者ハ訴願ヲ提起シ違法ニ權利ヲ傷害セラレタリトスルトキハ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第十四條 當該官吏ハ工場又ハ其ノ附屬建設物ニ臨檢スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ其ノ證票ヲ携帯ス可シ

第十五條 職工自己ノ重大ナル過失ニ依ラスシテ業務上負傷シ、疾病ニ罹リ又ハ死亡シタルトキハ工業主ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ本人又ハ其ノ遺族ヲ扶助ス可シ

第十六條 職工、職工タラムトスル者若ハ工業主又ハ其ノ法定代理人若ハ工場管理人ハ職工又ハ職工タラムトスル者ノ戶籍ニ關シ戶籍吏ニ對シ無償ニテ證明ヲ求ムルコトヲ得

第十七條 職工ノ雇入、解雇、周旋ノ取締及徒弟ニ關スル事項ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十八條 工業主ハ工場管理人ヲ選任スルコトヲ得

工場管理人ノ選任ハ行政官廳ノ認可ヲ受ク可シ但シ法人ノ理事、會社ノ業務ヲ執行スル社員、會社ヲ代表スル社員、取締役、業務擔當社員其ノ他法令ノ規定ニ依リ法人ヲ代表スル者及支配人ノ中ヨリ選任スル場合ハ此ノ限ニ

在ラス

第十九條 工場管理人ハ本法及本法ニ基キテ發スル命令ノ適用ニ付テハ工業主ニ代ハルモノトス

工業主營業ニ關シ成年者ト同一ノ能力ヲ有セサル未成年者若ハ禁治産者ナル場合又ハ法人ナル場合ニ於テハ工場管理人ナキトキハ其ノ法定代理人又ハ理事業務ヲ執行スル社員會社ヲ代表スル社員取締役業務擔當社員其ノ他法令ノ規定ニ依リ法人ヲ代表スル者ニ付亦前項ニ同シ

第二十條 第二條乃至第七條第九條及第十條ノ規定又ハ之ニ基キテ發スル命令ニ違背シタル者及第十三條第一項ノ規定ニ依ル處分ニ從ハサル者ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十一條 當該官吏ノ臨檢ヲ拒ミ若ハ之ヲ妨ケ又ハ臨檢ノ際當該官吏ノ訊問ニ對シ答辯ヲ爲サス又ハ虚偽ノ陳述ヲ爲シタル者ハ三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十二條 工業主ハ其ノ代理人、戶主、家族同居者、雇人、其ノ他ノ從業者ニシ

テ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ違背スル所爲ヲ爲シタルトキハ自己ノ指揮ニ出テサルノ故ヲ以テ其ノ處罰ヲ免ルルコトヲ得ス

工業主ハ職工ノ年齢ヲ知ラサルノ故ヲ以テ本法ノ處罰ヲ免ルルコトヲ得ス但シ工業主及取扱者ニ過失ナカリシ場合ハ此ノ限ニ在ラス

第二十三條 本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ハ工場管理人ニ關スル規定及罰則ヲ除クノ外官立又ハ公立ノ工場ニ之ヲ適用ス

官立工場ニ關シテハ所轄官廳ハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ依リ行政官廳ニ屬スル職務ヲ行フ

附 則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

前提出案ニ對スル修正事項

第一 法律適用範圍ニ付勅令ノ委任ヲ削除シ更ニ職工十人以上ノ工場ニ適用スヘキコトヲ規定シタルコト(本案第一條、提出案第一條及第十六條)

第二 工場ニ於ケル就業時間ハ工場ヲ異ニスル場合トモ之ヲ通算スルノ規

定ヲ設ケタルコト

- 第三 提出案ハ夜間ト稱スル時間ヲ季節ニ依リテ區別シ之ヲ七時間ト爲シタリシカ本案ハ之ヲ六時間トシ季節ニ依ル區別ヲ廢止シタリ(本案第四條提出案第四條)
- 第四 夜間作業ヲ必要トスル特殊ノ事由アル業務ニ付幼少者及女子ノ夜間ノ労働ヲ認ムル範圍ヲ擴張シタルコト(本案第五條第一項第一條)
- 第五 前記事業ニ付夜間ノ労働ニ幼少者及女子ヲ使用スルコトニ付左ノ變更ヲ加ヘタルコト(上同)

- 一 提出案ハ十二歳以上十四歳迄ノ者ニ付法律施行後五箇年迄ヲ限リ夜業ヲ認ムルコトト規定セシカ本案ハ現ニ交替シテ徹夜業ヲ爲シツツアル其ノ他ノ事業(本案第六條)トノ權衡ヲ顧ミ十箇年迄ハ之ヲ認ムルコトト爲シタルコト

- 二 提出案ハ晝夜繼續作業ヲ要スル事業ニ對シテモ女子ノ徹夜業ヲ禁止シタリシカ(女子ノ使用ハ一時ニ作業スルコトヲ要スル)本案ハ事業ノ性質上必要ナル以上ハ成年以上ノ女子ニ限り之カ使用ヲ認ムルコトトセリ

第六 提出案ハ法律施行後十箇年ノ餘裕ヲ置キ十年後ニ於テハ前記特種ノ事業ヲ除クノ外一齊ニ夜業ヲ禁止スル趣旨ナリシカ本案ハ法律施行五年後ヨリ漸次夜業ニ従事スル職工員數又ハ夜業ノ時間ヲ減縮セシメ十五年後ニ至リ全廢ノ實ヲ舉ケシメントス(本案第六條提出案第三條第三項)

第七 提出案ハ深夜ニ労働スル職工ノ就業時間、休憩時間、交替及休暇ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ムルコトト規定シタリシカ本案ハ之ヲ削除シ就業時間、交替及休暇ニ關シテハ法律中ニ之ヲ規定スルコトトシ休憩時間ニ付テハ法律ノ範圍内ニ於テ工業主自ラ定ムル所ニ委ネタリ(本案第六條提出案第四項)

第八 提出案ハ幼少者及女子ノ休憩時間ニ付一日ニ十時間ヲ超エサルトキハ少クトモ四十五分間ヲ與フヘシト規定セルモ本案ハ三十分ヲ以テ最低限トセリ(本案第七條提出案第六條)

第九 提出案ハ臨時事業ノ繁忙ナルトキハ許可ヲ得テ就業時間ヲ二時間以內延長スルコトヲ得ル旨ヲ規定セリ然ルニ本案ハ避ク可カラサル事由ニ

依ル必要ニ應スル爲ナルトキハ就業時間延長ノ外夜業禁止若ハ夜業制限ノ解除ヲモ爲スコトヲ得ルコトトシ、又不可避ノ事由ノ有無ニ拘ラス臨時必要アルトキハ一箇月五日ヲ超エサル期間任意ニ就業時間ヲ二時間以内延長スルコトヲ得セシメタリ(本案第四條第二項提)  
(出案第七條第二項提)

第十 提出案ハ幼少者及女子ヲシテ從事セシムヘカラサル業務ニ付概括的規定ヲ設ケタルニ過キサリシカ本案ハ業務ノ種類ヲ掲記シ其ノ他ノ禁止制限スヘキ業務ニ付大體準據スヘキ標準ヲ規定スルコトトセリ(本案第九條第十條)  
(本案第十一條提出案)  
(本案第九條)

右修正ニ際シテハ前ニモ述フルカ如ク、提出案中命令ニ讓リタル事項ヲ出來得ル法律中ニ明規センコトヲ努メタリト雖、工業ノ種類及性質並事業經營ノ方法千態萬狀ニシテ一々限定詳規センコト殆ント不可能ニ屬スルモノ多キノミナラス、假リニ之ヲ敢テスルモ却テ法律運用上箇々ノ場合ニ於テ其ノ實狀ニ適合セサルモノヲ生スルヲ以テ、尙勅令又ハ命令ニ讓リ又ハ主務大臣ノ裁量ニ委スルノ規定ヲ存置シタルモノ事實已ムヲ得サルニ出テタルナリ。

以上列記シタルモノノ外提出案ニ修正ヲ加ヘタル重ナル個條ハ工場管理人ニ關スル規定ナリ。本案ニ於テハ工業主ハ工場管理人ヲ置クコトヲ得ヘキモノトシ、工場法遵守上ノ責任者ヲ定メ違反ノ所爲アルトキハ管理人其ノ者ノミヲ處罰スルコトト爲シ、法人ノ經營スル工場ニシテ管理人ナキトキハ重役其ノ他ノ代表者ヲ責任者ト爲スノ主義ヲ採レリ。其ノ斯ノ如キ規定ヲ設ケタル所以ハ、會社其ノ他ノ法人カ經營スル工場ノ管理人ハ假令自己ノ工場ニ非ストスルモ、工場及職工ニ對シテ支配權ヲ有スルコト、其ノ他ノ工業主カ支配權ヲ有スルノ状態ト異ル所ナキヲ以テナリ。若シ夫レ前提出案ノ如ク法人其ノモノノミヲ罰シテ事實支配權ヲ有スル個人ノ責任ヲ問ハサルコトトセムカ、法人ノ工場ニ對スル取締ハ個人ノ工場ニ比シテ著シク寬嚴ノ差アルヲ免レサレハナリ。而シテ個人ト雖工業主自ラ工業ヲ管理セサルトキ其ノ他正當ノ事由アルトキハ、認可ヲ得テ管理人ヲ置クコトヲ認メタルヲ以テ、此ノ點ニ於テハ兩々責任上ノ取扱ニ差等アルコトナキナリ。(本案第十八條、第十九條提出)  
(本案第二十一條、第二十二條)

諮問案ノ前提出案ト異ナル要點ハ前記ノ如シ、而シテ之ニ對スル地方長官商業

會議所其ノ他ノ答申ノ大體ハ左ノ如シ

工場法案諮問概表(明治四十三年十月二十六日調)

提出意見事項	提出意見者名	府道警 縣廳視 知長總 事官監	商業會議所	工業團體其ノ他	合計
照會發送數	四八	四八	六〇	七	一一五
回答到着數	四八	四八	六〇	七	一一五
全部賛成又ハ異議ナキモノ	三四	三四	一七	〇	五一
大體ニ於テ賛成ナルモノ 正意見ヲ提出シタルモノ	一四	一四	四二	七	六三
制定ノ時機尙早シトスルモノ					一

諮問ノ成績前表ノ如ク、制定ノ時機尙早シトスルモノハ僅ニ一アルノミニシテ其ノ他ハ大體ニ於テ法律制定ノ必要ヲ認ムルニ至リタルハ偶以テ大勢ノ推移スル所ヲ知ルニ足ルヘシ

修正意見中其ノ重ナルモノノ内容ヲ略述スレハ、第一條ニ規定スル法律ノ適用

範圍ニ關シテハ最モ異見多ク第一號ノ「原動力ヲ用ウルモノ」ニ對シ「原動力ヲ用キ常時十人以上ノ職工ヲ使用スルモノ」トスルコトヲ希望シ、或ハ此ノ人員ヲ五人以上トシ或ハ二十人以上トセルモノアリ、又第一號ト第三號ノ「常時十人以上ノ職工ヲ使用スルモノ」ト修正シタルモノアリ。又第三號ニ對シテハ「常時二十人以上ノ職工ヲ使用スルモノ」ト修正シタルモノ最モ多ク、更ニ此ノ人數ヲ高メテ三十人以上トシタルモノアリ。其ノ他第二條ノ職工ノ最低年齢ノ制限ニ對シテハ十二歳未満トアルヲ單ニ十三歳未満トシ、或ハ十二歳未満トスルト共ニ義務教育未修了者ニ對スル教育方法ノ規定ヲ追加スルコトヲ希望セルモノアリ。第三條ノ十六歳未満ノ者及女子ノ就業時間ヲ一日ニ付十二時間以内トスル規定ニ對シ、十三時間又ハ十四時間トシ、或ハ十六歳未満ヲ十四歳又ハ十五歳未満トスルモノアリ。又同條第二項ノ就業時間ヲ二時間以内延長シ得ル規定ニ對シ、之ヲ三時間又ハ四時間ト修正セントシ、或ハ反對ニ時間延長ニハ女子ヲ除クヘシトシ、或ハ時間延長ハ本法施行後十年間ニ限ルヘシト謂フモノアリ。第四條及第五條ノ夜間勞働ノ禁止又ハ制限ニ對シテハ、夜



間ト稱スル時間ヲ短縮セントスルアリ、或ハ之ヲ増加セントスル意見モアリ、其ノ他職工使用上ノ禁止又ハ制限ヲ受クル幼少者ノ年齢ニ對シテハ少數者ノ意見ノ發表アリ。而シテ前期提出案中修正箇條ノ大眼目トモ見ルヘキ夜業ノ漸禁ヲ規定スル第六條ニ付テハ、其ノ第一項第一號及第二號ニ掲クル條件ニ從ヒ、夜業全禁ノ實施期ヲ通計十五箇年後トシタルニ拘ラス、紡績業者ハ斯ノ如キ漸禁條件ヲ遵奉シテ作業スルコトハ實際ニ於テ甚ダ困難ナルノミナラス、其ノ取締又至難ナルヘシトノ理由ニ依リテ同條ノ「本法施行後五年間第四條(夜業禁止)ノ規定ヲ適用セス」ノ「五年間」ヲ「十五年間」ト修正シ、其ノ間何等ノ條件ヲ置カサルコトヲ希望シ、商業會議所數箇所及日本工業協會等亦之ト意見ヲ同ウシ、無條件ニテ此ノ「五年間」ヲ「十五年間」ト修正シタリ。其ノ他此ノ條項ニ關シ前年ノ提出案通り十年後ノ禁止ニテ差支ナシト答申シタルモノハ二縣知事四會議所及一學會ナリ。第九條第十條ノ幼少者及女子ニ對シ禁止スヘキ業務ノ種類ノ規定ニ付テハ諮問案ハ詳密ニ過クル嫌アルヲ以テ前年提出案ノ如ク概括的ニ規定スルコトヲ希望シタルモノ多ク、此ノ外第七條ノ休日、休憩、第八條ノ非常ノ場合ニ對スル規定其ノ他ニ付各多少ノ

修正意見アリ。尙ホ中央衛生會ハ第十條ノ藥品名ノ意義ヲ明カニスル爲之ニ對シテ一二ノ修正ヲ爲シタル外諮問案全部ヲ是認セリ。

翻テ前記各種ノ答申案ヲ審査シタル後、會議ヲ開始シタル生産調査會ハ本案ノ審査ヲ男爵澁澤榮一氏ヲ委員長トセル十七名ノ特別委員ニ附托セリ。委員會ハ別ニ紡績業者、製絲業者、印刷業者及醫師等ノ實際家ヲ招キテ親シク其ノ意見ヲ聽キ、數回ノ委員會ヲ開キ、審議ノ末法律ノ適用範圍其ノ他ニ對シ修正ヲ加ヘタリ。修正ノ要綱左ノ如シ。

(一) 法律適用ノ範圍ニ關スルモノ、

諮問案第一條第一項ハ勅令ノ指定ニ依リ初メテ適用ノ範圍明確トナルモノニシテ、勅令ノ出ツルニアラサレハ其ノ範圍ノ廣狹全ク不明ナリ。故ニ各號ノ一ニ該當スルモノニハ總テ適用スルヲ原則トシ、勅令ヲ以テ適用ヲ要セサルモノヲ除外スル方可ナリトノ理由ニテ第一項ヲ修正シ、尙ホ原則力ヲ用ウルモノハ職工ノ員數ヲ問ハス總テ之ヲ取締ルカ如キ必要ナシトテ第一號ヲ削リ唯十人以下ノ職工ヲ使用スル工場ニシテ原動力ヲ用ウルモノニハ婦女幼少者ヲシテ

危険ナル業務ニ就カシメサル規定、工場並設備ニ關スル處分規定及此等規定ノ施行ニ必要ナル條項ニ限リ本法ヲ適用スルコトトセリ。

(二) 被保護職工ノ年齢ノ低減ニ關スルモノ、

諮問案中一日ノ就業時間、夜間ノ就業、休日、休憩、危険又ハ衛生上有害ノ業務ニ就カシメサル規定ヲ適用スヘキ少年工ノ年齢ハ十六歳未滿ナリシカ總テ之ヲ十五歳未滿ト修正セリ、

(三) 第三條ノ就業時間延長ニ關スルモノ、

業務ノ種類ニ依リ婦女幼少者ノ十二時間ノ就業ヲ十四時間ニ延長シ得ルノ規定ヲ十五年間ニ限リ効力アルモノト爲シタルコト

(四) 第五條ノ夜業禁止年限延長ニ關スルモノ、

第五條ニ掲クル特殊業務ニ對シ、十年後ニハ十四歳未滿ノ者及二十歳未滿ノ女子ノ夜業ヲ禁止スヘキ旨ノ規定ヲ修正シテ、十五年後ノ禁止ニ延長セリ

(五) 第六條ノ夜業漸禁ニ關スルモノ、

職工ヲ二組以上ニ分チ交替ニ就業セシムル場合ニ於テ、法定條件ヲ遵奉スル以

上ハ十五年間婦女幼少者ノ夜業禁止規定ノ適用ヲ猶豫スヘキ旨ノ案ニ對シ、此ノ條件ノ實行ト其ノ取締ハ甚ダ困難ナリトノ理由ニ依リ、何等特殊ノ條件ヲ設ケスシテ十五年間ハ夜業ヲ禁止セスト修正セリ、

(六) 婦女幼少者又ハ幼少者ノミニ對シテ禁止スヘキ業務ノ種類ニ關スルモノ

談問案ハ較、具體的ニ業務ノ種類ヲ列舉シタルモ、此ノ如キ事項ハ法律ニ於テハ其ノ大體ノ精神ノミヲ掲ケ、細密ノ規定ハ之ヲ命令ニ讓リテ適用上遺漏ナキヲ期スル方可ナリトシ、之ヲ修正シテ略ホ前年ノ提出案通リトセリ、

以上ハ生産調査會ノ修正事項ノ重ナルモノナリ。此ノ外臨時必要アル場合ニ行政官廳ニ届出テ就業時間ヲ延長シ得ヘキ日數一月ニ付五日ヲ七日ト改メ、又罰金額ノ輕減其ノ他ニ付修正ヲ加ヘタリ。

生産調査會カ前記ノ修正ヲ爲スニ當リテハ、地方長官及各團體等ノ答申意見ノ外、立案者ノ説明ヲ十分ニ聽取シタルモノナルヲ以テ、其ノ修正ハ大體ニ於テ同意ヲ表スヘキモノナリト認メ、更ニ内務省トノ合議ヲ經テ閣議其ノ他ノ手續ヲ完了シ、二月二日ヲ以テ第二十七議會衆議院ニ提出スルコトトナレリ。

衆議院ハ大岡育造氏ヲ委員長トスル十九名ノ特別委員ニ附托シ、委員會ハ開會六回ニ亘リ討論審議ノ末、法律適用ノ範圍其ノ他ノ條項ニ付別記ノ如ク修正ヲ加ヘ本會議ニ報告セリ。然ルニ本會議ハ第一條第一號適用範圍ノ規定事項中、委員會カ常時二十人以上ノ職工ヲ使用スルモノト修正シタルヲ、更ニ常時十五人以上ノ職工ヲ使用スルモノニ改メタルノミニテ、他ハ全部委員會ノ決議案ヲ是認シ大ニ多數ヲ以テ之ヲ通過シタリ。

同法案ハ更ニ三月二日ヲ以テ貴族院ニ提出セラレ、同院ニ於テハ子爵三島彌太郎氏ヲ委員長トセル十九名ノ特別委員ノ審査ニ付セラレ、會議ヲ重ヌルコト六回大多數ヲ以テ衆議院ノ修正ヲ是認シ、三月二十日ヲ以テ本會議ニ報告セラレタリ。而シテ本會議モ亦大多數ヲ以テ修正案ヲ議決シ、茲ニ三十年來ノ懸案タリシ工場法案ノ協賛ヲ得ルニ至リ、四十三年三月二十八日ヲ以テ立法ノ手續ヲ完了セラレタリ。左ニ提案ニ對スル議會ノ修正箇條ト提案全文(修正條項添付)ヲ記シテ本節ヲ終ルヘシ。

## 議會修正ノ要綱

(一) 第一條第一項第一號ノ「常時十人以上ノ職工ヲ使用スルモノ」ヲ十人以上ヲ十五人以上ト修正シテ、適用範圍ヲ縮小セリ。其ノ理由トスル所ハ夜業禁止ノ規定其ノ他重要ナル規定ヲ實際施行セラレルハ十五年ノ後ニシテ、此ノ如ク重大ナル規定ノ適用ヲ受クルモノハ紡績工場其ノ他ノ大工場ニ多キヲ以テ、大工場ハ法律ノ適用ヲ十五年猶豫セラレタルモノト同然ナレハ、職工年齢就業時間扶助等ニ付從來何等ノ規律ナク、法律施行ノ影響スルコト大ナルヘキ小工場ニ對シテモ相當ノ特典ヲ設ケサルヘカラス。故ニ十人乃至十五人未滿ノ職工ヲ用ウル小工場ハ法ノ適用外ニ立タシムルヲ可トスト謂フニアリ。

(二) 第七條第二項職工ヲ二組以上ニ分テ交替法ニ依リテ夜間就業セシムル場合ニハ、晝夜兩番ノ就業時ハ七日ヲ超エサル期間毎ニ轉換スヘキ規定ヲ十日ヲ超エサル期間ニ轉換スヘキコトニ改メタリ。之ニ依リ工業主ハ或時ハ四五日ヲ經テ轉換シ、又或時ハ十日目ニ轉換シ得ルヲ以テ、轉換日ノ撰擇便利トナリタルモ、同條第一項ニ於テ一ヶ月四回ノ休日ヲ與フヘキコトヲ規定セルヲ以テ、此ノ修正ハ必スシモ原案ノ精神ヲ失ハシメサルナリ。

(三) 第八條第二項ニ於テ就業時間ヲ二時間以内延長シ得ル期間ハ一月ニ付七日ヲ超ユルコトヲ得ストセリ。此ノ規定ハ一般ニ對シテハ何等不便ナキモ、氣候ノ關係等ニ依リテ一周年中或季節ハ全ク事業ヲ休止シ、他ノ季節ニ於テ成ル可ク長時間ノ作業ヲ爲シテ之ヲ補フコトヲ要スルモノアルヲ以テ、第三項トシテ季節ニ依リ繁忙ナル事業ニ付テハ一定ノ期間ニ付認可ヲ受ケテ、其ノ期間中一年ニ付百二十日ノ割合ヲ超エサル限就業時間ヲ一時間以内延長シ得ル規定ヲ設ケタリ。

(四) 以上ノ外第十八條ノ工場管理人ニ關スル規定ヲ提出案ト生産調査會ニ對スル諮問案トヲ合シタルモノニ改メタリ。

第二十七議會提出工場法及修正箇條 (小字及——ハ議會修正)

第一條 本法ハ左ノ各號ノ一ニ該當スル工場ニ之ヲ適用ス

一 常時十人以上<sup>五</sup>職工ヲ使用スルモノ

二 事業ノ性質危険ナルモノ又ハ衛生上有害ノ虞アルモノ

本法ノ適用ヲ必要トセサル工場ハ勅令ヲ以テ之ヲ除外スルコトヲ得

第二條 工業主ハ十二歳未満ノ者ヲシテ工場ニ於テ就業セシムルコトヲ得ス

但シ本法施行ノ際十歳以上ノ者ヲ引續キ就業セシムル場合ハ此ノ限ニ在ラス

行政官廳ハ輕易ナル業務ニ付就業ニ關スル條件ヲ附シテ十歳以上ノ者ノ就業ヲ許可スルコトヲ得

第三條 工業主ハ十五歳未満ノ者及女子ヲシテ一日ニ付十二時間ヲ超エテ就業セシムルコトヲ得ス

主務大臣ハ業務ノ種類ニ依リ本法施行後十五年間ヲ限り前項ノ就業時間ヲ二時間以内延長スルコトヲ得

就業時間ハ工場ヲ異ニスル場合ト雖前二項ノ規定ノ適用ニ付テハ之ヲ通算ス

第四條 工業主ハ十五歳未満ノ者及女子ヲシテ午後十時ヨリ午前四時ニ至ル間ニ於テ就業セシムルコトヲ得ス

第五條 左ノ各號ノ一ニ該當スル場合ニ於テハ前條ノ規定ヲ適用セス但シ

本法施行十五年後ハ十四歳未満ノ者及二十歳未満ノ女子ヲシテ午後十時

ヨリ午前四時ニ至ル間ニ於テ就業セシムルコトヲ得ス

一 一時ニ作業ヲ爲スコトヲ必要トスル特種ノ事由アル業務ニ就カシム  
ルトキ

二 夜間ノ作業ヲ必要トスル特種ノ事由アル業務ニ就カシムルトキ

三 晝夜連續作業ヲ必要トスル特種ノ事由アル業務ニ職工ヲ二組以上ニ

分チ交替ニ就業セシムルトキ

前項ニ掲ケタル業務ノ種類ハ主務大臣之ヲ指定ス

第六條 職工ヲ二組以上ニ分チ交替ニ就業セシムル場合ニ於テハ本法施行  
後十五年間第四條ノ規定ヲ適用セス

第七條 工業主ハ十五歳未満ノ者及女子ニ對シ毎月少クトモ二回ノ休日ヲ

設ケ職工ヲ二組ニ交チ交替ニ午後十時ヨリ午前四時ニ至ル間ニ於テ就業

セシムル場合及第五條第一項第二號ニ該當スル場合ニ於テハ少クトモ四

回ノ休日ヲ設ケ又一日ノ就業時間カ六時間ヲ超ユルトキハ少クトモ三十  
分、十時間ヲ超ユルトキハ少クトモ一時間ノ休憩時間ヲ就業時間中ニ於テ  
設クヘシ

職工ヲ二組以上ニ分チ交替ニ午後十時ヨリ午前四時ニ至ル間ニ於テ就業  
セシムルトキハ一<sup>十日</sup>週間ヲ超エサル期間毎ニ其ノ就業時ヲ轉換スヘシ

第八條 天災事變ノ爲又ハ事變ノ虞アル爲必要アル場合ニ於テハ主務大臣

ハ事業ノ種類及地域ヲ限リ第三條乃至第五條及前條ノ規定ノ適用ヲ停止  
スルコトヲ得

避クヘカラサル事由ニ因リ臨時必要アル場合ニ於テハ工業主ハ行政官廳  
ノ許可ヲ得テ期間ヲ限リ第三條ノ規定ニ拘ラス就業時間ヲ延長シ、第四條  
及第五條ノ規定ニ拘ラス職工ヲ就業セシメ又ハ前條ノ休日ヲ廢スルコト  
ヲ得

臨時必要アル場合ニ於テハ工業主ハ其ノ都度豫メ行政官廳ニ届出テ一月  
ニ付七日ヲ超エサル期間就業時間ヲ二時間以内延長スルコトヲ得

季節ニ依リ繁忙ナル事業ニ付テハ工業主ハ一定ノ期間ニ付豫メ行政官廳ノ認可ヲ受ケ其ノ期間中一年ニ付百二十日ノ割合ヲ超エサル限リ就業時間ヲ一時間以内延長スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ其ノ認可ヲ受ケタル期間内ハ前項ノ規定ヲ適用セス

第九條 工業主ハ十五歳未満ノ者及女子ヲシテ運轉中ノ機械若ハ動力傳導裝置ノ危険ナル部分ノ掃除注油検査若ハ修繕ヲ爲サシメ又ハ運轉中ノ機械若ハ動力傳導裝置ニ調帶調索ノ取附ケ若ハ取外シヲ爲サシメ其ノ他危険ナル業務ニ就カシムルコトヲ得ス

第十條 工業主ハ十五歳未満ノ者ヲシテ毒藥劇藥其ノ他有害料品又ハ爆發性、發火性若ハ引火性ノ料品ヲ取扱フ業務及著シク塵埃粉末ヲ飛散シ又ハ有害瓦斯ヲ發散スル場所ニ於ケル業務其ノ他危険又ハ衛生上有害ナル場所ニ於ケル業務ニ就カシムルコトヲ得ス

第十一條 前二條ニ掲ケタル業務ノ範圍ハ主務大臣之ヲ定ム

前條ノ規定ハ主務大臣ノ定ムル所ニ依リ十五歳以上ノ女子ニ付之ヲ適用

スルコトヲ得

第十二條 主務大臣ハ病者又ハ産婦ノ就業ニ付制限又ハ禁止ノ規定ヲ設ケルコトヲ得

第十三條 行政官廳ハ命令ノ定ムル所ニ依リ工場及附屬建物竝設備カ危害ヲ生シ又ハ衛生風紀其ノ他公益ヲ害スル虞アリト認ムルトキハ豫防又ハ除害ノ爲必要ナル事項ヲ工業主ニ命シ必要ト認ムルトキハ其ノ全部又ハ一部ノ使用ヲ停止スルコトヲ得

第十四條 當該官吏ハ工場又ハ其ノ附屬建物ニ臨檢スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ其ノ證票ヲ携帯スヘシ

第十五條 職工自己ノ重大ナル過失ニ依ラスシテ業務上負傷シ、疾病ニ罹リ又ハ死亡シタルトキハ工業主ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ本人又ハ其ノ遺族ヲ扶助スヘシ

第十六條 職工・徒弟職工・徒弟タラムトスルモノ若ハ工業主又ハ其ノ法定代理人若ハ工場管理人ハ職工・徒弟又ハ職工・徒弟タラムトスル者ノ戶籍ニ關シ戶籍吏ニ對シ無

償ニテ證明ヲ求ムルコトヲ得

第十七條 職工ノ雇入解雇周旋ノ取締及徒弟ニ關スル事項ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十八條 工業主ハ工場ニ付一切ノ權限ヲ有スル工場管理人ヲ選任スルコトヲ得本法施行區域内ニ現任セサルトキハ工場ニ付一切ノ權限ヲ有スル工場管理人ヲ選任スルコトヲ要ス

工業主本法施行區域内ニ居住セサルトキハ工場管理人ヲ選任スルコトヲ要ス  
工場管理人ノ選任ハ行政官廳ノ認可ヲ受クヘシ但シ法人ノ理事會社ノ業務ヲ執行スル社員會社ヲ代表スル社員、取締役、  
工業主ハ特別ノ事由アル場合ニ於テハ勅令ノ定ムル所ニ依リ行政官廳ノ業務擔當社員其ノ他法令ノ規定ニ依リ法人ヲ代表スル者及支配人ノ中ヨリ選任スル場合ハ此ノ限ニ在ラス  
認可ヲ受ケ前項ノ工場管理人ヲ選任スルコトヲ得

第十九條 前條ノ工場管理人ハ本法及本法ニ基キテ發スル命令ノ適用ニ付テハ工業主ニ代ルモノトス但シ第十五條ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

工業主營業ニ關シ成年者ト同一ノ能力ヲ有セサル未成年者若ハ禁治產者ナル場合又ハ法人ナル場合ニ於テ工場管理人ナキトキハ其ノ法定代理人又ハ理事業務ヲ執行スル社員會社ヲ代表スル社員、取締役、業務擔當社員其ノ他法令ノ規定ニ依リ法人ヲ代表スル者ニ付亦前項ニ同シ

第二十條 第二條乃至第五條、第七條、第九條又ハ第十條ノ規定ニ違反シタル者及第十三條ノ規定ニ依ル處分ニ從ハサル者ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス  
第二十一條 正當ノ理由ナクシテ當該官吏ノ臨檢ヲ拒ミ若ハ之ヲ妨ケ若ハ其ノ訊問ニ對シ答辯ヲ爲サス又ハ虛偽ノ陳述ヲ爲シタル者ハ三百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十二條 工業主又ハ第十九條ニ依リ工業主ニ代ル者其ノ代理人、戶主、家族、同居者、雇人、其ノ他ノ從業者ニシテ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ違反スル所爲ヲ爲シタルトキハ自己ノ指揮ニ出テサルノ故ヲ以テ其ノ處罰ヲ免ルルコトヲ得ス但シ工場ノ管理ニ付相當ノ注意ヲ爲シタルトキハ此ノ限ニ在ラス  
工業主ハ職工ノ年齢ヲ知ラサルノ故ヲ以テ本法ノ處罰ヲ免ルルコトヲ得ス

但シ工業主又ハ第十九條ニ依リ工業主ニ代ル者及取扱者ニ過失ナカリシ場合ハ此ノ限ニ在ラス

第二十三條 本法ニ依ル行政官廳ノ處分ニ不服アル者ハ訴願ヲ提起シ違法ニ權利ヲ傷害セラレタリトスルトキハ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第二十四條 主務大臣ハ第一條ニ該當セサル工場ニシテ原動力ヲ用フルモ

ノニ付テハ第九條第十一條第十三條第十四條第十六條及第十八條乃至第二十三條ノ規定ヲ適用スルコトヲ得

第二十五條 本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ハ工場管理人ニ關スル規定及罰則ヲ除クノ外官立又ハ公立ノ工場ニ之ヲ適用ス

官立工場ニ關シテハ所轄官廳ハ本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ依リ行政官廳ニ屬スル職務ヲ行フ

附 則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第四節 餘 論

工場法案ノ沿革ノ大略ハ前數節ニ陳フルカ如シ。今之ニ對スル二三ノ評論ヲ試ミ尙工場法案カ經過シタル各時代ノ狀態ニ付前節ニ悉ササル所ヲ補ハントス。

三期ヲ通覽スルニ、工場法案ノ規定ハ其ノ第一期ニ於テ最モ嚴密ノモノナリシト謂ヒ得可シ。即チ明治二十年六月ニ於テ一ト先ツ脱稿シタル職工條例案ハ(一)

雇傭ニ關シ特殊ノ規定ヲ設ケタルコト(二)未丁年職工及徒弟ニ關スル使用上若ハ收容上ノ制限ヲ付シタルコト、及(三)婦女及十四歳未滿ノ者ヲ夜間使用スルコトヲ禁止シタル外、十四歳未滿ノ者ハ六時間、十七歳未滿ノ者ハ十時間以上ノ使役ヲ禁スヘキ旨ヲ規定セルコト等是ナリ。尤モ工場ノ設備ニ關スル取締ノ條項ハ全然之ヲ缺クト雖、大體ニ於テ獨逸等ノ營業條例ノ規定ニ準據シ起案セラレタルモノノ如シ。

本案カ立テラレタル當時ニ於ケル民間經濟ノ狀況如何ト云フニ、政府ノ不換紙幣ハ漸ク銀貨ヲ以テ交換セラルルコトトナリ、一般ノ商況將ニ回復シ各種ノ事業漸次勃興シ、明治十八年ニハ諸會社ノ公稱資本僅ニ五千餘萬圓ナリシモ、二十三年ニハ二億二千餘萬圓ニ増加シタルノ時ニシテ將ニ之レ我國工業カ初メテ興起セントスル發端ノ時代ナリシカハ、工場及職工ニ關スル弊害ハ決シテ今日ノ如ク甚シカラサリシコトハ想像スルニ餘アリ。然ルニ政府カ進ンテ職工條例ヲ制定セシコトヲ企劃シタル動機如何ヲ察スルニ、當時ノ政府ハ夙ニ事業上ニ於ケル率先者ヲ以テ自ラ任シ、交通事業ハ勿論造船、紡績、製車、製紙、印刷、抄紙其ノ他ノ事業モ亦



自ラ工場ヲ起シテ作業シ、或ハ機械ヲ人民ニ貸付シ、新事業ノ模範ヲ示シテ啓發誘導スルコトヲ努メタルモノナルヲ以テ、大凡外國ニ於ケル諸般工業上ノ施設ハ勿論、文物制度ニ關スル調査モ亦相當行届キ居リタルモノト見ルヘク、工業ヲ我國ニ移スト共ニ工業ニ關スル制度モ必然之ヲ我國ニ實施スヘキモノナリト思惟シタルカ爲ナルヘシ。是レ寔ニ然リ、今日工場法ノ制定セラルル實ニ此ノ意ニ外ナラス、余輩ハ茲ニ至リテ工場法ノ淵源カ約三十年ノ遠キニ發スルヲ惟マサルヲ得ルナリ。

第一期ニ於ケル工場法案ハ工務局ノ運命ト相駢行シ、或ハ設置セラレ(明治十)或ハ廢止セラレ(明治十三)更ニ復設置セラレ(明治十)此ノ間絶ヘサルコト縷ノ如キモノアリシナリ。政府ハ歐米諸國ノ如ク工場法ノ制定ヲ爲サント欲スト雖我國民間工業ノ状態ハ到底歐米諸國ニ比スヘクモアラス而カモ工場法ノ制定ハ一時工業ノ發達ヲ阻止スルカ如キ觀アルヲ如何セン。是ニ於テ法案ヲ抱イテ之ヲ決行スルニ至ラス或ハ商業會議所ニ諮リ(明治十四)或ハ地方長官ニ問ヒ(明治十九)或ハ農商工高等會議ニ付議セリ。然レトモ或ハ意見ヲ發表セサルモノアリ、又之ヲ發表シタ

ルモノノ中ニハ相當理由アル反對意見アルヲ如何セン。然レトモ明治三十年工務局復活後ハ調査材料モ稍整頓シ、政府ハ相當ノ自信ヲ以テ法律ヲ制定セント決意スルニ至リタルモノ、如シ。

當時ノ經濟界ノ狀況如何ヲ見ルニ、日清戰役以後ニ於ケル巨額ナル償金ノ收受ト戰勝ノ名譽トハ著シク人心ヲ鼓舞シ、事業ノ勃興實ニ目覺シキモノアリ。即チ鐵道、海運其ノ他ノ交通ニ屬スルモノハ勿論、紡績製糖、機械、水力、電氣、石油、採炭、船渠、車輛製造、保險、銀行等ノ事業相競フテ勃興シ、明治二十八年ノ頃ニハ全國ノ會社數二千四百有餘ニ過キサリシモノ、三十年ニ至リテハ六千有餘ト爲リ、三十三年ニ入リテハ八千五百ノ多キヲ算スルニ至レリ。當時政府カ愈工場法ノ制定ヲ以テ念トスルニ至リタルモノ、詢ニ所以アリト謂フヘシ。

第二期ノ劈頭、農商工高等會議ニ諮詢セラレタル法案ハ、第一期ノ法案ニ比シ實際ノ事情ヲ參酌シテ着實ノモノト爲レリ。今之ヲ先般公布セラレタル工場法ニ比較スルニ、(一)同法案カ原則トシテ五十名以上ノ工場ニ適用スト規定セルノ點ハ工場法カ十五人以上ノ工場ニ適用ストアルニ比シテハ寛大ナリ。(二)同法案理由

書中ニハ先ツ工場設備充全ヲ缺クトキハ往々人命ヲ危ウシ比隣公衆ニ重大ノ傷害ヲ與フヘキコトヲ論シ、法案モ亦其ノ第二章ニ於テ工場建設ニ關スル取締ノ規定ヲ設ケタルハ、工場法ハ第一ニ公益ヲ保護スル爲必要ナルコトヲ標榜セントスルノ用意ナリシカ如シ。同章ノ規定ハ工場法第十三條ニ該當スルモノニシテ規定ノ精神及其ノ實施上ノ効果ニ於テ大差ナシト謂フヘシ。若シ夫レ(三)第三章職工ニ關スル規定ニ至リテハ、工場法ノ規定ニ比シテ較、嚴ナルモノアリ。即チ(イ)十四歳未満ノ者ニハ原則トシテ十時間以上ノ使役ヲ禁シタルコト(工場法ハ十二(ロ)工業主ハ義務教育ヲ終ラサル職工ニ自己ノ費用ヲ以テ相當ノ教育ヲ與フヘキコト(工場法ハ小學校令ノ規定ニ讓リ)ヲ規定シタルカ如キ是ナリ、然レトモ(ハ)徹夜業禁止ノ規定ナク、又(ニ)病者産婦ノ使用制限ナク、(ホ)危険又ハ衛生上有害ナル業務ニ婦女幼少者ノ使用制限ヲ設ケサルハ比較的寛大ナル點ト見ルヘシ、(ハ)然レトモ同法案カ雇傭契約ニ關スル事項及職工規則ニ關スル事項職工證並徒弟ニ關スル事項ヲ詳規シタルハ工場法カ命令ニ讓リタル事項ヲ法律中ニ規定シタルモノニシテ、用意親切ナリト謂フ可シ。當時實業家ノ多クハ此ノ法案ニ反對シ、農商工高等會議

ニ於テモ反對論相當多數ニシテ一時ハ同法カ果シテ通過スヘキヤ否ヤヲ懸念セシメタリト雖、大體ニ於テ立案者ノ精神ヲ變換セサル程度ニ於テ修正案ノ通過ヲ見ルニ至リタリ。此等ノ事情ハ當時政府ノ決意ニ對シテ、民間ノ輿論モ亦眞摯ニ本問題ヲ攻究スルニ至リタルコトヲ證明シテ餘アリ。而シテ同會議ノ少數意見トシテ職工及勞働者ノ有様ニ付テハ未タ十分ノ調査ヲ得ス云々トアルニ對シテ、政府モ亦慎重ニ本案ノ調査ヲ進ムルコトトナリ、明治三十三年ヨリ臨時工場調査費ヲ豫算ニ計上シテ、之ニ關スル專務官吏ヲ特設スルニ至リタルハ、洵ニ措置ノ宜シキヲ得タルモノナリト謂ヒ得可シ。

其ノ後現任行政裁判所評定官前内務省衛生局長窪田靜太郎氏カ商工局工務課長トシテ、當時ノ囑託法學博士桑田熊藏氏、學習院教授久保無二雄氏、故法學士廣部周助氏等ト共ニ、專心工場及職工ノ調査ニ盡瘁セラレタルハ、工場法案ノ沿革ヲ叙スルニ當リテ特筆スヘキ事蹟トス。氏ハ一方ニ於テハ列國工場法ノ制定沿革及現行規定ヲ調査シテ翻譯シ之ヲ印刷ニ付スルト共ニ、他方ニ於テハ各地ニ出張シテ表裏ヨリ工場及職工ニ關スル精細ノ調査ヲ進メ、時ニハ私費ヲ抛テ數々職工等

ト會食シテ其ノ談話ヲ聽取シ、悉ク之ヲ輯録シテ職工事情數篇ヲ編纂シタル等稱スヘキ事蹟少カラス。余輩ハ工場法ノ制定セラレタルノ今日ニ於テ、氏等カ献身の大調査ノ成果カ其ノ基礎ヲ爲シタルノ事實ヲ永ク紀念セン事ヲ欲スル者ナリ。臨時工場調査職員カ立案シタル明治三十五年案ハ、三十一年案ニ比シテ一層着實穩健ノモノナリシナリ。即チ歐米ニ行ハル、カ如キ比較的嚴密ナル規定ヲ急ニ實施スルノ不利ナルヲ觀取シ、深ク本邦工業ノ現狀ニ鑑ミ、總テ漸定主義ニ依リテ案ヲ立テタリ。例ヘハ(一)職工年齡ノ如キモ工場法施行後二箇年間ハ滿八歳以上ノ者ノ傭使ヲ許シ、次ノ三箇年間ハ九歳以上、次ノ五箇年間ハ十歳以上ヲ許シ、遂ニ原則ニ立戻リ十一歳以下ノ者ノ傭使ヲ全禁スルニ至ラシメントシタルカ如キ、其ノ他(二)徹夜業ニ關スル年齡ノ制限(三)就業時間ノ制限ノ如キ、皆此ノ主義ニ出テサルハナシ。然レトモ本案規定ノ内容ハ今回公布セラレタル工場法ノ規定ニ比シテ較寬大ナルモノ少カラス即チ(一)二組交替ノ制ヲ採ル場合ニハ十三歳以上ノ者ニ限り徹夜業ヲ爲サシムルコトヲ認ムルコト(施行後五年間ハ十歳以上ヲモ認ム)(二)婦女幼少者ノ就業時間ハ十二時間ヲ原則トセルモ一定事業ニ限り一定期間内ハ十五時間迄

ヲ認メタルコト、(三)産婦及病者ノ使用制限ニ關スル規定ヲ缺クコト等是レナリ。斯ノ如ク成ル可ク先例又ハ理論ニ趨ルコトヲ避ケ、專ラ實際ヲ主トシテ立案セラレタルヲ以テ、本案カ諮問ニ付セラルルヤ、民間ノ工業主ハ政府カ如何ニ法律ノ施行ヲ圓滑ナラシムル爲周到ナル用意ヲ拂ヒツツアルヤヲ諒トシ、少數ノ者ヲ除クノ外皆著實ナル意見ヲ答申セリ。

翻テ當時及其以前ニ於ケル經濟ノ狀況如何ヲ見ルニ、日清ノ戰勝ニ伴フ事業ノ勃興ハ幾許モナクシテ忽チ反動ノ激浪ヲ迎ヘ、一時旭日冲天ノ勢ナリシ新設會社中基礎薄弱ナルモノハ悉ク糊塗彌縫ノ病的狀態ヲ呈シ、症狀甚シキモノハ遂ニ解散ノ止ムヲ得サルニ至ルモノ多ク、企業心冷却シテ經濟界ハ萎靡沈滞ヲ極メ、政府及日本銀行ノ特別ノ施設ニ依リテ、辛ウシテ一般ノ恐慌ヲ避ケ得タル狀況ニシテ、本案ノ諮問セラレタル明治三十五年ノ交ハ此ノ病的狀態ヲ脱シ、漸ク恢復ノ緒ニ就キタル頃ナリシナリ。經濟界ノ狀況斯ノ如ク薄弱ナリシヲ以テ、法案既ニ成レリト雖、未タ之ヲ議會ニ提出スル迄ノ決心ヲ見ルニ至ラス。時ナル哉日露ノ風雲ハ日ヲ逐フテ益々急ヲ告ケ、遂ニ國運ヲ賭シタル大戦役ノ開始セララルルアリ、經濟

界ハ警戒ヲ極メ、新事業ハ總テ中止セラル、コト、ナレリ。幸ニシテ此ノ戰役ハ二年ナラスシテ光榮アル戰勝ノ榮譽ヲ以テ終局ヲ告ケ、三十九年ニ入りテハ日清戰役ノ例ニ違ハス、一大奔騰ノ時代ト爲リ、四十年ニ入りテハ反動ノ時代ト變シ、經濟界ノ波瀾ハ一起一伏沈靜スル所ヲ見ス。政府ハ斯ノ如キ狀勢ノ間ニ處シテ工場法案ヲ議會ニ提出スルハ時機ヲ得タルモノニ非ストシ、靜カニ形勢ヲ觀望シツ、アリシカ、議會ノ議員中本法ノ制定ニ意アル者ハ數次政府ノ所信如何ヲ質問シタリ。又社會政策學會ハ四十年十二月ヲ以テ東京ニ第一回大會ヲ開キ經濟ニ關係アル十數人ノ學者ヲ網羅シ、工場法ヲ議題トシテ連日勞働者保護ニ付討議又ハ講演ヲ爲シ、大ニ世上ノ耳目ヲ聳動シタル等、沈滯ノ間自ラ一道ノ生氣動クモノアルヲ覺エタリ。

明治四十一年七月、桂内閣西園寺内閣ノ後ヲ襲ヒテ政柄ヲ承ク、大浦子爵農商務省ヲ攝掌ス、子爵ハ夙ニ勞働問題ノ忽ニスヘカラサルヲ確信セラルル人ナリ。内相平田子爵亦社會政策ニ思ヲ潛メラル、人ナリ。世人カ工場法ノ制定ハ將ニ此ノ時ニ成ルヘシト期待シタルモノ蓋シ所以ナキニ非サルナリ。果然大浦農相ハ

就職後直ニ工場法案ヲ決定公表スヘキ旨ヲ命セラレ、翌年七月商工局ヲ割キテ工務局ヲ置キ、專任局長ノ下ニ本案ノ解決ヲ企劃セラルルコトナレリ。

明治四十二年十月公表諮問セラレタル工場法案ハ大體三十五年案ニ準據シタルモノナレトモ、其ノ規定ノ内容ハ之ニ比シテ較、嚴ヲ加ヘタリ。即チ(一)適用範圍ニ於テ使用職工ノ員數ヲ制限セス、原動力裝置又ハ「危險不衛生」ヲ以テ法律適用ノ標準トナシタルコト、(二)十二歳未滿者ノ傭使ヲ禁シタルコト、(三)傭使ヲ得タル場合(傭使ヲ認ムルモ) (三)病者產婦ノ使用制限ヲ規定シタルコト、(四)職工ノ雇入周旋ノ外解雇ニ關スルコト竝徒弟ニ關スル一切ノ事項ヲ命令ニ委任シタルコト等是レナリ。次テ第二十六議會ニ提出セラレタル案ハ、百尺竿頭更ニ一步ヲ進メテ、十年後ニ於ケル婦女幼少者ノ徹夜業禁止ヲ規定スルニ至レリ。本來婦女及幼少者ノ夜業禁止ノコトタル既ニ明治二十年ノ法案ニ現ハレタル事項ナリト雖、本邦ニ於ケル工業中最モ長足ノ進歩ヲ遂ケ、又巨額ノ資本ヲ投下セル紡績業ハ晝夜連續ノ作業ヲ爲スノ習慣ヲ馴致セルヲ以テ、之ニ對シテ夜業ヲ廢止セシムルハ其ノ產額ヲ約半減セシムル結果ヲ生シ、會社ノ經濟ハ勿論社會經濟ニモ亦多大ノ影響ヲ及ホス可キ

事ヲ顧慮シ、爾後立案セラレタル工場法案ニハ本問題ノ解決ヲ他日ニ譲ルノ趣旨ヲ以テ何等規定ヲ設ケサリシナリ。然カモ此ノ間ニ於テ歐洲各國ニ在リテハ職工保護萬國會議ヲ開キテ千九百六年ヲ以テ、ベルン條約ヲ締結シ、批准期間ノ終期タル千九百八年十二月末日迄ノ間ニ於テ獨逸國外八箇國ノ批准交換ヲ了スルアリ次テ以太利外二箇國ノ之ニ加入スルアリ夜業禁止ハ漸ク先進諸國ニ於ケル國際常規タラントス。加之本邦ニ於ケル徹夜業ノ成績ハ技術上ハ勿論、職工ノ健康上ニモ亦省慮スヘキモノ頗ル多キヲ以テ、農商務大臣ハ斷然中央衛生會ノ議ヲ容レ、禁止ノ施行期限ヲ十年後ト爲シ、之ヲ第二十六議會ニ提出スルニ至リタルモトス。夜業禁止ノ規定ヲ設ケタルハ、工場法案トシテハ實ニ龍眼點睛ノ感ヲ生セシムルニ足ル然レトモ此ノ點睛コソ實ニ第二十六議會ニ於ケル本案撤回ノ重ナル原因ト爲リシモノナルコトハ前ニ陳ヘタル如シ。然レドモ政府ハ飽迄徹夜業禁止ヲ遂行スル目的ヲ以テ第三期ニ入ルニ及ンテハ一部禁止ヨリ全禁ニ入ルノ順序方法ヲ立ツルコトニ腐心セリ。而カモ其ノ順序方法ハ遂ニ大日本紡績聯合會生産調査會等ニ於テ否決スル所ト爲リタリト雖、徹夜業禁止其ノモノハ是認セ

ラルルコトトナリ、結局十五年後ニ於テ一時ニ之カ實行ヲ約スルコトト爲レリ。要スルニ第二十六議會以來工場法ニ對スル世上ノ論議ハ法案ノ可否如何ヲ去リテ徹夜業禁止問題ニ移リタルカ如キ觀アルハ適々以テ時勢ノ進運カ本法ノ制定ヲ甘受スルニ至リタルコトヲ示セリ、又徹夜業ノ禁止ヲ敢行セントシタルコトハ直接間接ニ本案ニ於ケル其ノ他ノ規定ノ制定上良好ナル成果ヲ生シタルモノアリト謂フヲ得ンカ。然レトモ商業會議所ニ又生産調査會ニ又帝國議會ニ於テ法案ノ修正ヲ議シタルノ士ハ、概ネ當業者ノ聲ニ耳ヲ傾ケ、規定ヲ寛大ニスル方面ノ議論多クシテ法案其ノモノカ寛大ニ過クルコトヲ論難シタル者ハ一部ノ學者ヲ措テ他ニ殆ント之レナカリシナリ

終リニ莅ミ本邦ニ於ケル工場法制定ニ關スル沿革ヲ泰西諸國ノ其ニ比スルトキハ余輩ハ茲ニ幾多特色ノ存スルモノアルヲ認ム即チ左ノ如シ。

(一) 本邦ニ於ケル工場法制定ノ必要ハ主トシテ政府及學者ニ依リテ提唱セラレタルモノニシテ、此ノ間何等勞働者又ハ其ノ團體ノ交渉スルモノアルナク、又本問題ハ嘗テ政治上ノ黨派問題トシテ取扱ハレタルコトナク、純正ナル勞働保護ノ

意義ニ於テ一貫シタルコト。

(二) 工場法ノ制定問題ハ本邦ノ工業未タ著シク發達セサル明治十五年ノ昔ヨリ工業ノ發達ニ附隨スヘキ必然ノ制度トシテ、工業主ノ眼前ニ懸ケラレタルモノナルヲ以テ、偶、英佛流ノ自由放任主義ニ倚據スルノ人士ハ工場法ノ制定ヲ尙早ナリト論唱セリト雖、其ノ干涉ヲ以テ絶對的ニ不可ナリト論定シタル者少カリシコト。

(三) 工場法ニ絶對反對ノ意見ヲ有スル人士少キト同様ノ程度ニ於テ之カ必要ヲ絶對且積極的ニ論唱スル實業家及政治家モ亦尠カリシコト。

(四) 工場労働カ婦女幼少者ノ健康ニ及ホス影響ニ付テハ嘗テ歐洲諸國ニ於テアリタルカ如ク、著シク世人ノ注意警戒ヲ惹起セサリシコト。

我工場法ハ斯ノ如キ空氣ノ中ニ、約三十箇年間ノ長日月ニ亘リテ其ノ出生ヲ用意シ、茲ニ明治四十四年三月ヲ以テ目出度呱呱ノ聲ヲ舉クルニ至リタルモノナリ。斯ノ如クニシテ工場法ハ生レタリ、然レトモ未タ歩行スルニ至ラサルナリ、既ニ二箇年有餘ニ亘リテ歩行セサルハ聊カ心細キ感アルヲ免カレサルモ其ノ早晚歩行

スヘキヤ疑ナシ。吾人ハ工場労働者保護ノ爲初メテ我國ニ制定セラレタル此ノ法律ノ完全ナル發育ヲ遂ケ、帝國工業ノ發達ヲ永遠ニ確保スルノ大目的ヲ達成スルニ至ランコトヲ囑望スルモノナリ。

## 第二章 工場法制定以前ニ於ケル工場取締

### 第一節 緒言

工場法制定ノ問題ハ明治十五年ノ昔ヨリ其ノ端ヲ發シ、爾來幾多ノ變遷ト波瀾トヲ經テ漸ク明治四十四年ヲ以テ其ノ結末ヲ見ルニ至リタルモノナリ。而シテ從來工場ノ取締ニ關スル法令トシテ明治四十一年内務省令第十六號警察犯處罰令アリ、又工場ニ於ケル負傷者届出其ノ他取締方ニ關スル明治三十二年内務省訓令第十九號アリ、以テ一般警察ノ目的ノ爲ニ其ノ一部ハ既ニ實施セラレ、又道府縣ニハ其々地方警察令アリ、以テ部分的ニ之カ取締ヲ實行シタリ。此等ノ事柄ハ本邦工場法論ヲ叙スルニ際シテハ逸スヘカラサル事實ナルヲ以テ、本章ニ於テ其ノ大綱ヲ記述スルコトトセリ。

道府縣令ヲ以テ工場及職工ニ關スル取締規定ヲ設クル法律上ノ根據ハ一般ノ警察命令ト異ル所ナシ、即チ(一)憲法第九條(二)明治八年三月達行政警察規則(三)明治二十三年法律第八十四號命令ノ條項違犯ニ關スル罰則(四)明治三十三年法律第八

十四號行政執行法ノ一部(五)明治三十三年法律第三十六號治安警察法ノ一部是ナリ。憲法ハ勿論此等法規ノ多クハ固ヨリ特ニ工場及職工ニ關シテ地方長官ニ取締ノ權能ヲ附與シタルモノニ非スト雖、一般ニ安寧秩序ヲ維持シ、公共ノ危害ヲ防制シ、善良ナル風紀ヲ維持スルカ爲必要ナル命令ヲ發シ、又ハ處分ヲ爲サシムヘキコトヲ認メタルモノナルヲ以テ、地方長官ハ隨時ノ須要ニ應シ工場及職工ニ關スル取締規程ヲ發布シ專ラ警察官吏ヲシテ之ヲ執行セシメタルモノトス。

警察犯處罰令ハ唯一般警察ノ目的ノ爲ニ規定セラレタルノミニシテ偶々以テ其ノ一、二ノ項目カ工場工業及職工ニ對シテ適用アルノミ、反之、特ニ此ノ工場及職工ニ關スル取締ヲ目的トシテ規定セラレタル前記道府縣警察命令ノ精神ハ大體ニ於テ左ノ二種ニ大別スルコトヲ得。

(甲)工場法第十三條ノ所謂行政官廳ハ命令ノ定ムル所ニ依リ工場及附屬建物并設備カ危害ヲ生シ、又ハ衛生風紀其ノ他公益ヲ害スル虞アリト認ムルトキハ豫防又ハ除害ノ爲必要ナル事項ヲ工業主ニ命シ、必要ト認ムルトキハ其ノ全部又ハ一部ノ使用ヲ停止スルヲ得トノ規定ニ該當スルモノ。

(乙)同第十七條ノ「職工ノ雇入解雇周旋ノ取締及徒弟ニ關スル事項ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム」トノ規定ニ略該當スルモノ。

然リ而シテ(甲)ニ該當スルモノハ又地方令發布ノ態様ニ於テ自ラ二種ニ區別セラルルヲ見ル即チ

(一)工場其ノモノノ建設ニ關スル規程

(二)汽機汽罐ノ取締ニ關スル規程

蓋シ工場ニ關スル事項中最モ警察上ノ注意ヲ要スルハ汽機汽罐ナルヲ以テ工場其ノモノノ建設ニ關スル取締ヲ行ハサル地方ニ於テモ汽機汽罐ニ對シテハ先ツ取締ヲ行フヲ常トス。而シテ汽機汽罐ハ工場以外ノ建設物ニモ之ヲ据エ付クルコトアルヲ以テ此ノ兩者ハ自ラ分立シテ制定セラレタルモノ多シ。依テ以下節ヲ分テ(一)及(二)ヲ論シ次ニ(乙)ニ該當スル職工ノ雇入傭使ニ關スル事項ニ及ハントス。

## 第二節 工場ノ建設

工場取締ニ關スル規定ヲ設クルノ必要ハ自ラ工場數ノ増加ニ促サルルモノナルコトハ故ラニ論スルヲ要セサル所ナリ。然リ而シテ其ノ之ヲ取締ルノ必要ハ

(一)工場ノ外部ニ及ホス危害其ノ他ノ公益事項ニ起因スルコトアリ。

(二)工場内部ニ於ケル危害其ノ他ノ衛生事項ニ促サルルコトアリ。

(三)此ノ兩者相俟テ工場ノ物的取締ノ基礎ヲ爲スコトアリ。

斯ノ如ク必シモ其ノ事情ヲ一ニセスト雖(一)ノ原因カ其ノ主動カト爲ル場合多キコトハ各地方ニ於ケル規定ノ内容ニ於テ歴々之ヲ徵スルニ難カラサル所ナリ。

我國ニ於テ最先ニ工場建設ニ關スル取締規則ヲ發布シタルハ大阪府ニシテ明治十年五月ノ昔ニ於テ既ニ製造場取締ニ關スル規則ヲ設ケタリ。而シテ同二十九年二月之ヲ改正シ爾來幾多ノ改正増補ヲ經タル現行ノ製造場取締規則ハ實ニ同三十九年七月ニ完成セラレタルモノナリ。大阪府ニ次クハ東京府(警視廳以下之)ニシテ明治十四年八月警視廳布達甲第三十五號ヲ以テ製造所管理ニ關スル布達ヲ發布セリ。現行ノ製造所其ノ他ニ關スル取締ノ件ハ同三十九年七月改正セラレタルモノナリ。又京都府ニ於ケル現行製造場取締規則ハ明治三十一年九月ノ改



正ニ係ルモノナリ。其ノ他ノ府縣中一般的ニ工場取締規則ヲ設ケタルハ神奈川、兵庫、埼玉、群馬、山梨、青森、廣島、和歌山、徳島、高知、鹿児島ノ十一縣ニシテ、爾餘ノ諸縣ハ總テ特種ノ工場ニ對シテ特種ノ取締規則ヲ發布セリ。即チ火工場取締規則、黃燐摺付木製造取締規則、化製場取締規則、危險物製造取締規則等是ナリ。汽機、汽罐ニ關スル取締規則ヲ發布セル外、特ニ工場ニ對シ一般的ニモ又ハ特別的ニモ何等取締規則ヲ發布セサルハ滋賀、富山、愛媛、大分、熊本及沖繩ノ六縣ニ過キサルナリ。

單行特別規則ノ中最先ニ發布セラレタルハ、山形縣ニシテ明治十六年十二月火工場取締規則ヲ發布セリ。福岡縣ニ於テハ明治十九年十二月摺付木製造取締規則ヲ設ケタリ。之ニ次クモノハ明治二十年警視廳令ヲ以テ發布セラレタル煙火取締規則トス。而シテ明治二十三年ノ交ニ入りテ最モ多ク設ケラレタル取締規則ハ黃燐摺付木製造取締ニ關スルモノナリ。

工場建設ノ取締ニ關スル規定ヲ一覽スルニ、一般的工場取締規則ヲ設ケタル府縣中稍完全ナルモノハ、現實ノ必要ニ動カサレテ幾多ノ改正増補ヲ經タル大阪府ノ製造場取締規則ニシテ、之ニ次クモノハ京都府ノ製造場取締規則ナリ、東京府ハ

前二者ニ比スレハ完備セリト謂フヘカラス、其ノ他ノ地方ハ大體其等ノ取締規則ニ準據シテ規定セラレタルモノナリ、然レトモ其ノ程度範圍ニ於テ自ラ多少相異ルモノアリ、今左ニ一般竝特別取締規則ノ内容ニ付其ノ概要ヲ一言スヘシ。

(一) 取締規則ノ適用ヲ受クヘキ工場ノ範圍、

之ニ關シテハ列舉主義ヲ採ルモノト、原則主義ヲ採ルモノトノ兩者アリ、東京、京都、愛知、兵庫等ハ前者ニ屬シ、大阪府ハ後者ニ屬ス。

(二) 建設許可ノ申請

規定セラレタル工場ヲ建設セントスル者ハ左記ノ書類及圖面ヲ添附シテ當該地方應ニ許可ノ申請ヲナスコトヲ要ス。

- (一) 摘要書、本書ニハ事業ノ種類、敷地坪數、各建物ノ名稱及坪數、煙突ノ高及徑、原動力機ノ種類及馬力、原料、製品製造又ハ作業ノ方法、有害物ノ排除方法、防火及避難設備、燃料ノ種類及數量、就業者數、作業時間、竣工期日ヲ明記ス
- (二) 建物ノ圖面、該圖面ニハ三十間以内ノ地形見取圖及敷地建物ノ配置圖、建造物ノ平面圖、斷面圖、正面圖、背面圖、側面圖等ヲ含ム

(三) 他人所有ノ土地建造物ニ係ルトキハ其ノ承諾書(又ハ連署ヲ要ス)尙第一號及第二號ニ變更ヲ加ヘタルトキハ其ノ都度届出ルコトヲ要ストセリ。監督官廳ニ於テハ前記ノ願書ニ接スルヤ、(一)其ノ建造物ハ周圍ニ在ル他人ノ住家等ニ對シ相當ノ距離ヲ有シ公害ナキヤ否ヤ、(二)其ノ建設地ハ特種工場ノ設置ヲ禁止シタル地方ニ非サルヤ否ヤ、(三)危害豫防装置ヲ有スルヤ否ヤ、(四)煙突ノ高さ及汽罐ノ地位ハ規定ニ違反セサルヤ否ヤ等ヲ調査ノ上建設ノ許可ヲ與フルモノトセリ。

(三) 検査ノ届出

建設ノ許可ヲ得タル後ト雖左記ノ各號ノ一ニ該當スルトキハ其ノ都度届出検査ヲ受クルコトヲ要ス。

(一) 基礎抗打ヲ爲シ又ハ「コンクリート」ヲ組成シタルトキ

(二) 避雷針ヲ取付ケタルトキ

(三) 一部又ハ全部ノ工事落成シタルトキ

工事ノ全部落成ヲ告ケタル場合ニ於テモ検査證ヲ受クルニ非サレハ就業スル

コトヲ得ストシ

(四) 左ノ場合ニ於テハ五日以内ニ當該官廳ニ届出ヘシトシ

(一) 事業ノ廢止、休止

(二) 事業者ノ住所、氏名又ハ名稱ノ變更

(三) 事業者ノ死亡又ハ解散

(四) 他人ノ所有建造物ナルトキハ其ノ所有主ノ變更

(五) 罰則規定

事業者ハ家族、同居人又ハ雇人ノ所爲ト雖其ノ事業上ノ事件ニ關スルトキハ其ノ責ニ任スヘキコトヲ規定セリ。

次ニ參考ノ爲現今ノ一般の規定ノ事例トモ見ルヘキ大阪、京都、東京三府ノ製造場取締規則並ニ三單行特別規則ノ大綱ヲ掲クヘシ。

第一項 一般規程ノ事例

東京府ニ於テ發布シタル「製造所其ノ他ニ關スル取締ノ件」ハ十七箇條ヨリ成ル、其ノ取締ヲ爲ス製造場ノ種類左ノ如シ。

## (一) 設置ニ付警視廳ノ許可ヲ要スルモノ

一 瓦斯製造場及貯藏場、一 コークス製造所、一 石炭タール木タール石油蒸餾産物又ハ其ノ残渣ヲ原料トスル製造所及貯藏場、一 魚油精製所及貯藏場、一 肥料製造所、一 マツチ製造所、一 アルコール、エーテル其ノ他引火シ易キ化合物ノ製造所及貯藏場、一 金屬精煉所及鍍金場、一 硝子製造所、一 煉瓦陶磁器坩堝製造所及珐瑯燒付場、一 セメント、石灰製造所及生石灰貯藏場、一 洋紙、板紙壁紙及擬革紙製造所、一 石鹼製造所、一 鉛又ハ鉛化合物ヲ原料トスル製造所、一 荏油亞麻仁油類ノ植物性油ヲ原料トスル護謨引防水布等ノ製造所、一 染料製造所及染色場日本藍染場ヲ除ク、一 護謨製造所、一 セルロイド(人造ゴム)製造所及火綿ヲ原料トスル製造所、一 被覆電線製造所、一 綿類漂白所、一 砂糖精製所、一 黒鉛及鉛筆製造所、一 硫酸類、醋酸、硝石、硫黃、硫酸鐵、硫酸銅、昇汞、鹽素酸加留謨格魯兒加爾基、沃度、碳酸曹達、食鹽其ノ他有臭有害ノ瓦斯及排液ヲ生スル製造所、一 礦石類、硝子、煉瓦、陶器屑等ノ粉碎場及粉塵又ハ騒響、震動甚シキ製造所、一 以上列記以外ノ製造所ニシテ多量ノ石炭ヲ使用スル諸製造所、

## (二) 設置ニ付所轄警察官署ノ許可ヲ要スルモノ

一 テレピン油製造所貯藏場及テレピン油又ハ樹脂ヲ原料トスル物品製造所、一 明骨製造所及鱈鮫乾燥場、一 古罐、油糸、襪襪洗場及火氣ヲ使用スル古罐潰場、一 マツチ軸木製造所、一 燒酎製造所、一 白墨製造所、一 日本紙製造所、一 印刷墨汁及靴墨製造所、一 砂糖蜜製造所、一 魚鳥獸肉罐詰製造所、一 蠟及封蠟製造所、一 漬糠飴糟及豆糟干場、一 石炭置場、一 澱粉製造所、一 煉炭製造所、一 青昆布製造場、一 蛹油製造所、一 革染場、一 電氣用製炭場、一 土器、瓦及炭燒場、一 煙草莖灰製造所、一 魚鳥獸骨毛皮貯藏場、

此等ノ工場ハ其ノ設置ニ付總テ官廳ノ許可ヲ必要トスルモノナルカ、許可ヲ受ケタル後ト雖建物器械カ破損朽腐シ、又ハ震動騒響其ノ他發生物ノ爲危險若ハ妨害ノ虞アリト認ムルトキハ除害ノ裝置ヲ命シ、又ハ其ノ建設物ノ使用ヲ停止シ、若ハ廢止スヘキコトヲ規定シ、又一定ノ事由アルトキハ許可ヲ取消シ、又ハ建設物ノ廢止ヲ命スヘキコトヲ定メタリ。其ノ他東京府ニ於テハ工場中汽機汽罐ヲ設置スルモノハ別ニ定ムル所ノ汽罐汽機取締規則ニ依リ特殊ノ取締ヲ受クヘキモノ

トナリ居レリ。

京都府ノ製造場取締規則ヲ見ルニ、其ノ第一條ニ於テ、本則ハ蒸汽力、電動力、水力、石油發動機關、火爐、吹子竈類ヲ使用シ又ハ惡臭劇響ヲ發シ其ノ他危害ヲ生シ健康ヲ害スル製造場ニ適用スト規定シ、警視廳令ノ如ク製造場ノ種類ヲ舉示セス。其ノ範圍頗ル廣濶ナルヲ以テ同規則施行手續第一條ニ於テ製造場ノ種類ニ付其ノ主要ナルモノヲ列舉セリ。即チ左ノ如シ。

蒸汽力、電動力、水力、石油發動機、蒸汽使用ノ工場並紡織、製綿、製絲、製油、襪、襪化、製洗滌、製紙、燐寸、煙火、銅吹、鑄物、製罐、鍛冶、線條、硝子、陶器、煉化石、瓦、亞鉛、鍍金、瓦斯、石鹼、揉革、石灰、コークス、セメント、煉炭、精米、精粉、染物、革、染、坩堝、蠟、護謨類、有害藥品、危險物、使用及之ニ類スル各種ノ製造場

此等ノ製造場ヲ新設シ又ハ増設變更セントスル者ハ所轄警察官署ノ許可ヲ受クヘキモノトシ、又製造場設置區域ヲ限定スル爲、左記ノ場所ニ在リテハ煤煙、粉塵、劇響又ハ有害惡臭ノ氣體ヲ發散スル製造場ノ設置ヲ許可セサル旨ヲ明ニセリ。

一 皇宮離宮及御用邸御料地ヲ離ル三百間以内ノ土地

一 御陵ヲ離ル百八十間以内ノ土地

一 御墓ヲ離ル六十間以内ノ土地

一 京都市内土地

一 建造物、河川、道路等ニ對シ害アリト認ムル土地

其ノ他同規則ハ工場ノ構造ニ關シ、紡織、製綿、製油、燐寸等火災ノ虞アル製造場ニ在リテハ相當ノ防火法ヲ設ケ且發火ノ虞レ多キ作業場ト其ノ他ノ場所トニ於ケル境界ニ防火壁ヲ設クヘシト定メ、製造場ノ建造物及汽罐、汽機又ハ火爐、竈、吹子等ノ損傷若ハ其ノ他ノ事由ニ依リ害ヲ醸スヘキ虞アルモノニ付テハ特ニ修理又ハ改造ヲ命シ且其ノ命令ノ履行ヲ了ル迄作業ヲ停止スルコトアルヘシト規定セリ。大阪府ニ於ケル製造場取締規則ノ適用範圍ハ左ノ如シ。

(一) 原動機ヲ使用スル製造場

(二) 火氣ヲ使用スル製造場

(三) 有害瓦斯又ハ惡臭、音響ヲ發スル製造場

(四) 就業者五十人以上ヲ有スル製造場

(五)前各號ノ外危害ヲ生シ又ハ健康ヲ害シ若ハ其ノ虞アル製造場  
 此等ノ製造場ハ何レモ許可ヲ得ルニ非レハ設置スルヲ得ストセルモ、作業ノ種  
 類ニ依リ設置許可ノ權能ヲ府ニ屬セシメタルアリ、又所轄警察署ニ屬セシメタル  
 アリ此ノ點ハ東京府ノ事例ト類似セリ。又製造場設置ノ範圍ニ付テハ製造場ハ  
 其ノ建造物ヨリ周圍他人ノ住家等ニ對シ相應ノ距離ヲ有シ危害ナシト認ムルモ  
 ノニ限ルコトヲ原則トセリ。尤モ許可後ト雖危害ヲ生シ若ハ其ノ虞アリト認ム  
 ル事實ヲ生シタルトキハ許可ヲ取消スヘキ旨ヲ定ム。又工場ノ設置區域ヲ制限  
 シテ特定ノ地方(之略)ニ在リテハ煤煙又ハ粉塵ヲ飛散シ又ハ有害瓦斯ヲ發散スル製  
 造場ノ設置ヲ許ササル事ヲ定メタリ。其ノ他危害豫防ニ付危害ヲ生シ健康ヲ害  
 スル虞アル製造場ニ在リテハ適當ナル危害豫防ノ構造設備ヲ命スヘシ又製造場  
 ノ建造物及汽罐汽機又ハ火爐竈火床等ノ損傷若ハ其ノ他ノ事由ニ依リ危害ヲ醸  
 スヘキ虞アルモノニ付テハ當該官廳ニ於テ特ニ修理ヲ命シ且其ノ命令ノ履行ヲ  
 終ル迄作業ヲ停止スルコトアルヘシト規定セリ。

以上東京、京都及大阪ノ製造所取締ニ關スル規則中京都及大阪ノ二府ハ製造所

取締規則中ニ汽罐汽機取締ニ關スル條項ヲ規定セリ。

第二項 特別規程ノ事例

山形縣

- (一) 左ノ營業者ハ此ノ規則ヲ遵守スヘシ  
 鍛冶職、硝子師、鑄物師、陶器師、白絞油製造職
  - (二) 人家稠密ノ場所ニ於テ營業ヲ爲ス者ハ所轄警察署又ハ分署ニ届出ツヘシ
  - (三) 火焚所及天井裏煙筒ハ石又ハ煉瓦漆喰壁土等ノ不燃質物ヲ以テ築造スヘシ
  - (四) 火焚所及煙筒ハ時々掃除ヲ爲スヘシ
- 右ハ極メテ簡明ナル者ノ事例ナルカ左ニ稍詳細ノ規定ヲ設クル者ヲ示スヘシ。  
 北海道廳

(一) 本則ニ於テ火工場ト稱スルハ左ニ記載スルモノヲ謂フ

- 一 鍛冶工場、一 鑄物工場、一 金吹工場、一 銅吹工場、一 硝子製造場、一 板金製造場、一 針金製造場、

(二) 火工場ヲ設置セントスル者ハ其ノ位置及構造方法ヲ記シ所轄警察署ニ願出

許可ヲ受クヘシ、其ノ改造變更ヲ要スルトキ亦同シ

(三) 火工場ノ構造ハ左ノ制限ニ從フヘシ、但シ人家遠隔ノ場所ニ在リテハ此ノ制限ニ依ラサルモ許可スルコトアルヘシ

(一) 火焚場ノ周圍及ヒ天井裏トニハ石煉瓦漆喰又ハ鐵板等ノ不燃質物ヲ用ツヘシ

(二) 烟筒ハ石煉瓦又ハ鐵管等ノ不燃質物ヲ以テ建設シ屋根ヲ六尺以上突出セシムヘシ、

但シ所轄警察官署ハ特ニ其ノ高サヲ指定スルコトアルヘシ

(三) 鐵管ニシテ壁又ハ屋上ヲ貫出スル烟筒ハ燃質物ト五寸以上離隔セシムルカ、又ハ石若ハ漆喰等ノ不燃質物ヲ以テ其ノ部分ヲ箝塞スヘシ

(四) 屋根ニ烟筒ヲ貫出セシムル場合ニハ烟筒ノ周圍十尺以上ハ瓦鐵板其ノ他不燃質物ヲ以テ覆葺スヘシ

(五) 烟筒ヲ距ルコト十尺以内ニ燃質物ノ建物アルトキハ、其ノ模様ニ依リ所轄警察署ハ燃質物ノ部分ヲ不燃質物ヲ以テ覆ハシムルコトアルヘシ

(四) 火工場ハ新築改造トモ落成ノ上所轄警察署ニ届出検査ヲ受クヘシ、其ノ検査ヲ受クルニ非レハ使用スルコトヲ得ス

(五) 検査ヲ經タルモノト雖破損其ノ他ノ事情ニ依リ危險ト認ムルトキハ、警察官署ニ於テ修繕改造若ハ使用ノ停止ヲ命スルコトアルヘシ

(六) 火焚場、天井裏、烟筒等ハ毎月三回以上掃除スヘシ、但シ掃除ノ日時ハ豫メ所轄警察官署ニ届出ツヘシ

同一規則ニシテ地方ヲ異ニスルニ依リ、其ノ間ニ大ナル寬嚴アルハ上記ノ如シ。尙多數地方ニ於テ行ハルル黄燐摺付木製造取締規則ニ付左ニ大阪府及兵庫縣ノ事例ヲ掲ク。

兵庫縣

(一) 黄燐ヲ用キテ摺付木ヲ製造セントスル者ハ製造所ノ圖面ヲ添へ、地主、隣地主、隣地家主、連署ノ上所轄警察署ヲ經テ其ノ許可ヲ本廳ヘ願出ツヘシ

(二) 黄燐摺付木製造所ハ石又ハ煉瓦ヲ以テ之ヲ築造スヘシ、但シ周圍ノ家屋六十間以上ノ距離アル場所ニ於テハ木造建築ヲ用フルモ妨ナシ

- (三) 調製室、製品貯藏室及原料室ハ各之ヲ區劃シ、又乾燥室ハ之ヲ別棟トナシ、瓦斯ヲシテ他室ニ飛散セシメサル様戶外ニ導ク装置ヲ爲スヘシ
- (四) 工場内ハ常ニ窓戸ヲ開放シ空氣ノ流通ヲ良クスヘシ
- (五) 齒牙及齒根ニ疾患アル者ヲシテ黃燐若ハ其ノ合劑ノ取扱ヲ爲サシムルコトヲ得ス

(六) 工場内ニ於テハ一切飲食ヲ爲サシムヘカラス

(七) 合劑中ニハ合劑ノ量百分ニ付黃燐十分以上ヲ含マシムヘカラス

大阪府(明治三十年十月)

- (一) 黃燐摺付木ハ免許ヲ得タル製造所ノ外ニ於テ製造スヘカラス
- (二) 黃燐摺付木製造所ヲ設置セントスル者ハ、左ノ諸件ヲ具シ當廳ノ允許ヲ受クヘシ
  - (一) 製造所ノ位置及番地、反別若ハ坪數ヲ記シタル圖面
  - (二) 場内各室ノ配置及構造方法書
  - (三) 製造所ノ周圍ヨリ四隣三十間以内ノ地主、家主、現住者ノ承諾書

(四) 防火及避難ノ装置

(五) 廢棄物ノ處置方法並廢棄所ヲ設クルトキハ其ノ構造方法

(六) 汚水排除ノ方法

(三) 製造所ハ石又ハ煉瓦石ヲ以テ築造スヘシ、但シ周圍家屋トノ間ニ六十間以上ノ距離ヲ保ツモノニ限り木造建家ヲ用ウルコトヲ得

(四) 調製室、製品貯藏室及原料室ハ各之ヲ區劃シ、又乾燥室ハ之ヲ別棟ト爲シ、瓦斯ヲシテ他ニ飛散セシメサル様戶外ニ導ク装置ヲ爲スヘシ

危害豫防上必要ト認ムルトキハ製造所ノ全部又ハ一部ノ改修ヲ命スルコトアルヘシ

(五) 製造所ヲ改修又ハ増設セントスルトキハ更ニ允許ヲ受クヘシ  
新設改修又ハ増設工事落成シタルトキハ管轄警察署又ハ分署ニ届出検査ヲ受クヘシ

(六) 製造主自ラ製造所ヲ監理シ能ハサルトキハ、相當ノ代理者ヲ定メ豫メ認可ヲ受クヘシ

(七) 工場内ハ常ニ窓戸ヲ開放シ空氣ノ流通ヲ良クスヘシ、  
黄燐摺付木ノ裸賣ヲ爲シ、又ハ許可ヲ得タル場所外ニ於テ其ノ箱詰ヲ爲スヘ  
カラス

藥品類ヲ取扱フ職工ノ上衣前掛等ハ時々交換又ハ洗濯セシムヘシ  
工場内ハ常ニ清潔ニシ藥品類ノ取扱ヲ爲ス場所ノ床壁及使用器具等ハ特ニ  
洗滌又ハ拭淨スヘシ、

工場内ノ廢棄物ハ一定ノ場所外ニ投棄又ハ堆積スヘカラス、

(八) 齒牙及齒根ニ疾患アル者ヲシテ黄燐若ハ其ノ合劑ノ取扱ヲ爲サシムルヘカ  
ラス

(九) 製造主及代理者ハ特ニ左ノ事項ヲ遵守スヘシ、

(一) 原料室ニハ原料取扱者ノ外濫リニ他人ヲ入ラシムヘカラス

(二) 助燃性藥品ト可燃性藥品トハ同一ノ場所ニ貯藏スヘカラス

(十) 合劑中ニハ合劑ノ量百分ニ付黄燐十分以上ヲ含マシムヘカラス、

以上ノ規則ヲ比較スルモ其ノ取締上自ラ寬嚴ノ差大ナルモノアルヲ見ルヘシ。

### 第三項 工場ノ臨檢

汽罐汽機ノ臨檢ニ關シテハ、通常定期及臨時ニ分チ之ヲ爲ス旨ヲ規定シタルモ  
ノ多キモ、工場其ノ他ノ建設物ニ對スル檢査ニ付テハ規則中規定アルモノ少シ、其  
ノ之レアルモノニ付一ニノ事例ヲ掲ク。

大阪府ハ製造場取締規則施行心得(明治二十九年二月)中ニ製造場ハ毎月二回以上、警部又  
ハ巡查部長ノ内一回以上、巡回臨檢シ、左ノ事項ニ注意スヘシト規定セリ。即チ

(一) 許可ヲ得スシテ増設又ハ變更スルモノナキヤ否ヤ、 (二) 場内ハ清潔ナルヤ否

ヤ、 (三) 非常口非常階段等ハ急變ニ際シ支障ナキヤ否ヤ、 (四) 有害瓦斯ヲ發散ス

ルモノハ其ノ防除ノ方法宜シキヤ否ヤ、 (五) 汚水ヲ生スルモノハ其ノ排除ノ方

法宜シキヤ否ヤ、 (六) 汚物ヲ生スルモノハ其ノ除却ノ方法宜シキヤ否ヤ、 (七) 發

火ノ虞アル製造場ニ在テハ防火ノ方法備ルヤ否ヤ、 (八) 製品燃料等ハ許可部内

ノモノナルヤ否ヤ、 (九) 建造場其ノ他火爐等崩壞ノ虞ナキヤ否ヤ、 (十) 機關手油

差火夫又ハ電機手ハ届出濟ノモノナルヤ否ヤ、 (十一) 汽罐ノ最大汽壓、發電機及電動

機ノ最大電壓又ハ電流ヲ超過セサルヤ否ヤ、 (十二) 安全瓣ノ封鎖ハ異狀ナキヤ否



ヤ又秤鉢ノ重量ニ異狀ナキヤ否ヤ、(三)汽罐ノ給水ハ驗水硝子管ノ中央ニアリヤ否ヤ、(四)汽機ノ運動圓滑ナラス又ハ非常ノ音響ヲ發スルコトナキヤ否ヤ、(五)汽罐ノ各部又ハ汽機ノ諸部ヨリ蒸汽又ハ水ノ漏洩スル等ノコトナキヤ否ヤ、(六)煙突ノ掃除ハ行届居ルヤ否ヤ又ハ黑煙繼續噴出スルコトナキヤ否ヤ、(七)電線ハ積極消極ノ二線相混交スル等ノコトナキヤ否ヤ、(八)電線ハ水氣ニ浸潤シ又ハ金屬ニ接觸スル等ノコトナキヤ否ヤ、(九)電線ニ取付アル安全器(ローセツト)ハ固著シ居ルヤ否ヤ、(十)電線ニ取付アル開閉器ハ半開閉ニナリ居ル等ノコトナキヤ否ヤ、(十一)電線ノ安全器(ローセツト)又ハ開閉器ニ塵芥等著シク附着シ居ラサルヤ否ヤ、(十二)職工ノ寄宿舎ハ清潔ナルヤ否ヤ、

以下直接建造物ニ關係ナキモ參考ノ爲掲記ス

(一)職工ノ寄宿舎ノ夜具食物等ハ衛生上有害ナラサルヤ否ヤ、(二)寄宿職工ノ風儀狀態及雇主トノ關係、(三)一般職工ノ風儀狀態及雇主トノ關係、(四)職工ト他ノ雇主トノ關係、(五)職工ノ集會又ハ秘密ノ運動ヲ爲スモノナキヤ否ヤ、(六)職工ノ流行性疾病其ノ他業務上ノ死傷者ナキヤ否ヤ、(七)製造場ニ對シ近隣故障

ノ有無アレハ其ノ理由、(三)其ノ他一般ノ危害衛生秩序ニ關スル事項

愛知縣ニ於テハ工場及寄宿舎取締規則施行手續中左ノ事項ハ毎月二回以上臨檢視察スルヲ要スト規定セリ。

- (一)工業主ハ異動ナキヤ否ヤ、(二)非常用器具ノ種類、員數ノ不足、破損又ハ使用ニ堪ヘサルコトナキヤ否ヤ、(三)非常口及非常階段等ハ急變ニ際シ支障ナキヤ否ヤ、(四)發火ノ虞アル製造所ニ在リテハ防火ノ方法完備セルヤ否ヤ、(五)建造物其ノ他火爐、煙筒等崩壞ノ虞ナキヤ否ヤ、(六)使用スル燈火ハ安全ナリヤ否ヤ、(七)寄宿舎寢室ハ二人ニ付一坪ナリヤ否ヤ、(八)寄宿舎内ハ清潔ナリヤ否ヤ、(九)汚物汚水ノ生スルモノハ其ノ除却掃除ノ方法完備セルヤ否ヤ、

以下建造物ニ直接ノ關係ナキモ參考ノ爲掲記ス

- (十)工場及寄宿舎ニ於テ猥褻ナル放歌又ハ風俗ヲ紊ル等ノ行爲ナキヤ否ヤ、(十一)工場主ハ毎月二回以上職工又ハ徒弟ノ健康診斷ヲ正當ニ施行スルヤ否ヤ、(十二)職工又ハ徒弟ヲ過度ニ酷使セサルヤ否ヤ、(十三)雇主ト職工間ニ於ケル關係、(十四)其ノ他一般ノ危害衛生ニ關スル事項、(十五)

### 第三節 汽罐汽機ノ取締

汽罐汽機取締ニ關スル規則ハ各府縣周ネク之ヲ設ク、最先ニ此種ノ取締規則ヲ設ケタルハ長野(明治十九年三月)ニシテ東京(警視廳明治二十七年四月)之ニ次ク、其ノ他ハ和歌山、靜岡、大分、鳥取、北海道、愛知、大阪、神奈川及京都ノ順序ヲ以テ發布セラレタリ。何レモ明治二十七年乃至三十年ノ交トス。而シテ其ノ最モ遅ク之ヲ設ケタルハ明治三十八年六月ノ山梨縣ナリトス。

各府縣ニ於ケル取締規則ノ内容ハ、略大同小異ナルヲ以テ、左ニ準則トモ見ルヘキ規程ヲ掲クヘシ。

- 一 汽罐汽機ヲ設置セントスル者ハ其ノ定着ニ係ルモノハ据付前其ノ可搬ニ係ルモノハ使用前、所轄警察署又ハ警察分署ヲ經テ願出認可ヲ受クルニ非サレハ工事ニ着手スルコトヲ得ス。其ノ増設變更ヲ爲サントスルトキハ其ノ事由ヲ記載シ認可ヲ受クルコトヲ要ス。
- 一 汽罐並汽機ハ据付又ハ使用前管轄警察署ヲ經テ届出ヲ爲シ、検査ヲ請ヒ検査

證及罐體ノ檢印ヲ受クヘシ、検査ヲ受クルニ非サレハ使用スルコトヲ得ス。

- 一 正當ノ事由ナクシテ一定ノ事項(事項ハ)ニ觸ルルモノハ其ノ認可ノ失效ヲ命スヘシ。

- 一 汽罐並汽機ハ検査證ニ表示ノ期限及常用汽壓ヲ超過シ使用スルコトヲ得ス。
- 一 汽罐又ハ汽機ニ異狀ヲ生シタルトキハ其ノ使用ヲ中止シ、速ニ其ノ原因及模様ヲ詳記シ、管轄警察署ヲ經テ當廳ニ届出ツヘシ、但シ此ノ場合ニ於テハ検査ヲ受クルニ非サレハ使用ヲ繼續スルコトヲ得ス。

- 一 汽罐並汽機カ製造所若ハ工場建物ノ毀損ニ依リ、又ハ煤烟騒響其ノ他ノ發生物ニ依リ、危険ナルカ若ハ公益ヲ害スル虞アリト認ムルトキハ除害ノ裝置ヲ命シ、若ハ其ノ使用ヲ停止スルコトアルヘシ。

- 一 汽罐並汽機ノ検査ハ定期臨時ニ二種ニ分チ、定期検査ハ使用期限満期ノ際ニ於テ之ヲ行ヒ、臨時検査ハ必要ト認ムルトキニ於テ之ヲ行フ、但シ定期検査ノ日限ヲ豫メ通知スヘシ。

汽罐汽機取締規則又ハ製造所取締規則ニ依リ、若ハ單行ノ煙突取締規則ヲ以テ

烟突ノ取締ヲ爲ス所尠カラズ。殊ニ石炭ヲ使用スル烟突ハ他ノ燃料ヲ使用スルモノヨリ其ノ取締嚴重ナリ。例ヘハ京都府及大阪府ニ於テハ是カ制限ヲ設ケ石炭ヲ使用スル煙突ハ高六十尺以上普通四十尺以上ト制限スルモノ多シトシ其ノ材料ハ煉瓦石又ハ鐵板ニ限リ尙其煉瓦石造ニ係ルモノハ必ス避雷針ヲ裝置スヘシトセリ。又大阪府ノ如キハ烟突ヨリ十五分間以上黒烟ヲ續出セシムルコトヲ禁止シ其ノ責ニ任スル者ハ機關取扱主任者ト爲セリ。而シテ單行ニ烟突若ハ烟筒取締規則ヲ發布セルハ神奈川、新潟、埼玉、群馬、千葉、茨城、栃木、静岡、福島、岡山、廣島及和歌山ノ十二縣ナリ。

#### 第四節 職工ノ雇入及傭使

職工ノ雇入及周旋ニ關シテハ從來種々ナル弊害アリ。即チ無智ノ婦女幼少者ヲ甘言ヲ以テ誘ヒ工場ニ周旋シタル後工場ノ待遇、賃銀等ノ豫期ニ反スル爲工女ノ意ニ滿タス歸國ヲ欲スルトキハ一切ノ手數料、募集費ヲ負擔セシムル旨ヲ強ヒ、遂ニ服務ノ止ムヘカラサルニ至ラシメ。又ハ職工ノ不足ヲ奇貨トシ甲工場傭使

中ノモノヲ誘引シ、姓名年齢ヲ偽ハラシメテ乙會社ニ周旋シ、多額ノ手數料ヲ得ルコトアリ。又ハ工女ノ老猾ナルモノト連合シ、職工募集ノ際ニハ故ラニ遠路之ニ應セシメタル後暫時ニシテ之ヲ招還シ、又更ニ他ノ會社ノ募集ニ應セシメ、彼此ノ間ニ周旋料ヲ貪ルモノアリ。或ハ又惡辣ナル人事周旋業者ノ誘拐ニ逢ヒ少許ノ前借金ヲ得テ雇主不定ノ出稼ヲ爲シ其ノ郷里ニ於ケル父母ハ全ク其ノ子女ノ居所ヲ知ル能ハス不安ノ念ニ堪ヘスシテ警察ヘ保護願ヲ提出スル等ノ實例ニ乏シカラス。或ハ又其ノ雇傭契約ニ於テ徒弟契約ノ方式ニ從ヒ十箇年間業務見習ノ爲二十五圓位ノ給料ニテ雇ハルルコトヲ約シ、初メ十圓位ヲ前借シ、其ノ拾圓ノ金額ハ十箇年後ニ於テハ元利合計貳拾五圓ナリトシテ十箇年ノ只奉公ヲ爲シテ逐出サルル者等アリ。或ハ又學齡中ノ少女等ヲ誘拐スルモノ往々ナキニアラス。其ノ他職工ノ雇入解雇募集ニ伴フ各種ノ弊害底止スル所ヲ知ラス。此等ノ取締ニ付テハ既ニ各府縣ニ於テ職工募集取締規則若ハ周旋業取締規則ニ依リ相當矯正ノ途ヲ設ケタリト雖、各府縣取締ノ寬嚴必スシモノナラサルノミナラス、全ク斯ル規定ヲ設ケサル府縣アリ、即チ東京、長崎、新潟、群馬、千葉、長野、福島、高知、福岡、熊本、宮

崎、及沖繩ノ一府十一縣是ナリ。其ノ他ノ府縣ハ名稱ヲ異ニスルモ何レモ取締規則ヲ設ケタリ、以下先ツ職工ノ雇入ニ付略述スヘシ。

第一項 職工ノ雇入

既述セル如ク職工ノ雇入、解雇及周旋ニ付テハ現今各府縣ニ於テ取締規則ヲ設ケテ、之カ取締ヲ爲スモノ多シ而シテ其ノ内容ニ至リテハ必スシモ一様ナラス、其ノ適用ノ範圍ノ如キモ或ハ工場ノ規模大小ニ依ラサルモノアリ、或ハ十名以上ノ職工ヲ有スル工場ニ使用スル場合ニ限ルモノアリ、或ハ三十名以上ノ職工ヲ雇傭スル工場ニ使用スル場合ニ限ルモノアリ、(三重)或ハ他府縣ニ於テ使役スル職工ヲ縣内ニ於テ募集スル場合、(宮城、青森、秋田、福井、石川、富山、島根、廣島、和歌山、香川、愛媛、大分、鹿兒島)ニ限ルモノアリ。或ハ又職工ノ募集ノミナラス、鑛山坑夫、土木水利事業人夫、又ハ漁業労働者ノ募集等ヲモ併セテ取締ルモノ(巖手、山形、秋田)アリト雖大體次ノ範圍ヲ出テサルモノナリ。

(一) 職工ヲ募集セントスル者ハ所轄警察官署ヲ經テ願出許可ヲ受クヘシトス、其ノ願書ニ記載スヘキ事項左ノ如シ、

- (一) 募集區域及期間
  - (二) 豫定人員
  - (三) 應募者ノ應募及歸國旅費宿舍並賄ニ關スル方法
  - (四) 工賃額及疾病、死傷、保護ニ關スル方法
  - (五) 契約年限、就業時間、休日並年限内解雇ニ關スル方法
  - (六) 賞與、懲戒、貯金ニ關スル方法
  - (七) 教育ニ關スル方法
  - (八) 募集取扱人ノ本籍住所氏名
- (二) 職工募集ニ對スル制限
- (一) 募集者及募集取扱人ノ資格ニ付テハ各府縣ニ於テ一定ノ制限アリ、例セハ(一) 猥褻、姦淫、強窃盜、詐欺取財又ハ略取誘拐罪等ノ破廉耻罪ニ處セラレ改悛ノ見込ナキ者、(二) 瘋癲白痴者、(三) 労働者募集規則又ハ周旋業者取締規則ノ違反者ニシテ其ノ情重キ者等ニ對シテハ全然募集ノ許可ヲ與ヘサルト同時ニ募集取扱人タルコトヲ得ストシ

- (二) 又他ニ雇傭契約中ノ者ニ對シテハ其ノ雇主ノ承諾ナクシテ募集又ハ勸誘スルコトヲ禁シ
- (三) 又未成年者タル職工ヲ雇入レントスル場合ニハ法定代理人ノ承諾證ヲ要ストセリ

(三) 應募者名簿及募集事務所

募集事務所ハ各府縣ノ規定ニ依リテ見ルニ、必スシモ之カ設置ヲ強要セサルモノアリ、例セハ宮城縣ノ如キハ縣内ニ必ス一個ノ事務所ヲ置クコトヲ命ジ、其ノ事務所ニハ應募者名簿ヲ備付クルコトヲ要ストナセトモ秋田縣山形縣等ニ於テハ必スシモ之カ設置ヲ強要セス。應募者名簿トハ募集者及募集取扱人ノ備付クル帳簿ニシテ之ニ法定事項ヲ記載スルコトヲ要スルモノナリ、之モ募集事務所ト同シク必スシモ之カ備付ヲ強要セサル府縣アリト雖例セハ栃木、三重、靜岡、山梨、滋賀、福井等ノ諸縣多クノ府縣ニ於テ之カ備付ヲ必要トセリ(石川、宮城、巖手等ノ諸縣)

(四) 出發届

相當ノ應募者數ヲ得タル時ハ募集取扱人ノ名ニ於テ所轄警察官署ニ向ツテ三日乃至五日前ニ出發届ヲ提出ス、此ノ出發届ニハ未成年者ニ在リテハ法定代理人ノ承諾書、有夫ノ女子ニ在リテハ夫ノ承諾書ヲ添付スルコトヲ要ストセリ。其ノ出發届ニハ應募者ノ生年月、本籍地、住所、地、出發前集合地等ヲ記載セリ、斯クテ所轄警察官署ノ檢視ヲ經テ其ノ許可ヲ得タル後ニ非サレハ勞役地ニ出發スルコト能ハサル規定ナリ。

(五) 解雇ニ關スル規定

解雇ニ關シテハ規定ヲ設クルモノハ甚タ少シト雖、正當ノ理由アルトキハ契約期間内ト雖當事者ノ双方ヨリ契約ノ解除ヲ爲スコトヲ得ヘシト爲シ、又當事者ハ職工ニ對シ正當ノ理由アルトキハ契約期間内ト雖歸郷ヲ拒ムコト得サル旨ヲ規定シタルモノアリ(大阪府又出發届提出後募集契約ヲ解除シタルトキハ三日以内ニ出發届出ヲ爲シタル警察官署ニ届出且其ノ事由ヲ應募者名簿ニ記入スヘキコトヲ命シタルモノアリ(宮城縣))

以上ハ勞役者募集取締規則ノ大要ナルカ、神奈川縣、埼玉縣、茨城縣等ニ於テハ人

事周旋營業取締規則ナル名稱ノ下ニ、労働者募集ニ關スル取締ト労働者藝娼妓酌婦、奴婢等ノ口入紹介營業トヲ併セテ規定セリト雖、此ノ兩者ハ明確ニ區別スヘキモノナリ。即チ(一)労働者ノ募集ハ一時的の行爲ニシテ營業ト見ルヘキモノニアラス、然ルニ労働者奴婢等ノ口入周旋ハ永續的ニシテ營業ノ性質ヲ有シ現ニ府縣營業稅ヲ賦課シオレリ。(二)前者ハ傭者自身又ハ其ノ委任代理人之ヲ行フニ反シテ後者ハ傭者又ハ其ノ代理人之ヲ行フコトナク周旋業者カ職工奴婢等ヲ傭者又ハ其ノ代理人ニ口入周旋スル行爲ナリ。(三)前者ハ積極的ニ廣告其ノ他ノ方法ヲ以テ一時ニ多數労働者ヲ勧誘スルコトヲ其ノ本旨トナシ、後者ハ消極的ニ個々ノ労働者ノ要求ニ應ジテ之ヲ傭者ニ紹介スルニ止マルヲ普通トス。斯ノ如ク此等兩者ハ全然其ノ性質ヲ異ニスルヲ以テ全く別個ノ規定ニ依リテ律スヘキモノナリ。各府縣ニ於ケル職工募集及周旋取締ニ關スル規定ハ大略叙上ノ範圍ヲ出テス、右ニ依リ略其ノ内容ヲ窺知シ得ヘシト信ス。

第二項 職工ノ傭使

職工ノ傭使ニ付テハ各府縣共特ニ之カ取締ニ關スル規則ヲ設クルモノナシ、唯

兵庫及奈良ノ二縣カ職工募集ニ關聯シテ一ニ傭使ニ關シ規定スル所アルモ、其ノ他ニ在リテハ一ニ工業主ノ自由契約ニ放任セリ。左レハ大工場ニ於テハ各自任意ニ工場規則ヲ設ケ、工場内ニ於ケル就業ノ順序、雇傭契約ノ要領賞罰ノ方法、疾病負傷救済ノ方法、其ノ他職工ノ就業方法並其ノ心得ニ必要ナル事項ヲ定ムルヲ例トス。今左ニ兵庫奈良兩縣ニ於ケル職工傭使規程ノ大要ヲ記サン。

兵庫縣ニ於テハ明治二十九年十二月職工營業主及紹介人取締規則ヲ發布セリ其ノ要領左ノ如シ。

- 一 職工ハ營業主營業主トハ職工ヲ傭役スル各種製造場ノ營業主ヲ云フニ對シ族籍住所、氏名、年齢ヲ詐稱スヘカラス、職工タラントスル者紹介人ニ對スルトキ亦同シ、
- 一 職工ハ營業主ニ對シ同盟シテ休業若ハ罷業ヲ爲スヘカラス
- 一 職工ハ營業主若ハ之ニ代ルヘキ者ノ適當ナル命令ニ違背シ又ハ強迫ノ所爲アルヘカラス
- 一 有期無期ヲ論セス、被傭中ノ職工及雇人ハ其ノ傭使ヲ罷メタル後ニ非サレハ

- 一 濫リニ他ノ職工又ハ雇人ト爲ルコトヲ得ス。
- 一 職工就業年限ノ契約ヲ爲ストキハ滿三年以内トシ、滿期後雇ヲ繼續スルトキハ毎回二年以内ニ限ルヘシ
- 一 警察官署ハ各工場ニ對シ必要ニ際シ期限ヲ定メ職工ノ名簿提出ヲ命スルトアルヘシ
- 一 營業主ハ職工雇人ニ對シ過度ノ使役若ハ不當ノ取扱ヲ爲スヘカラス、職工雇人ヨリ契約又ハ慣行ニ違背セサル解雇ヲ求ムルトキハ營業主之ヲ拒ムコトヲ得ス
- 一 八年未滿ノ兒童及麻疹、百日咳、疥癬、膿漏結膜炎其ノ他多病ノ者ハ職工ト爲スヘカラス
- 一 十二年未滿ノ職工ニ拂渡ス日々ノ工賃ハ禁通用ト記シタル切符若クハ通帳ニ拂渡ス金額ヲ記入シテ交付シ置キ、父母、兄弟、後見人等兒童ノ保護者タル者ノ請求ニ從ヒ現金ト交換スヘシ、但シ保護者ヨリ毎日現金ニテ支拂ノ請求アルモノハ此ノ限ニ在ラス

- 一 職工ヲ寄宿セシムル工場ニハ常任醫師ヲ聘用若ハ囑託シ、職工等ノ疾病ヲ治療セシメ且常ニ健康ヲ保護スルコトニ注意スヘシ
  - 一 營業主ハ職工雇人ノ死傷者又ハ家族ヲ救済スル方法、賞與、貯金竝教育ニ關スル方法ヲ設定スルヲ要ス
  - 一 寄宿舎ノ職工ニ對シテハ毎日相當ノ時間ヲ定メテ適當ノ運動ヲ爲サシムルコトヲ要ス
  - 一 男女ノ職工ヲ寄宿セシムルトキハ寄宿舎ノ區別ヲ嚴ニシ、男女ノ交通ヲ遮斷スヘシ
- 奈良縣ニ於テハ工場及紹介人取締規則中職工傭使ニ關スル規定ヲ設ケ紡績製絲、燐寸、織布ノ工場主及職工ニ之ヲ適用セリ、大要次ノ如シ。
- 一 工場主ハ職工名簿ヲ調製シ職工ヲ雇入レタルトキハ其ノ原籍、身分、氏名、年齢及雇入ノ年月日ヲ記載シ置クヘシ
  - 一 滿十年未滿ノ幼者ヲ職工ニ雇入ルルコトヲ得ス滿十年以上十六年未滿ノ幼者ヲ職工ニ雇入ントスルトキハ保育者又ハ後見人若ハ父兄ノ承諾ヲ要ス

- 一 滿十年以上十二年未滿ノ職工ハ一日八時間以上並夜間就業セシムルコトヲ得ス
- 一 疾病若ハ正當ノ事故ニ依リ休業又ハ解雇ノ請求アルトキハ濫リニ之ヲ拒ムコトヲ得ス
- 一 職工ニ宛テ工場又ハ寄宿舎ニ到着シタル信書ハ即時本人ニ傳達スヘシ
- 一 職工ヲ過度ニ使役シ又ハ之レヲ苛酷ニ取扱フヘカラス
- 一 職工寄宿舎ハ男女ノ區劃ヲ爲シ季節相當ノ寢具類給與並取締ノ方法ヲ規定シ夜間外出ノ門限ヲ定メ所轄警察署ヘ届出ツヘシ
- 一 職工寄宿舎ニハ男女トモ各取締人ヲ置キ其ノ氏名ヲ所轄警察署ヘ届出ツヘシ取締人不適當ト認ムルトキハ之カ改任ヲ命スルコトアルヘシ
- 一 工場ニハ使用スル職工數ヲ斟酌シ相當ノ病舎ヲ設ケ醫師ヲ聘用シ患者アルトキハ速ニ收容治療セシムヘシ
- 一 痲疹百日咳疥癬感染性結膜炎肺結核患者ハ病室ヲ區劃スヘシ
- 一 醫師ノ氏名ハ所轄警察官署ニ届出ツヘシ改任シタルトキ亦同シ

- 一 職工保護及衛生上ニ關スル事項ニ付テハ警察官吏ノ命令ニ背クコトヲ得ス
  - 一 雇役契約年限内ハ其ノ雇主ノ承諾ヲ得ルニ非サレハ他ノ工場ニ雇ハレ若ハ募集ニ應スルコトヲ得ス
  - 一 工場主ニ對シ原籍身分氏名年齢ヲ詐稱シ又ハ同盟シテ休業若ハ罷業ヲ爲スヘカラス
  - 一 工場主若ハ之ニ代ハルヘキ者ノ適當ナル命令ニ違背シ又ハ強迫ノ所爲アルヘカラス
- 以上ハ工場主及職工雇人ニ對シ其ノ傭使ニ關スル取締ノ内容ニシテ或ル事項ニ付テハ殆ント工場法ニ規定スヘキ事項ニ關シ尙之ヨリモ一層嚴重ニ取締ラレタルヲ見ルナリ。
- 惟フニ此等府縣カ既ニ明治二十九年同三十二年ノ頃ニ於テ上記ノ程度迄職工傭使ニ關シ取締ヲ爲スノ已ムヲ得サルニ至リタルハ現實ノ狀態ニ於テ默過シ難キモノアリタルニ基クヤ疑ヲ容レズ。



### 第五節 道府縣汽罐、汽機製造所及職工募集ニ關スル取締規則

工場取締ニ關シテハ一道三府四十三縣中一般的工場取締規則ヲ設ケタルモノ十一縣、特種ノ工場ニ對シテ單行特別ノ取締規則ヲ設ケタルモノ三十縣、汽罐汽機取締規則ノ外何等工場取締規則ヲ設ケサルモノ六縣ナリ。汽罐汽機ノ取締ニ關シテハ四十七道府縣中全ク其ノ規程ヲ設ケサルモノハ唯五縣ノミ、而シテ職工募集ノ取締ニ付テハ其ノ規程ヲ缺クモノ比較的多ク十四府縣ノ多キニ達セリ。今之ヲ一目瞭然タラシムル爲ニ左ニ表示セリ。

種目	汽罐汽機取締規則	製造所取締規則	職工募集取締規則
北海道	△同取扱手續、汽罐汽機据置場臺帳調製方ノ件	火工場取締規則、摺付木製造取締規則、煙火及導火線取締規則、原石油貯藏所及石油精製所取締規則、化學場取締規則、製造所管理ニ關スル布達、煙火取締規則、同執行心得、銜治、搬取締規則、同執行心得、魚獸化學場取締規則	職工募集取締規則
警視廳	△同執行心得	製造所管理ニ關スル布達、煙火取締規則、同執行心得、銜治、搬取締規則、同執行心得、魚獸化學場取締規則	△同執行心得
京都	△同執行心得	製造所管理ニ關スル布達、煙火取締規則、同執行心得、銜治、搬取締規則、同執行心得、魚獸化學場取締規則	△同執行心得
大阪	△同執行心得	製造所管理ニ關スル布達、煙火取締規則、同執行心得、銜治、搬取締規則、同執行心得、魚獸化學場取締規則	△同執行心得

種目	汽罐汽機取締規則	製造所取締規則	職工募集取締規則
神奈川	△同取扱内則	製造工場取締規則、煙突取締規則	人事周旋營業取締規則
兵庫	△同取扱内則	製造工場設置出願方ノ件、黃燐摺付木製造取締規則、同取扱心得、化學場取締規則、製造場其他取締ノ件	職工營業主及紹介人取締規則
長崎	△	火工場取締規則、煙火取締規則、摺付木製造取締規則、石油槽船取締規則、死獸取扱及剥皮化學製革營業槽船取締規則	同取扱内則
新潟	△	煙突取締規則、瓦斯取締規則、石油製造所、貯藏所取締規則、煙火爆發發賣品取締規則、導火線寸製造取締規則、有害瓦斯取締規則、工場ニ對シ距離制限ノ件	職工周旋業取締規則
埼玉	△同執行手續	工場取締規則、危險物製造販賣取締規則、同取扱手續、煙筒取締規則、煙筒取締規則施行ニ關シ注意ノ件、聽歌並化學所	
群馬	△同執行手續	工場取締規則、危險物製造販賣取締規則、同取扱手續、煙筒取締規則、煙筒取締規則施行ニ關シ注意ノ件、聽歌並化學所	
千葉	△同施行心得	煙火取締規則、同施行心得	
茨城	△同施行手續	煙火取締規則、獸類化學場取締規則、同施行手續、煙筒取締規則	
栃木	△	機業取締規則、煙突取締規則	紹介業者取締規則
奈良	△	△火工場取締規則	勞務者募集取締規則
三重	△	瓦斯煤煙塵埃ヲ發生スル工場建設取締ノ件、瓦斯製造供給營業取締規則、瀟乾燥場取締製造規則、煙火取締規則	紹介營業取締規則
愛知	△同規則準用ノ件	火工場取締規則、諸製造所及貯藏所取締規則、工場及寄宿舎取締規則、摺付木製造所取締規則、以上諸規則ノ執行心得、黃燐摺付木製造取締規則、煖爐及煙筒取締規則、煙火取締規則、瓦斯製造營業ニ關スル件	工場及紹介人取締規則、同取扱手續
静岡	△	諸製造所建設規則	
山梨	△	諸製造所建設規則	
滋賀	△同施行心得	諸製造所建設規則	同取扱心得

第二章 工場法制定以前ニ於ケル工場取締

岐阜	△同執行心得	石油、發動機取締規則、同執行心得、黄機拵付木製造工場取締規則、煙火取締規則、同執行心得	入口營業及職工募集規則、入口營業規則執行心得
長野	陸上汽機取締規則、同執行手續	工場取締規則、煙火取締規則、黄機拵付木製造取締規則	勞務者募集取締規則
宮城	△	煙火取締規則、製造場取締規則、化學製造場取締規則、拵付木製造取締規則、煙火取締規則、同取扱手續、化學場取締規則	勞務者募集取締規則
福島	汽機並汽機取締規則、同取扱手續	拵付木製造取締規則、煙火取締規則、同取扱手續、化學場取締規則	男女工募集及其ノ周旋ニ關スル件
巖手	△	工場設置規則	△
青森	原動機取締規則	工場設置規則	△
山形	原動機取締令	工場取締規則、煙火製造及販賣取締規則、拵付木製造所取締規則、化學場取締規則、勞役者取締令	勞役者募集取締規則
秋田	△同執行心得	煙火製造販賣取締規則、煙火打揚ケ出願方ニ關スル件、石油取締規則、同執行心得	勞役者募集取締規則
福井	△	黄機拵付木製造取締規則、練工場取締規則、煙火取締規則	勞役者募集取締規則
石川	△同執行心得	瓦斯製造場、貯藏場、石油再製場、及瓦斯又ハ電氣ヲ原動機トシテ使用スル製造工場建設ニ關スル取締規則、石油精(タンク)及石油貯藏ニ關スル取締規則、煙火取締規則、黄機拵付木製造取締規則、化學場取締規則	勞役者募集取締規則
富山	△同執行手續	煙火取締規則、同執行心得	△
鳥取	蒸汽機取締規則、同執行手續	煙火取締規則、同執行心得	△
島根	蒸汽機取締規則、同取扱心得	黄機拵付木製造所取締規則、銃砲火藥類取締法ニ關スル取締規則	職工勞働者募集取締規則
岡山	原動機取締規則、同取扱心得	拵付木製造營業取締規則、石油貯藏並運搬取締規則、煙火取締規則、同執行心得、煙筒取締規則	△
廣島	△同取扱心得	工場取締規則、煙筒取締規則	△
山口	△同取扱心得	黄機拵付木製造取締規則、化學營業取締規則、石油貯藏所取締規則	周旋營業並職工勞働者募集取締規則、同施行細則

和歌山	△同設置願ニ對シ注意方ノ件	製造所取締規則、汽機取締規則、煙火取締規則、同執行手續	職工募集ニ關スル件、紹介營業取締規則
徳島	△同取扱手續	製造所取締規則、同執行手續、工場取締規則、同執行手續	△
香川	發動機取締規則、陸上蒸汽機取締規則、同取扱手續	煙火取締規則、同取扱手續、瓦斯事業ニ關スル件、石油槽場取締規則	勞務者募集取締規則
愛媛	△同取扱手續	工場取締規則、黄機拵付木製造取締規則	△
高知	△	工場取締規則、黄機拵付木製造取締規則	△
福岡	△	危害品製造所設置規則、火藥取締規則	△
大分	△	火藥取締規則、同施行手續	紹介營業取締規則、職工其他勞働者募集規則
佐賀	△同取扱手續	黄機拵付木製造取締規則	△
熊本	△	工場取締規則	△
宮崎	△	他府縣ニテ職工募集ニ關スル心得、勞働者募集規則	△
鹿兒島	△	△	△
沖繩	△同取扱手續	△	△

備考△印ハ種目欄規則ト同規則タル略號

今之ヲ其ノ發布年月ノ最モ早キモノヨリ順次ニ列記スレハ左ノ如シ

第一 工場取締規則

第二章 工場法制定以前ニ於ケル工場取締

(一) 製造場取締規則

規則發布年月

明治十年五月(二十九年大改正ヲ行ヒ現行法トナル)

明治十四年八月(二十九年七月改正シテ現行法トナル)

明治二十九年(三十一年九月改正)

明治三十一年

明治三十二年七月

明治三十三年十二月

明治三十三年四月

明治三十五年一月

(二) 火工場取締規則

明治十六年十二月

明治十九年十一月

明治廿一年五月(四十年二月改正)

府名 大阪府 東京府 京都府 奈良縣 青森縣 三重縣 愛知縣 山形縣 長崎縣 愛知縣

(三) 燐寸取締規則

明治廿三年七月(二十四年七月改正)

明治廿四年二月

明治廿五年

明治廿七年十月

明治十九年三月

明治十九年十一月

明治十九年十二月

明治廿一年五月(四十一年二月改正)

明治廿三年八月

明治廿三年八月

明治廿三年九月(廿七年七月改正)

明治廿三年十月(四十二年一月改正)

明治廿四年五月

長野縣 佐賀縣 奈良縣 北海道 岐阜縣 長崎縣 福島縣 愛知縣 岡山縣 兵庫縣 石川縣 大阪府 靜岡縣

明治廿四年七月

明治廿四年九月

明治廿五年五月

明治三十一年七月(三十五年十二月改正)

明治三十二年九月

(四) 煙火取締規則

明治十七年六月

明治十八年(二十六年十二月改正)

明治十九年一月

明治廿年六月

明治二十年八月

明治二十年十一月

明治廿二年(二十九年七月改正)

明治二十四年九月

高知縣

長野縣

山形縣

岩手縣

新潟縣

山形縣

三重縣

岡山縣

東京府

静岡縣

長崎縣

大阪府

長野縣

明治二十六年十一月

明治二十八年四月

明治三十一年十月

明治四十年十二月

(五) 石油取締規則

明治二十四年四月

明治二十七年六月

明治三十一年五月

明治三十二年四月

明治三十四年七月

明治三十八年五月

(六) 魚獸化製造取締規則

明治十七年四月

明治二十二年五月(三十五年五月改正)

福島縣

宮城縣

石川縣

新潟縣

東京府

兵庫縣

石川縣

新潟縣

岡山縣

大阪府

長崎縣

兵庫縣

長崎縣

兵庫縣

明治二十三年二月

明治二十五年二月(三十六年九月改正)

明治二十八年四月

明治三十五年十二月

(七) 煙火取締規則

明治二十六年十二月

明治三十一年五月

明治三十三年三月

明治三十三年六月

明治三十三年十月

明治三十三年十一月

明治三十五年一月

明治三十八年五月

第二 汽罐汽機ニ關スル規則

愛知縣

東京府

福島縣

宮城縣

靜岡縣

廣島縣

福島縣

新潟縣

神奈川縣

千葉縣

埼玉縣

岡山縣

規則發布年月

明治十六年一月(三十三年一月改正)

明治十九年三月(三十四年三月改正)

明治二十一年十二月(三十三年七月改正)

明治廿一年十二月

明治二十四年十二月

明治二十六年三月(三十五年十二月改正)

明治二十七年四月

明治二十七年五月

明治二十七年六月

明治二十七年九月

明治二十七年十月(三十年十月改正)

明治二十七年(月不明)(三十四年六月改正)

明治二十八年二月

府縣名

福岡縣

長野縣

滋賀縣

廣島縣

奈良縣

島根縣

東京府

大分縣

和歌山縣

埼玉縣

香川縣

高知縣

鳥取縣



明治三十年一月四十三日十一月一部補足)

明治三十年七月

明治三十年九月(三十三年十二月改正)

明治三十年十月(三十三年六月改正)

明治三十一年一月(三十一年五月一部補足)

明治三十一年三月

明治三十二年三月(四十年八月改正)

明治三十二年十二月

明治三十二年

明治三十三年二月(四十二年十二月改正)

明治三十三年三月

明治三十三年五月

明治三十三年十月

明治三十三年十一月

鹿兒島縣

鳥取縣

香川縣

石川縣

和歌山縣

愛媛縣

岡山縣

福井縣

奈良縣

德島縣

滋賀縣

京都府

愛知縣

大分縣

明治三十四年三月

明治三十四年五月

明治三十五年七月

明治三十五年八月

明治三十九年一月

明治三十九年二月

明治三十九年十一月

明治四十年三月

明治四十年六月

明治四十一年四月

明治四十三年四月

第六節 汽罐、汽機、原動機各種工場及職工

取締ニ關スル職員及經費

宮城縣

埼玉縣

山梨縣

静岡縣

枋木縣

岩手縣

三重縣

秋田縣

山形縣

青森縣

島根縣

(一) 四十三年度ノ經費豫算

道廳及各府縣ニ於ケル汽罐、汽機、原動機、各種工場職工等ノ取締ニ伴フ四十三年度ノ經費豫算ハ全部ヲ通シテ

國庫支辨ノモノ 壹萬壹千六百貳拾七圓餘  
地方費支算ノモノ 六萬六千五百六拾八圓餘  
七萬七千八百九拾壹圓餘

總計

內

俸給 五萬參千九百六拾貳圓  
應費 壹千參百七拾六圓餘  
旅費 壹萬九千貳百四拾八圓餘  
雜給及雜費 參千參百五圓餘

ニシテ更ニ之ヲ細別スルトキハ

俸給ノ内

十一人

壹萬貳千四百八拾圓

技手

八十八人

參萬八千七百七圓

其他

參千參百七拾五圓

雜給及雜費ノ内

雇員給三人

四百參拾貳圓

囑託手當

六人

千四百貳拾四圓

其ノ他

千四百四拾九圓餘

トナル(總費及旅費ハ細)又前記ノ總經費即チ國庫支辨及地方費支辨ノ總額ヲ合シ壹千圓以上ノ豫算ヲ計上セル地方ヲ舉クレハ左ノ如シ

大 阪 府	一〇、六三〇、〇〇〇	警 視 廳(東京)	一〇、四四五、〇〇〇
兵 庫 縣	四、六六八、〇〇〇	愛 知 縣	三、五一九、〇〇〇
新 潟 縣	三、〇二二、〇〇〇	京 都 府	三、三八六、〇〇〇
靜 岡 縣	二、九二四、〇七〇	高 知 縣	二、五四〇、〇〇〇
愛 媛 縣	二、四三六、〇〇〇	滋 賀 縣	一、九八〇、〇〇〇
三 重 縣	一、九六六、五七〇	福 岡 縣	一、九二四、〇〇〇



神奈川縣	一九一七〇〇	長野縣	一、五六一、七五〇
宮城縣	一、四八一、二一〇	石川縣	一、四六〇、〇二〇
埼玉縣	一、四五七、〇〇〇	廣島縣	一、三四六、五〇〇
鹿兒島縣	一、二七二、〇九〇	長崎縣	一、一六三、六五〇
和歌山縣	一、一五五、二〇〇		

尙經費豫算ノ最モ少額ナルハ青森縣六拾參圓ニシテ宮崎及沖繩ノ二縣ハ此ノ種ノ豫算ヲ設ケス

(二) 職員ノ擔當事項及其ノ人員

職員ノ總數ハ專任百十人兼任百十六人合計二百二十六人ニシテ之ヲ擔當ノ事項ニ依リテ區別スルトキハ大要左ノ如シ

汽罐汽機ノ取締ニ從事スル者			
技師	兼專任	二六	人
技手	兼專任	三五	人
雇員、囑託及其ノ他	兼專任	十三	人

建築ニ關スル取締ニ從事スル者

技師	兼專任	一一	人
技手	兼專任	一十	人
屬	兼專任	一十	人
雇員、囑託及其ノ他	兼專任	八	人
工場及職工ノ取締ニ從事スル者		八一	人
技師	ナシ	十二	人
技手			
雇員其ノ他	專任	六	人

職工募集ノ取締ニ從事スル者

特ニ本項ノ事務ヲ擔任セシムル爲ニ專任ノ職員ヲ置キタル府縣ナシト雖各府縣警察部保安課ニ於テ之レニ關スル一切ノ事務ヲ管掌シ保安課長ノ下ニ警察署長、巡查部長、巡查アリテ各其ノ管轄地方ニ於ケル出稼労働者全般ノ風紀衛生及統計等ニ關スル事務ヲ擔任セリ、

化學工業及電氣ニ關スル事務ニ從事スル者

技師	兼任	三人
技手	兼任	二十一人
屬	專任	一人
雇員其ノ他	兼任	二十七人

(三)職員ノ配置

職員ハ東京及大阪ヲ除ク外、凡テ各府縣警察部ニ之ヲ置キ、其ノ擔當事務ニ從事セシメ、取締上必要アル場合ニハ隨時當該地方ニ出張セシムルコトトセリ。而シテ東京及大阪ハ市部各警察署ニ之ヲ配置シ、概ネ警察官ヲシテ其ノ任ニ膺ラシム。尙職員出張ノ爲旅費トシテ計上セル豫算額ハ各府縣ヲ通シテ一萬九千二百四十八圓餘ナリ。

(四)職員ノ履歷

工學博士ノ學位ヲ有スル者	一人	(囑託技師)
東京帝國大學工科大学卒業者	六人	(技師)

東京帝國大學醫科大學卒業者	一人	(同)
京都帝國大學工科大学卒業者	一人	(同)
高等工業學校卒業者	十七人	(囑託一人、技手十一人)
縣立工業學校卒業者	七人	(囑託一人)
千葉醫學專門學校卒業者	一人	(技手)
海軍機關學校卒業者	三人	(同)
商船學校卒業者	三人	(技師二人)
東京郵便電信學校卒業者	一人	(技師)
私立工手學校東京築地卒業者	三十三人	(囑託一人、技手三十二人)
其ノ他ノ私立工業學校卒業者	九人	(囑託一人、技手八人)
官私立工場及其ノ他ニ於テ實地ノ經驗ヲ有スル者	三十七人	(技手)
(其ノ他兼任者ヲ含ム)	百六人	

### 第七節 鑛夫ノ傭使

鑛夫トハ鑛業法ノ支配ヲ受クル鑛業即チ鑛物ノ試掘採掘及之ニ附屬スル事業(精鍊選鑛等)ニ従事スル勞役者ニシテ、其ノ員數ハ約二十三餘萬人、之ヲ十五人以上ヲ傭使スル工場ニ勞働スル職工數約六十三萬人ニ比スルトキハ約三分ノ一強ニ該當ス。而シテ此等鑛夫ノ多數ハ十六歳以上ノ男子ニシテ女子及十六歳未満ノ男女ハ總數ノ二割四分ニ過キス、此ノ割合ヲ十五人以上ノ工場職工中女子及十六歳未満ノ男女カ約七割以上ヲ占ムルニ比スルトキハ數ノ上ニ於テハ保護ヲ要スルノ程度較々低シト雖、鑛業法ハ工場法制定以前ニ於テ既ニ其ノ勞働ニ關スル大體ノ規程ヲ設ケタリ、即チ工場法以前ニ於ケル一種ノ勞役法トモ見ルヘキヲ以テ左ニ其ノ大綱ヲ掲ク。

鑛業法ノ定ムル所ニ依レハ採掘權者ハ鑛夫ノ雇傭及勞役ニ關スル規則ヲ定メ鑛山監督署長ノ許可ヲ受ケサルヘカラス、又鑛業權者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ鑛夫名簿ヲ備ヘ置キ、且鑛夫ヲ解雇シタル場合ニ於テハ其ノ請求ニ因リ雇傭ノ期間、

業務ノ種類、技能、賃銀及解雇ノ事由ヲ記載シタル證明書ヲ與フヘキ旨ヲ定メ、恰モ外國ニ於テ行ハル、職工證附與ノ義務ヲ規定セリ。其ノ他賃金支拂ニ付テハ、毎月一回以上期日ヲ定メ、通貨ヲ以テ賃金ヲ支拂フヘキコト又鑛夫自己ノ重大ナル過失ニ因ラスシテ業務上負傷シ、疾病ニ罹リ、又ハ死亡シタルトキハ命令ノ定ムル所ニ從ヒ鑛夫又ハ其ノ遺族ヲ扶助スヘキコトヲ規定セリ。又同施行細則第六十四條ニ於テハ鑛業法ニ依リテ定ムヘキ鑛夫ノ雇傭及勞役ニ關スル規則ニハ左ニ掲クル事項又ハ之ニ相當スヘキ事項ヲ定メ、鑛山監督署長ノ許可ヲ受クヘキコトヲ規定セリ、其ノ事項左ノ如シ。

- (一) 業務ノ種類、等級
- (二) 雇傭及解雇
- (三) 各種類及等級ニ於ケル賃金
- (四) 賃金支拂期日
- (五) 各種類ノ就業時間並其ノ交替ノ方法
- (六) 休業日其ノ他休業ニ關スル事項

(七) 年齢及婦女幼者ノ勞役ニ關スル制限  
(八) 賞罰ノ定メアルトキハ其ノ事項

尙礦夫名簿ニハ礦夫ノ氏名、生年月、本籍、履歴ノ要領、業務ノ種類、等級、雇傭及解雇ノ年月日并雇傭期間ヲ記載スヘキ旨ヲ定メ、鑛業法ニ依ル扶助ニ付テハ扶助規則ヲ定メ、鑛業ニ着手ノ日ヨリ三十日以前ニ之ヲ差出シ、鑛山監督署長ノ許可ヲ受クヘキ旨ヲ規定セリ、其ノ扶助ノ標準左ノ如シ、

- (一) 珍察費及治療費ハ其ノ實額
  - (二) 療養ノ爲休業中ハ其ノ日數ニ相當スル賃金ノ三分ノ一以上
  - (三) 葬祭料ハ十圓以上
  - (四) 遺族扶助料ハ死者ノ受ケタル賃金百百分以上ニ相當スル金額
  - (五) 不具廢疾者扶助料ハ其ノ賃金ノ百百分以上ニ相當スル金額
- 稼高ニ依リテ賃金ヲ定ムル場合ニ於テハ第二號第四號及第五號ニ記載シタル賃金ハ前三十日間ノ就業平均額ニ依リテ之ヲ定ムヘシ
- 鑛夫ノ傭使ニ關シ鑛業法ノ規定スル事項大體上記ノ如シ。而シテ其ノ鑛夫ノ

年齢、就業時間ニ就テハ何等規定スル所ナク、現今ニ於テハ鑛業主ノ定ムル勞役規則中ニ之ヲ規定セシメ、鑛山監督署長之ヲ許可スルニ止マルモノナリ。然レトモ鑛業法第七十九條ニ於テ、農商務大臣ハ命令ヲ以テ鑛夫ノ年齢及就業時間並婦女幼者ノ勞役ノ種類ヲ制限スルコトヲ得トノ規定アルヲ以テ、工場法ノ實施ニ伴ヒ權衡上右ニ關スル命令ヲ發布シ、工場法ト步調ヲ一ニシ、大體ニ於テ兩者ノ間齟齬ナキコトヲ期スルノ必要アルヘシト思考ス。

### 第八節 餘論

工場法制定以前ニ於ケル工場及職工ニ關スル規定ハ上述シタル所ニ依リ略其ノ大體ヲ窺フニ足ランカ。之ヲ要スルニ從來工場及職工ニ關スル取締ハ總テ之ヲ地方廳ニ一任シ、地方廳ハ時運ノ進歩ト各地ノ事情ニ依リ、須要ニ應シ警察令ヲ以テ便宜取締規則ヲ設ケタルモ、大凡東京、大阪、京都三府ノ規則ニ準據シタルモノ多シトス。而カモ其ノ地方ノ狀況ニ依リ頗ル斟酌シタル形跡アリ、其ノ寬嚴ノ程度必スシモ一ナラス、甲縣ハ極メテ峻嚴ナル取締ヲ爲スニ拘ハラズ、隣接シタル乙